193.7-U19ウ
1200500728733

羅馬書の研究

（下）

内村鑑三

159

創元社發行

始

193.7
U19
(3)

羅馬書の研究（下）

内村鑑三 著

創元社

文行所寄贈

羅馬書の研究（下）目次

第四十三講　ユダヤ人の不信と人類の救　一　第九章一—五節の研究……一
第四十四講　ユダヤ人の不信と人類の救　二　第九章、第十章の大意……九
第四十五講　ユダヤ人の不信と人類の救　三　第十一章の大意……一八
第四十六講　基督教道德の根柢　第十二章一節の研究……二七
第四十七講　基督教道德の性質　第十二章二節の研究……三七
第四十八講　基督教道德の第一　謙遜　第十二章三—八節の研究……四六
第四十九講　基督教道德の第二　愛　一　第十二章九、十節の研究……五六
第五十講　基督教道德の第二　愛　二　第十二章十一—十五節の研究……六五
第五十一講　基督教道德の第二　愛　三　第十二章十六—十八節の研究……七三
第五十二講　基督教道德の第二　愛　四　第十二章十九—二一節の研究……八二
第五十三講　基督教道德の第三　政府と國家に對する義務　第十三章一—七節の研究……九二
第五十四講　基督教道德の第四　社會の一員としての愛　第十三章八—十節の研究……一〇三

國立圖書館
昭和 24. 3. 28
寄贈

第五十五講　日は近し　第十三章十一―十四節の研究……一一〇
第五十六講　小問題の解決　第十四章以下の精神……一一九
第五十七講　パウロの傳道方針　第十五章十四節以下の研究……一二八
第五十八講　パウロの友人錄　第十六章一―二四節の研究……一三六
第五十九講　終結＝頌榮の辭　第十六章二五節以下の研究……一四五
第六十講　羅馬書大觀……一五四

羅馬書講演約說

第四十三講約說　パウロの愛國心……一六三
第四十四講約說　イスラエルの不信……一六九
第四十五講約說　神の攝理……一七三
第四十六講約說　聖き活ける祭物……一七七
第四十七講約說　基督教道德の性質……一八一
第四十八講約說　基督教道德其一　謙遜……一八七
第四十九講約說　基督教道德其二　愛……一九二

第五十講約說　愛の表顯……一九六
第五十一講約說　謙讓と宏量……二〇〇
第五十二講約說　愛敵の途……二〇五
第五十三講約說　政治と社會……二〇九
第五十四講約說　負債と其償却……二一三
第五十五講約說　終末と道德……二一六
第五十六講約說　小問題の解說……二二三
第五十七講約說　パウロの傳道方針……二二七
第五十八講約說　パウロの友人錄……二三二
第五十九講約說　終末＝頌榮の辭……二三九
第六十講約說　羅馬書大觀……二四四

羅馬書の研究(下)

第四十三講　ユダヤ人の不信と人類の救（一）

東京大学図書館

第九章一—五節の研究

羅馬書研究の初めに當つて、我等は此書の主文を三つの本館にたとへた。其中の第一本館は最大のもの、である。我等は八章までの研究を終へた、即ちともかくも此第一本館の大樣を眺め終つたのである。之よりは第二の本館に足を踏み入れねばならない。換言すれば、第八章までに於て個人の救は論じ盡されたれば、第九章よりはイスラエル及び人類の救の問題に入るのである。

羅馬書は大著述であると言ふ、たしかにさうである。併し之は內容より云うたので、分量より云うたのではない。日本文に於て二萬餘字、これを『聖書之研究』誌上に印刷すれば其の三分の一を滿たすに過ぎない。文字に含まるゝ思想は高大深遠であるが、文字の數よりのみ云へば一小論文たるに過

ぎない。或は多忙の生涯を送つたパウロのことであるから、一日を以て一氣呵成に草し終つたかとも思ふ。當時彼はコリント市に滯在して居たのである。第十六章二十二、二十三節に左の如き挨拶が述べてある。

此書を筆けるテリテオ我れキリストに於て汝等に安きを問ふ。我と全會の寓主ガヨス汝等に安きを問へり。邑の庫司エラストまた兄弟クワルト汝等に安きを問へり。

彼はガヨスと云ふ相當の身分ある人の家に客となつて居た。そして或日書記テリテオに口授して此書翰を認めしめた。多分主人ガヨス、市の庫司（今日の語で云へば收入役、會計課長等の類か）エラスト等は傍聽しつゝあつたであらう。パウロは個人の救を論じて次第に高調に達し、遂に八章末尾の大凱歌となつて、一先づ休憩したであらう。

休憩の後ちパウロの口授はまた始まつた。書記テリテオも傍聽者も、彼の熱情益々燃えたつことと思つたであらう。然るに意外なるかな、彼の樣子は全く一變してゐた。言ひがたき苦悶が彼の心を占めつゝあるが如く見えた。悲痛が彼の表情に漲つた。人々は皆その意外に驚いたであらう。その驚きを破るが如くに、彼は先づ次の如く口授した。

我はキリストに在りて眞實を語る、我は僞らず、我が良心は聖靈にありて共に證す、我に大なる憂ある事を、我が心に絶えざる痛ある事を。我は思ふ、我が兄弟、我が骨肉のためならんにはキリストより絶れてアナテマ（詛はれし者、滅亡に定められし者）たるも可なり。（一―三節改譯）

彼は先づ自己が眞實を語りて虛僞を語らざることを强調する。「キリストにありて」眞實を語ると云ひ我の「良心」が其事柄の證明者であると云ひ、しかも其の證明は「聖靈にありて」の證明であると云ふ。然らば彼がキリストにありて眞實を語り、そして彼の良心が聖靈にありて證する事柄は何であるか。それは彼に「大なる憂」があり又彼の心に「絶えざる痛」のあると云ふ一事である。此事は人は認めずとも、又人の中に一人の證明者はなくとも、これ我心の實際の感情であつて、我良心と聖靈とは慥に之を知り之を證すると彼は云ふのである。然らば彼の此憂、この痛は何のための憂、何の故の痛ぞ。

パウロは其の事を明白には云はない。感情の火彼のうちに燃えて、彼は直ちに第三節の强き語を發してしまつたのである。此節については種々の見方がある。しかしその同胞たるイスラエル民族のためには、自分はキリストより離れて滅亡に至るも敢て厭はぬとの意味に相違ない。この語に依て直ちに推知さるゝのは、彼の憂と痛との意味である。彼は同胞の大部分がキリストを拒斥しつゝある不信を歎き、その未來の運命を思うて痛切なる憂苦を胸に抱いたのである。そしてもし自己が滅亡に陷る事に由て彼等を救に入れ得べきものならば、彼等のために自己の幸を全部棄ててキリストより離れ滅亡に陷るも亦可なりと云ふのである。

八章を口授しつゝある時、パウロの歡びは倍加し倍加しつゝ進んだであらう。そして其末尾の大奏曲に至つては、彼の歡びは彼の胸を張りさくほどの絶頂に達したであらう。併しながら此歡びの後彼は靜かに思うたであらう。此歡びはキリストを信受せし者についての歡びである。然るに彼の同胞は如何。少數者を除きては皆この歡びの外にありて、詛はるゝ者となりつゝあるではないか。彼は之を思うて急に大なる憂悶を心に感じ、その憂悶の己にある事を虛僞ならずとして强調しながら萬感胸に迫りて其理由を述ぶる餘裕なく、直ちに三節の如き犧牲的の愛國的熱情を吐露したのである。律法の破毀者と謗られ國を忘れし者と罵られてゐた彼に、かくの如き强烈なる愛國心のあることが玆に示されたのである。

冷淡なる批評家は云ふであらう。自己の救についてあれほどの大凱歌をあげたる彼が忽ち自己の滅亡を可なりとするは何等の矛盾であるかと。淺きかな此見方！　パウロの無私なる愛國心を思うて、彼がかゝる自己犧牲の大なる語を發したるに向つて寧ろ敬意を表すべきではないか。彼は自己及び救はるゝ者について大歡喜を味ふと共に、亡ぶる同胞のために大痛苦を感じて、自己を以て彼等に代り得べくば自己を滅してなりと彼等を救はんと願つたのである。我等は彼の燬ぐが如き愛國の熱情を敬ふものである。

一―三節に於て右の如き憂國の强き情を述べたる彼は、四、五節に於て又一轉してイスラエルの特權を擧ぐるのである。子とせられし事、榮光、盟約、律法を與へられし事、祭儀、約束みな彼等に屬する所である。之にてイスラエルに六つの特有物がある。然のみならず列祖アブラハム、イサク、ヤコブは彼等の先祖である。更に之に加ふるに、主キリストイエスも其人間的方面に於て云へば彼等民族の一員である。パウロは斯くイスラエルの優秀なる點八つを擧げたるのち、最後のキリストについて云ふ「彼は萬物の上にありて世々讃美を得べき神なりアーメン」と。即ちキリストを神として彼はこの讃美をなしたのである。これ注意すべき事である。まことに徹底せるキリスト神性の主張が之に含まれてゐるのである。

かくの如く神の大なる恩惠を受けつゝあるイスラエルが今の不信の有樣は如何。あまりに大なる矛盾ではないか、かゝる民の不信なればこそパウロは痛恨堪へがたくして、彼等の救とならば自己をアナテマとせんと云ふのである。實に愛國心の絶頂と云ふべきである。故にパウロの此語は我等に强く訴へるのである。由來我ら日本人は愛國心の强きを以て鳴る民である。余は玆にはしなくも余等の青年時代を想起する。當時余等は信仰に入りて大なる歡びを味ひしも、亦忽ち自己の愛する兩親兄弟乃至國人が此光に未だ浴せざるを見ては悲痛措く能はず、愛國の心に燃えて同胞の救濟、日本國の敎化のために一生を獻げんと決心したものである。我等は自己及び共に主にある者の勝利について大に歡ぶ。その故に大凱歌をあげる。しかしそれだけで歇んではならない。直ちに同胞の大部分が暗中にさ

まよひつゝある此迷亂の狀態を深く心に置きて、同胞の救のために紛骨碎身せんとの愛國的熱情を起さねばならない。自己の救のみに耽りて同胞の不信を憂へず、又同胞の救のために熱情を起さざるは未だ信仰淺しと云はねばならない。

ルーテル、ミルトン、クロムウェル等を見よ。基督者の中に眞正の愛國者があつた。深き愛國心は神を知らぬ者の抱き得ぬところである。自國に神の與へ給ひし使命あるを見、同胞を神の道に導くために凡ゆる努力を厭はじと云ふ。これ最も聖き愛國心である。眞の愛國者はパウロの此心がなくてはならぬ。今日我國に於て愛國心の衰頽いちじるしきは、深き信仰的基礎が人々の愛國心に存しないからである。單なる國自慢、民族的偏狹、愚かなる敵愾心、空しき民族的矜誇—これらのみを抱いて愛國心の所有者と自任せる者の可笑しさよ。斯る者はあるも效なし、又あるも忽ち衰へ去る。そして人皆自己中心の利慾的動物となるのである。福音は必しも愛國を高調しない。併しながら福音は人の心をその根柢から動かすものなる故、これを受けし者に眞にして深き愛國愛民の心が生まるゝのである。實に福音は人間固有の愛國の情を高め、深め、潔めるものである。

今や日本人の愛國心は著しく衰頽した。日本人ほど愛國心を鼓吹せられた國民はない。愛國心は日本國民の宗教と云はるゝ程であつた。然るに今や愛國心は地を拂つて去つた。人々は今や國を思はず社會を思はず、世界人類を思はず、唯自己一身の幸福獲得にのみ全精力を注ぎ居る有樣である。實に我民族は僅かの年月の間に、一方の極端より他方の極端にまで走つたのである。しかし是れ不思議の如くにして、不思議ではない。國のためにのみ國を愛する愛國心、即ち他に何等の基礎を有せざる淺き愛國心の運命は皆かくの如きものである。

眞の愛國心とは單なる愛國心ではない、深い廣い或精神の外に發せし一表現である。神の愛を味ひその愛に勵まされて神を愛すと共に人を愛し全人類を愛するに至りし結果として、自から湧起する所の國と同胞とを愛するの心—これ即ち眞個の愛國心である。此の種の愛國心は決して年と共に變らない。否な年を經て益々盛になるのである。此意味の愛國心を豐かに抱いてゐたのはイエスキリストであつた。彼が橄欖山よりエルサレム城を下瞰し其運命を思うて「あゝエルサレムよエルサレムよ……」と萬斛の熱涙を注ぎ出したるを見よ。深き深き人類愛に根ざした愛國心が彼の心を占領してゐたのである。パウロの愛國心も亦これであつた。神を愛し人類を愛する基礎に立ちての愛國心であつた。そのイエスの愛國心、又パウロの愛國心、それが以後すべての基督信者に傳はつたのである。

故に愛國心の模範的實例は、偉大なる基督者の生涯に於て求むべきである。英國に於ては最も純粹なる愛國心をミルトンの詩に求むべく、獨逸人の愛國心はルーテルに由て涵養せられ、伊太利人は今に至るも愛國者の模範としてサボナローラを仰ぎ、米國人の愛國心はピルグリム祖先より發生し來り、又新興國チェッコ・スロバキヤは初めて國を興すに當つて宗教改革の犧牲者ヨハン・フッスの愛國心

に勵まさるゝ所大であつた。皆これ深き福音的信仰を以て養はれたる基督教徒の愛國心に源泉を發してゐるのである。福音の源として湧き立ちし愛國心のみが、永遠に盡きざる清き廣き熱情を保ちて、とこしへに國を溌ほすのである。

而してキリストの愛國心は、又舊約の偉大なる預言者に源を發したものである。愛國的思想及び情感の最も純粹なる模範を見んと欲せば、今なほ之を舊約の預言書に於て見出し得るのである。故に云ふ、聖書を除いて眞正の愛國心が起り得るや疑問であると。我國に於ても此源泉に至らぬうちは眞正の愛國心は起り得ないのである。此國民のために玆に此事を言ふ。

同胞の不信はパウロを憂へしめ痛ましめた。しかし彼は失望を以て終る人ではない。故にイスラエルの救が或形を以て或時遂に行はるゝを信じた。此事を記したのが九章、十章、十一章である。即ちこれパウロのイスラエル救拯論である。彼はイスラエルの救はるべき時あることを信じて、こゝに失望より發して希望に終るのである。我等も日本民族に就て思ふ、今彼等が自己中心に陷りてキリストを拒否しては居るが、神は必ず或方法を以て我等の愛する此民を救ひ給ふであらうと。故にわれらは喜びを以て刈り取る日の必ずいつか在るべきを思ひて、今涙を以て種を蒔きつゝあるのである。國人の無情と輕薄と冷淡とに屈せずして、主の道を說きつゝあるのである。日本人の現狀は我等を大に悲ましむる。併し我民族は曾ては優秀なる宗教家と宗教信者とを數多く出した民ではないか。パウロが同胞の優秀點を數へあげしが如く我等も亦同胞のそれを數へ得る。神は遂に我等の愛する所の日本民族を救ひ給ふであらう。かく思ひて我等は希望を以て働く。日本國のみならず東洋全體に、水の海を蔽ふが如く神を知るの知識が充つる時を遙かに望み見つゝ、今は憂國の情と同胞のための熱心とを以て日々に働くのである。而してイスラエルの救が人類全體の救と相係はりて離れざる如く、日本民族の救も全人類の救と係はる所深きものであらう。故に日本人の救のために働くは又全世界の救のために働くことである。我等福音のため、わが愛する日本國のため、又世界人類のために日々に働かんかな。然り日々に働かんかな。

第四十四講　ユダヤ人の不信と人類の救（二）

第九章、第十章の大意

羅馬書九章、十章、十一章は一の連續した思想の發表である。その說く所はユダヤ民族、ひいて全

人類の救に關する重大なる問題である。故に讀者は此點に第一に注意をなさねばならぬ。然るに九章六節あたりよりパウロの説く所はいはゆる「豫定」の教である。此解し難き事が玆にあるため人々は此一問題にのみ全注意を注ぎ、之を思索の中心とし議論の焦點として、そのために九、十、十一章の趣旨を逸し去るのである。これパウロの意を解する道ではない。先づ此三つの章全體を通讀してその主眼たる所に注目し、その大意を了得することが第一の問題である。そして然る後初めて九章所説の難問題を考察の題目とすべきである。そして此三つの章の趣旨は、ユダヤ人の救は何時、如何にして行はるゝかの問題に對する解答である。彼は第九章の四、五節に於てユダヤ民族の特權を幾つも掲げた。かゝる特權を神より與へられ來りし民族が、今やその大なる救の恩惠より遠ざかつて居るのは何故であるか。是れ單に同胞イスラエルの問題たるのみならず、又實に神の攝理の問題——神が如何やうに世界を統べゆくかの問題である。これが解決せられざる時は、彼はその同胞を餘所に異邦世界にのみ福音を宣傳するその使徒職を執り得なかつたのである。彼が三年の間アラビヤに過せしと云ふ沈思祈禱の歳月は、多分この大切なる問題の解答を得んことをも其重なる内容の一としたことであらう。それほど之は大切なる所である。

彼は先づ「呻き」を以て此大切なる問題を始めた。「我に大なる憂ある事と心に耐へざるの痛みある事」を述べた。その憂と痛とは、同胞たるイスラエルの救はれざる事についてであつた。そして彼は同胞の救はれざる理由として三を擧げる。第一の理由は九章に、第二の理由は十章に、第三の理由は十一章に記される。彼等の救はれざる第一の理由は神の御心に因るのであると云ふ事、第二の理由は彼等の不信仰に因るのであると云ふ事、第三の理由は異邦人が救はれんためであると云ふ事である。

九章は（精確に云へば九章六節—廿九節は）右の第一の理由を述べし所である。その主眼は、救はれるも救はれぬも專ら神の意志に基づくと云ふにある。「肉に由りて子たる者これらは神の子たるに非ず、ただ約束に由りて子たる者は其苗裔とせらるゝ也」と八節は云ふ。又エサウとヤコブが母の胎にあつた時、母リベカは「兄は弟に服へん」とのエホバの聲を聞いた。これ「其子いまだ生れず亦善惡を行さゞれど、神の選び給ひし聖旨は變ることなく、行に由らで召に由るを彰はさんとて」であつた（十一—十三節）。また十五節に曰ふ「神モーセに曰ふ、われ矜恤まんと欲ふ者を矜恤み憐憫まんと欲ふ者を憐憫むと。尙ほ十八節に曰ふ「然れば神は憐憫まんと欲ふ者をあはれみ、剛愎にせんと欲ふ者を剛愎にせり」と。實に人の救はるゝも亡ぶるも、すべてが神の絶對の意志と絶對の力とに依據するのであると云ふ。寔に大膽なる斷定である。そしてパウロは尙ほ此事の合理的根據として二十一節に於て「陶人は同じ塊をもて、一の器を貴く一の器を賤しく造るの權あるに非ずや」と云うてゐる。

救はるゝ者も豫め定まり、救はれぬ者も豫め定まつてゐると云ふ。即ち謂ゆる豫定の教義である。

かく人の運命が至上者の心に於て定まつて居るものならば、人には何等の責任もないこととなり、努力奮勵の必要は全くなく、傳道は無益の業となつてしまふとの疑義が當然起る。然り豫定の教義は理論上には幾つもの困難を有す。しかし是れ人生の一の見方なることは明かである。即ち或人は自己の事をかく見るのである。見ざるを得ないのである。即ちこれ實驗上の眞理である。自己の既往を回顧するとき一切の出來事が我救ひのための準備であつて、神は我を救はんことを豫め定め置きて此目的に向つて我を進めたのであると考へる。我救ひは決して我努力の所産ではない。幾度も〳〵神を棄てて他に走らんと願ひしも、彼は遂に我を離し給はない。即ち我は神に捉へられたのである。其理由は我には解らない。たゞ其事實が我實驗として存するのである。然る時パウロの「我が母の胎を出でし時より我を簡びおき恵をもて我を召し給ひし神」（ガラテヤ書一章十五節）との確信が自から生れる。豫定の教義を我より離して考ふる時は解し難き點がある。何故に神は或人を恩恵の中に攝取し或人を不信の中に閉ぢこむるのか、其理由は解らない。しかし自己の問題として、神と我との關係の上の問題として見るとき、之は明々白々たる眞理となるのである。

パウロは同胞イスラエルについて思ふ。彼等の今救はれざるは神の聖旨に因るのである。救はれるも救はれざるも凡て神の心より出づ。神は救はんと欲する者を救ひ滅ぼさんと欲する者を滅ぼす。これが彼の爲し給ふ所である。舊約の歴史に於ても此事は度々記されてゐる。故にイスラエルの今の不信は悲むべきではあるが、聖旨であれば亦已むを得ないと。かく考へて彼はその悲歎を慰めるのである。然らばイスラエルの救はれざる事については、彼等には全然責任がないであらうか。否彼等の救はれざるは亦彼等の責任である。即ち彼等の不信仰が彼等の亡びを惹き起しつゝあるのである。かくパウロは考へて之を第十章に於て記したのである。

然らば九章と十章とは相納れぬ二つの眞理を說いたものではないか。その間に明白なる矛盾があるではないか。人の救と亡びとは全然神の意志に基づくと云ふのは九章、人の意志からの信不信に基づくと云ふのは十章である。甲は凡てを神の意志に置きて人の責任を無視するが如く、乙は人の意志に重きを置きて人の責任を問ふが如くである。玆に矛盾があると云へば慥かに矛盾がある。併し此矛盾の中に人生の興趣も亦在る。如何にして此矛盾が調和せらるべきか、即ち神の意志と人の意志との併存を如何やうにして認むべきか、玆に人生の面白味が存するのである。

イスラエルの不信は神の意志より出で又人の意志より出づると云ふ。然らばイスラエルは永久に神の斥くる所となるのであるか。否とパウロは答へる。彼は十一章に於て說きて曰ふ、イスラエルの今の不信は福音の光の異邦に臨まんためである。彼等が福音を斥けしために今福音は異邦の暗き谷を照し、そこに異邦人は續々としてキリストに歸しつゝある。而して異邦の人救はれし後ち福音の光は再びイスラエルを照し、「イスラエルの人悉く救はるゝを得」るに至る。かくして全世界に生命の光ゆ

きわたり、地上の全民族に救は臨むのである。故に今のイスラエルの福音拒斥は、やがて全世界が之を信受する豫備であると。これパウロの世界救拯論である。實に深妙なる歴史哲學、莊美なる世界の大觀、雄大なる未來の預言と稱すべきものである。玆に一切の矛盾、疑義が神の大愛てふ一義の中に美はしく調和融合せられるのである。

このパウロの大希望の預言に接して、我等は現在の世界の狀態について大に慰められるのである。今や世界の壞亂はその極に至つたかと思はれる。今や人は善惡と云ふ簡單なる道德的差別をさへ認めない時代である。一切を自己と自己の快樂のために用ひて之を恥ぢざるのみか、之を誇りつゝあるが現代人の心理である。そのために人類社會の醜陋墮落は、急轉直下の勢を示してゐるかと思はれる。巴里、伯林、紐育等の文明都市の大腐敗は此事の著しき徵である。これ實に人の意志より出でたものであつて、同時に神の意志より出でたものである。即ちこれ明白に神の審判である。併しながら神は又必ず此の暗きを通して新たなる光明の世まで人類を導き給ふであらう。ユダヤ人の不信が遂に全世界の救ひを起すとのパウロの預言に倣ひて、我等も亦今の世界壞亂は遂に全世界の救にまで導かるゝと預言し得るであらう。人は今神の法を破りつゝあるが如くであるが、實は神の法は人に破らるゝ如き脆弱なるものではない。神の法は嚴として千古に立つてゐる。彼は依然として全世界救拯のその聖計畫を進めつゝある。やがて聖圖の成る時は必ず來る。恰も我の罪を通して神は我を光明の境にまで導き來り給ひしが如く、全世界の今の罪惡を通して彼は之をその聖目的のある處まで導きゆき給ふであらう。その事を思うて我等にも亦悲歎の中に大なる慰藉がある。

以上の如く九、十、十一章の大意を見ることが甚だ肝要である。即ち我等は主なる着眼點を全人類の救といふ處に置かねばならぬ。然るときは九章の豫定問題の如きも亦自から解け去るのである。豫定問題のみを摘出し、之を客觀的眞理として理論の上に於てのみ檢査する故わからないのである。之を更に廣き視野に於て眺める時は、決して難問題として人を苦めないのである。即ち神が如何やうに世界人類を導きつゝあるか、如何にして人類の救は成るべきか、この大問題を心に置きてその一部として豫定の教を見る時は、この難かしき教義と思はるゝものが自然と解けてしまふのである。

これ九、十、十一章の大觀である。然らば我等は前に歸つて十章の大意を見よう。これイスラエルの不信の第二の理由である。即ち彼等の不信は彼等の責任であると云ふ主張の提起である。「彼等は神の義を識らず、己の義を立てんことを求めて神の義に服はざる也」と三節にある。又「凡て信ずる者の義とせられん爲にキリストは律法の終となれり」と四節にある。律法の行によつて自らを義とせんとは、キリスト以前の事である。律法の行によりて即ち自己を義として救はるゝとは舊き原理である。キリストが十字架に於て亡ぼしたる原理である。今はたゞ信仰だけで義とせられるのである。これが「神の義」である。然るにキリストを知らざる彼等は此簡單容易なる義の道を棄てて、かの複雜困難

なる義の道に執着してゐる。彼等は舊くして劣れるものを固く抱きて新しくして優れるものを斥けてゐる。自己の努力奮闘に依て律法の義を行ひ、以て神の前に己を義とせんとして、信仰に依て與へらるゝ所の神の義を顧みない。玆に於てかキリストと其十字架とを受けないのである。見よ信仰の道の如何に簡單なるかを。「道は汝に近く汝の口にあり汝の心にありと、是れ即ち我等が宣ぶる所の信仰の道なり。蓋もし汝口にて主イエスを認はし、又汝心にて神の彼を死より甦へらししを信ぜば救はるべし。それ人は心に信じて義とせられ口に認はして救はるゝなり」とある（八―十節）。この簡易なる信仰の義を採らずして、かの難澁なる行の義に依れること、是れユダヤ人不信の理由である。かくばかり平易簡明なる恩惠の道をすら採らない。故に不信の責任は彼等自身が負ふべきものである。

實に信仰の義は簡易である。只信仰さへすれば義とせらるゝのである。ユダヤ人、ギリシヤ人の區別はない。「凡て主の名を呼求むるものは救はるべし」である（十三節）。たゞ父なる神に賴りさへすればよい。己の修養、工夫、努力、計度によつて自己を義とせんとする自立的態度を神は喜び給はない。たゞキリストを心に信じ之を口に告白するだけで義とせられる。然るに哲學と叫び神學と唱へ、何か自己の工夫を以て偉大なる心境を開拓し神聖なる境地に己を持ちゆかうとする故、日に夜に勞して得る所は勞苦と失望のみである。法然上人の『選擇集』は信仰による救を證明せし大著である。行に因る道を難行道と名け、信仰による道を易行道と呼ぶ。難行道は峻嶮なる急坂を喘ぎ〳〵登る如きものであり、易行道は舟子のあやつる船に己の身を任する如きものであると教ふ。洵にその通りである。唯キリストを信じて一切を任せれば、それだけで救の船に乘せられて天の國まで連れられて行くのである。人はその生涯に於て如何に多くの善行を積んだとて救はれるのではない。只信ずべき者を信じ、依り賴むべき者に依り賴みて、且つこの信仰を告白する生涯をつゞけて救はれるのである。

この祕義を知らずしてイスラエルはキリストを斥け、今の文明人も亦同樣にしてキリストを斥けてゐる。この簡易なる信仰の道に人生の平安、歡喜、愉悅、生命、及び永生のあることを知らずして、人間の努力を以て何か良きものを人の心に、人の社會に產み出さんとして狂奔亂擊に陷り、凡て失望を以て終るの慘狀を呈してゐる。即ち彼等は昔のユダヤ人と全く同じ心理狀態にある。故に基督教國と稱せらるゝ國々に於ても大部分の者はキリストを信ぜず、又異教國に於ても同樣にその極小部分のみしか彼を信じないのである。今日の文明人はパウロ時代のユダヤ人そのまゝである。自ら立たんと欲するが故に、キリストを信受しないのである。パウロはユダヤ人に悔い改めよと叫んだ。我等も今の文明人に向つて同樣の叫びを發せざるを得ない。

第四十五講　ユダヤ人の不信と人類の救（三）

第十一章の大意

ユダヤ人は今キリストを斥けてゐる、それは第一に神の聖旨に基づくことであり、第二に彼等が己の義に執着せるからのことである、かくて今イスラエルは救の外にあると、これ九章、十章の大意である。之を受けてパウロは十一章の劈頭に於て先づ問ふ「然ば我いはん、神は其の民を棄てしや」と。そして直ちに答へる「決て然らず、何となれば我も亦イスラエルの人、アブラハムの裔、ベニヤミンの支派なり」（一節）と。純粋のユダヤ人たる我自身が既に神に招かれて其恩惠に浴した、しからば他のユダヤ人もまた同一の恩惠に浴し得ない筈はないと、これパウロの意である。エホバは預言者エリヤに向つて「われ自己の爲にバアルに跪づかざる者七千人を存せり」と告げ給うた（四節）。「是の如く今もなほ恩の選びに由りて遺れる者あり」とパウロは云ふ（五節）。今も民族全體の不信の中にごく少數の除外例がある。僅少の同胞がともかくも福音を信じてゐる。これは「遺れる者」である。此者が根となつてやがて救のユダヤ全民に臨む時が來るとパウロは確信したのである（一節より十節まで）。

我日本民族についても我等は同樣のことを考へる。彼等を民族全體として見るとき、福音を明白に拒否してゐる。彼等は自己の利害のために焦慮して、神の福音については無關心である。日本國は佛教國である。各地にある所の寺院巨刹を見よ。死する時營まるゝ葬式を見よ。よし佛教の活ける精神は多く失せたりとは云へ、其形式は尙ほ固く我民族を把握しつゝある。草と樹が日本の全國土を蔽へる如くに、不信者は日本の全社會を蔽うてゐるのである。そして表面に於ては基督信者であつて實は然らざるもの、又一度信ぜしも之を棄てし人々、之等は其數に於て甚だ多い。私かに慶る、神は我日本を棄てしにあらざるかと。併し乍ら又思ふ、我の如き頑梗深罪のものすら神の恩惠に浴したではないか、然らば他の日本人の救はれぬ理由がどこに在るかと。又思ふ、少數の日本人は既に神の招く所となつた、その數は少しとは云へ、是れ日本民族の一部である、かくその一部が救はれた以上はその全部も遂に救はれるに相違ないと。これ我等がパウロに倣ひて我が同胞について抱くところの希望である。

次には十一節―十六節を見るべきである。十一節に曰ふ「然ば我いはん、彼等（イスラエル）が蹶きは倒れに及びしや。然らず、反て彼等が錯失により救は異邦人に及べり、これイスラエルを激させ

んが爲なり」と。福音はイスラエルの拒斥する所となつて、其目標を轉じて異邦人に向つた。そして神の光に未だ浴せざりし心靈の暗黑世界より、兩手をあげて神を呼び求むる者が續々として起るに至つた。之はイスラエルを勵まさんためである。彼等の侮りゐたる異邦世界に心靈の覺醒大なりと聞かば、彼等は之に勵まされてキリストに歸するに至るであらう。曾ては彼等が異邦人の師であつた。しかし之からは異邦人が彼等の師となつて、福音は彼等の國に逆輸入せられ、玆に救は彼等の上にいと滋く臨むに至るであらう。かくして全人類がキリストの光に浴するに至るであらうと。これパウロの確信であつた。

今この事を今日に喩へて見るなれば、丁度我日本民族は當時のユダヤ民族の位置にある。福音我國に傳へられてより既に幾十年、その間に盡されし人の努力と費されし財帑は尠少ではない。しかも日本人は福音については頗る冷淡である。偶々熱心なる者あるも多くは青年時代の夢として終る。米國の神學校に米國人の資を以て學びし日本の青年の多くは傳道の職を棄てた。日本人は自己のために福音を利用するも、決して福音を受けようとはしない。歐米人は日本人について著しく失望した。その結果として支那人と朝鮮人とに多大の注意を拂ふに至つた。今や歐米諸國は此兩民族に向て續々として宣教師を派遣する。そして其效果頗る著しいと言はれてゐる。東洋の教化が日本より始まらんことは我等の多年の願であつた。今も此願は變らない。先づ福音が日本の全土に臨み、恰も水の低きにつくが如く日本より支那、朝鮮に流るゝ時我等の喜悅はいかばかりであらうか。併し乍ら日本人は福音を斥ける。そのために惠は支那、朝鮮に及びつゝある。即ち日本人の不信は支那人、朝鮮人に信仰の與へらるゝ機緣となつた。然る後ち福音は彼等より日本に傳へられて、遂に全東洋が救はれるのであらうと思はれる。即ち神は東洋全體に福音の光を普ねからしめんために、先づ日本人を不信の中に閉ぢこめたのである。故に日本民族は決して棄てられたのではない。後ち必ず大なる救に浴するのである。即ち最後に日本が救はれて東洋全體が救はれるのである。

是れ固より東洋の救拯に關する我等の想像である。然り想像である。しかし必しも空想と云ふことは出來ない。日本人は東洋の兄弟たる支那人、朝鮮人を蔑視しつゝ來た。今も依然として蔑視してゐる。中には彼等を虐げるを以て快としてゐる者がある。神は高ぶる者を卑くし、卑き者を高くし給ふ。日本人が彼等に先ちて歐米の物質文明を吸收し、其のために一等國の列に入りて東洋の兄弟を輕しむる時、神はその物質文明を日本に與へ置きて其福音をその手より奪ひ、之を支那人、朝鮮人に與へ、然る後ち彼等を以て福音に於ける日本人の師となし、遂に生命の光を全東洋に漲らしむるの道を取り給ひつゝあるかも知れない。何れにせよ、パウロが其同胞たるユダヤ民族の救について失望しなかつたやうに、我等も亦同胞たる日本民族の救について失望しない。神は必ず何等かの方法を以て全東洋を救ふと共に、全日本民族を救ふであらう。全世界を救ふと共に、全ユダヤ民族を救ふであら

う。我等はパウロと共に、希望の歡びの中にわが痛みつゝある心を安息せしむる者である。

次の十七―二十四節は有名なる橄欖の接木の比喩である。普通の接木は良き實を結ばざる基樹に良き實を結ぶ樹の枝を接ぎ、以て其樹全體をして良き實を結ばしむるものである。然るに橄欖の樹には特殊の接木法があつた。それは野性の橄欖樹の枝を、栽培せる橄欖樹に接ぐのである。然る時は兩者にとつて良き結果が起る。即ち橄欖の老樹は精氣を回復して若々しくなり、野生の枝は栽培せられし橄欖の枝の如くに醇化するのである。（我國に於ても有名なる近江の唐崎の松は、若き松を傍らに植ゑられる事に依て精氣を恢復しつゝ來つたと言ひ傳へられる。事實なるか如何は知らず。只それがパウロの玆に詭く接木法に似たる所に興味がある）。イスラエルは神の庭に多年栽培せられし橄欖樹である。もとより野に放置せられ來りし野性の橄欖たる異邦人と比すべきものではない。併しながら幾千年の間神の道を抱き來つて、今やいたく疲れた。靈的の力衰へて、主の福音をさへ斥くるの悲境に入つた。玆に於てか神は野生の橄欖たる異邦人を拔き來つて之に接木した。これ兩者にとつて幸な事であつた。そのために異邦人は神の光に浴して心靈の醇化更生を遂げた。そしてそれに勵まされてユダヤ人も亦靈的に復興するのである。

異邦人中には生命の流れ滾々として異邦の野に注げるを誇り、我とみづから之を遮りたるユダヤ人を蔑むものがある。併し乍ら「誇ること勿れたゞ戒懼れよ」（二十節）とパウロは彼等に向つて警告を發する。「もし幾數の枝を折られたるに汝野の橄欖なるそれを其中に接がれ、共に其根により共に其汁漿を受くるならば、原の枝に向ひて誇る勿れ。假令ほこるとも汝は根を保たず根は汝を保てり」と十七、十八節にある。かくパウロは異邦人をして誇る餘地なからしめんとする。同時に彼等が神に背きて棄てらるゝ日を招來することなきやう、信仰と敬虔の確保を促して曰ふ「蓋神もし原樹の枝をさへ惜まずば恐くは汝をも惜まじ」（二十一節）と。又曰ふ「汝慈に居らば其慈は汝にあらん。然らざれば亦汝も斫離さるべし」（二十二節）と。

イスラエルの救はれざるは不信仰のため、異邦人の救はるゝは信仰のためである。故にイスラエルと雖も信仰に入れば救はるゝに相違ない。元來不信仰なる異邦人さへ、一轉して信仰に入りし故救はれた。ましてや元來信仰に立つイスラエルのことゝて、今は不信なりとは云へ一度立ち歸りて主を信受せば忽ち救に浴することは當然である（二十節及び二十三、四節）。玆に於てかパウロは容を改め、姿を正して、異邦の信者に向つて左の如く告げる。

兄弟よ我れ汝等が自己を智しとする事無からん爲に此奥義を知らざるを欲まず。即ち幾分のイスラエルの頑梗は異邦人の數盈つるに至らん時まで也。然してイスラエルの人悉く救はるゝを得ん……昔なんぢらは神に背きしが今彼等が背けるに由りて汝等矜恤を受けたるが如く、今かれらの背けるは汝等の矜恤を受けるに因りて亦矜恤を受けんため也。そは神は衆人を憐まんがために咸

これを不服の中に入れかこめり（二五―三二節）。

今イスラエルの大部分は不信の中にある。しかしこれは救の異邦に臨まんためである。やがて救はるべき異邦人が皆救はれた時には、福音はユダヤに歸りてイスラエルは悉く救はるゝであらう。曾て神に背きつゝありし異邦人がユダヤ人の不信のために今神に從ふに至りし如く、今背きつゝあるユダヤ人は異邦人の信のために再び神に復歸するに至るであらう。故に今のイスラエルの不信は後の信のためである。觀じ來れば何れの民族と雖も一度は不信背戻の中に閉ぢ込められる。しかし是れ後に於て救を施されんためである。かくて神の支配の下にあつては、凡てが光明へ向つての進展である。

斯く思うてパウロの心に大なる慰安が臨んだ。彼は同胞の救はれざるために、大なる憂と心に耐へざるの痛を抱いた。如何にかして彼等を悔改しめんと願つた。これ彼の愛國愛民の至誠からであつた。彼は異邦人の續々として神に歸しつゝあるに對して、同胞の執拗なる不信を見るに忍びなかつた。けれども彼は眼を全人類の未來に向つて注いだ。そして全人類の救の日を期待し、且その一部として最後に起るイスラエルの救を豫覺した。萬事の終る所は光明である。世界人類の前途には滿々たる希望がある。神は一度何れの民族をも「不服の中に入れかこむ」と雖も是れ即ち後に憐みを施さんためである。冷き冬の後に暖き春は必ず來る。今はユダヤ民族の冬である。併し乍ら是れ後に到來する所の春の光明と生命とを豫示するものである。かくして神はその聖旨を行ひ給ふのである。

パウロは右の如くに考へた。そしてこの偉大なる思念の中に先の憂と痛とは失せ去つた。殘る所は唯讃美のみである。三十三節以下に於て彼は歌ふ。

あゝ神の智と識の富は深いかな。其審判は測りがたく其踪跡は索ね難し。孰か主の心を知りし。孰か彼と共に議る事をせしや。孰か先づ彼に施へて其報を受けんや。そは萬物は彼より出で彼に倚り彼に歸ればなり。願はくは世々榮れ神にあれアメン。

是れ偉大なる讃美の歌にして、八章終尾の讃歌と相對して其の美を競ふものである。彼は救の確實なるを知りて擧げたる凱歌、是は神智の宏大なるを歎美したる讃歌、共に稀に見る所の莊大なる辭である。攝理の中に凡てを見るがその特徴である。まことに九章より十一章に亙る人類救拯論の結尾として相應しきものである。

世界の現狀如何、又我日本國の現狀如何、溷濁迷亂の極と云ふべきである。神は何故かくの如く人類を導き給ふか、何故これを放置し給ふかとの疑問が起らざるを得ない。之に對する説明の第一は神の聖旨に依るとの事である。第二の説明は人類の意志に依るとの事である。人類は自ら神と眞理とに背き來つた。之に對して彼等は責任を持たねばならぬ。乃ち神は之に對して相當の罰を加へて、彼等を此淆亂の中に入れかこめた。併し乍ら暗中に光を生み出す神は、必ずや此淆亂醜汚を通して人類を光明の境に導きゆくであらう。パウロが今の世に生れたならば斯く信じたに相違ない。我等亦かく信

じ、かく望みて、パウロと共に神の智と識の富とを讃美しよう。

之を矛盾と見做す人がある。然り、然らず。純理の上に於てはそこに矛盾が存する。しかし愛は理論以上である。愛は全宇宙ほどそれほど大である。愛の中には一切の矛盾が調和せられる。神の愛は春の光の如く柔かに全人類を蔽うてゐる。人は神の愛の如何に大なるかを知らない。併し乍ら時來つて新しき天と新しき地の開かるゝ其復活の朝に於て如何。その時與へらるゝ恩惠のあまりに大なるに驚かざるもの果して幾人ぞ。その時神の愛の絶大に眼くらまざる者果して幾人ぞ。其時自己のあまりに弱かりしを恥ぢざるもの果して幾人ぞ。實に神の愛は人の目未だ見ず人の心未だ思はざるものを與へんとするのである。此大愛の中に世界の現在と將來とを見たるパウロの救拯觀、それは實に宏大なる希望に波うつ魂の叫びである。此大思想の前に此世の哲學は煙の如く失せ去るではないか。人間の理智を以てする小懷疑は微塵に打ち碎かるゝではないか。そして殘るは唯神智に對する讃美の歌のみである。

第四十六講　基督教道德の根柢

前講を以て第十一章の研究を終へた。これからは第十二章以後の研究に入るのである。その內容の價値から云へば、羅馬書は第八章を以て絶頂とする。しかし其內容の性質から云へば、十一章と十二章の間が分水嶺となつて居る。即ち十一章までに說かるゝは教義であるが、十二章からは全く面目を異にして專ら實踐道德を說くのである。故に羅馬書を二大部に分つて、十一章までを第一部、十二章以後を第二部と見ることが出來る。併し又全體を三大部に分ちて、個人の救を主題とする一—八章を第一部と見、人類の救を主題とする九—十一章を第二部と見、實踐道德を說く十二章以下を第三部と見ることも出來る。

かく其書翰の前半に於て福音的教義を說き、後半に於て實踐道德を說くは羅馬書のみに限らない。

パウロの他の書翰に於ても之がある。その最も鮮明なのは羅馬書のほかエペソ書である。此書は第三章までに於て信仰に關する深き教義を說き、第四章よりは「然れば主に在て囚人となれる我なんぢらに勸む、汝等召されし召に符ひて行はんことを」と說き始めて專ら實踐道德を說明してゐる。コロサイ書も此點が可成り明瞭である。一、二章に於て含蓄豐かなる教義が說かれし後ち、第三章よりは「既に汝等キリストと共に甦りたれば天に在るものを求むべし」と說き出して、專ら道德的の注意が與へられてゐる。その他ガラテヤ書は第五章一節より、テサロニケ前書は四章一節より、同後書は三章六節よりいづれも實踐道德に入つてゐる。パウロの書翰の半數が此特徵を擔つてゐる事は注意すべき一事である。

普通の道を以てすれば先づ人を教ふるには道德を說くべきである。これ解し易きのみならず、實際生活上主たる注意を行爲に置くは當然であるからである。然るにパウロは何故解し難くして且實際生活には緣遠しと思はるゝ教義—多くの人々に神秘的と云はるゝもの—を第一に力說して、然る後より解し易くしてより緊切と思はるゝ道德の事を說くのであるか。これ一の疑問である。併しながらパウロを以て見れば教義は源にして道德は末である。教義は根幹にして道德は花葉である。義とせらるゝ事と云ひ、聖めらるゝ事と云ひ、救はるゝ事と云ひ、又人類救拯の次第と言ひ、これパウロに取つては人生の第一問題である。神と人との關係の根本をなす問題である。故に之が解明に多くの文字を費して、然る後ち初て道德倫理の問題に入るのである。普通の人は考へる、世には實際問題が多い、社會國家人類に關する切實緊要なる問題が山の如くある、之等の解決のために人は今や日も亦足らざる狀態にある、何を苦しんでか神人の關係など云ふ問題にたづさはらんと。然るにパウロに取つては神人關係の問題が人生の第一問題である。之さへ解けば、他の凡ての難問題と稱せらるゝものの如きは自然と解け去ると云ふのである。

根なくして葉の茂り花の開く筈がない。然るに此世の人等は、營々として此の不可能事に從事して居る。さりながら教義は人生の第一問題の解明である。神と人の關係が先づ義しくされなくては、他の凡ての事は義しくされない。基督教道德は基督教教義を根幹として立つ花葉である。故にこそ根幹より養汁を受けて榮ゆるのである。根柢なくして只獨り立つ所の倫理道德は、恰も瓶に植ゑし花の如く凋み果つる外ない。此點に於て基督教道德は普通の道德と根本的に相違してゐる。自己の義とせらるゝ事、聖めらるゝ事、救はるゝ事の奧義を學び、進んで全世界に關する聖圖の祕義を學びて歡喜と希望の歌が高く揚る、—然る後ち實際道德に入るのである。我等心の根本に生命を供給せられずば、如何に優秀なる道德と雖も之を實行する道がない。人生の根本問題が解決され、罪の苦悶がその根柢より醫され、神の前に義とせらるゝに至り、榮化の聖望に心おどりて歡喜と平安わが全身を霑ほすに至るときは、心は自から生命と力に充ちて道德は求めずして行はれるのである。これ道德的生活を實

現する最上の道である。故に道德の前に教義あり、教義の後に道德あるは、少しも怪むに足らざる當然の事である。

基督教道德と云へば大問題なる如く思はれ、之について大部の著述をなす學者がある程である。如何やうにも之を精密に論ずることは出來るであらう。しかし羅馬書の十二章、十三章を以て基督教道德の大綱はほゞ盡きて居ると云ふことが出來る。人の人に對する務、人の社會國家に對する務等、各方面に亙りて精細に說明されてゐる。人生に必要なる倫理道德はほゞ網羅されて居ると云ふことが出來る。故に一字一句に注意して丁寧に研究するときは、我等基督信徒の日常生活の完全なる指針となるのである。

先づ十二章第一節を見るに邦譯聖書には「然ば兄弟よ我れ神の諸の慈悲をもて汝等に勸む、その身を神の心に適ふ聖き活ける祭物として神に獻げよ、是れ當然の祭なり」とある。今これを原文の順序のまゝに譯せば大體左の如くなる。

されば汝等に勸む、兄弟よ、神の諸々の慈悲をもて、その身を獻げよ、神の心に適ふ聖き活ける祭物として、これ當然の祭なり。

實に其一字一句が意味深き語である。これ實に基督教倫理の根本原理である。實に此一節を以て倫理入門と稱することが出來る。

第一に立つは「されば」である（原文に於ては第一に勸むの語があり次にさればがあるが、之は此文字の性質上然るのであつて、意味の關係に於ては勿論さればが第一に立つのである）。このさればは何を受けての語であるかは一問題とされてゐる。マイヤーの如きは十一章三十五、六節を受けたのであると主張する。然し乍ら多くの學者は此語を以て、一章十七節以下の既說全部を受けての語であると見てゐる。この語は羅馬書の教義部と道德部の間に立つ所の「されば」である。故に教義部の全體を受けての語であると見るが最上の見方と思ふ。即ち「汝等キリストによりて義とせられ神と新しき關係に入らしめられたれば」の意である（サンデー）。義とせられ聖められ救の希望をもたせられたればーかく數々の大なる惠に接したればー言ひ難き歡びと安きを與へられたれば……と云ふ意である。かく「されば」を以て呼び起さるゝ道德の勸めである。たゞ爲すべし爲すべからずの誡めではない。充分の根柢ありて自から現はれねばならぬ勸めである。次の第二節以下十五章の終まで說く所多岐に亙つてゐるが、何れの誡めと雖もその前にこの「されば」を冠する所の誡めである。この如き意味の「されば」を冠する道德にして初て道德としての値がある、又實行せられ得る。即ち充分なる心靈的根柢と生命の源泉とを有する所の道德である。羅馬書十二章以後の基督教道德を學ぶに當つて、我等の常に心得置くべきは此の「されば」である。

「汝等に勸む、兄弟よ」と云ふ。「兄弟よ」とはパウロが何か重大な事、意味の深い事、自己の至

情などを改まつて云はうとする前に發する慣用の語である。例へば十章一節に「兄弟よ我心に願ふ所と神に祈る所はイスラエルの救はれんこと也」とある如き、またコリント前書十二章一節に「兄弟よ靈の賜については我れ汝等が知らざるを欲まず」とある如きを見よ。情のこもつた語、兄弟が兄弟に對して云ふ語である。パウロは玆に兄弟の態度を以て、親みをロマの信徒に向つて注ぎつゝ、溫き心を以て道德的の勸めをなさんとするのである。僅に一語を加へただけであるが、其中に筆者パウロの當時の心構へが充分に見える。そして偉大なれども纖細なりし彼の心を我等はこゝに見るのである。

「勸む」と云ふ、命ずではない。「モーセは命じパウロは勸める」とベンゲルは言ふ。モーセ律は權威を以てする命令である。そして之を行へば幸福來り之を破れば刑罰臨むと云ふ。即ちモーセ律は幸福の約束と刑罰の威嚇とを以てする命令である。然るに今や時來つて福音の時代となつた。先づ與へらるゝは恩惠である。然る後ち「されば……勸む」である。道德的命令を新たに課さうとするのではない。恩惠に浴して感激する結果當然あるべき事を念のために勸めるのである。勸めなくても讀者の當然實行すべき事ではあるが、或は忘るゝ者もあらうかとの心遣ひより改めて勸めるのである。故に自然に起るべき事をひき起すだけのことである。故に少しも命令として威嚇的に臨む必要はない。たゞ勸めただけで充分である。

「神の諸々の慈悲をもて」勸めると云ふ。第十一章までに於て說く所皆な神の「諸々の慈悲」である。殊に一章—八章に於ける救拯の本義は徹頭徹尾神の慈悲である。そこに著しきは人の罪と神の愛との對照である。人には唯罪の深きあるのみにて何の功なく只信仰によつて義とせられ、聖められ、救はると云ふ神の慈悲である。この神の慈悲をもてパウロは獻身を勸めると云ふのである。慈悲に感激して自ら爲すに至る獻身を念のためにパウロは尙勸めるのである。「神の慈悲に過たず心動かさるる者は其凡ての聖旨に從ふに至る」とベンゲルの云へるに注意せよ。

神の諸々の慈悲をもてパウロは何を勸めるのか。曰く「その身を獻げよ」である。パウロが玆にその身（身體）を獻げよとのみ云ひて、全身全靈を獻げよとも、汝自身を獻げよとも云はなかつた事については種々の說がある。しかし乍らその身即ち肉體を獻げよと明示してある上は、それが肉體的獻身を意味することは勿論である。パウロは何故此事に重きを置いたのであるか。彼は第二章に於いて「心を化へて新にせよ」と勸めてゐる故、第一節には專ら身體のことを云うたのであらう。抑も人の肉體なるものは人間が事を行ふ道具である。之を以て人は惡をもなし又善をもなす。之をサタンの誘ふまゝに濫用し惡用するが世の常である。其最も甚しき例は既に一章末段に記された。この惡用され易き又罪の機關となり得る肉體を、神に獻げて彼のために用ふるは、心を潔むると共に又肉體を聖むる道である。神のために此肉體—此頭、手、足を用ふるが玆にパウロの云ふ獻身である。その身を獻げよとは卑近なるが如くにして、實は深き勸めである。

「神の心に適ふ聖き活ける祭物として」獻げよである。祭物とは勿論ユダヤにあつては犧牲として祭壇に供ふる物の意である。ユダヤにはエホバを祭る數種の祭がある。幼きより之等の諸祭に親しみゐたるパウロは極めて自然に「祭物として獻げよ」との言を發したのであらう（自國の祭に對する一種の親みを以て）。燔祭は前であつて、酬恩祭は後である。共に犧牲を獻げる祭であるが、甲は罪のため乙は感謝のためである。而して信者の場合に於ては、キリストは我等に代りて「世の罪を負ふ神の羔」として自ら燔祭の壇に己を亡ぼせし故、我らの燔祭は既に了りて、今や感謝を表する酬恩祭を獻ぐべき時となつたのである。併し乍ら今や牛や羊を獻ぐるは神の心に適ふ所ではない。今獻ぐべき犧牲は自己の肉體である。聖き活ける祭物である。死せる牛や羊は今や祭物たる價をもたない。活ける我身體を全部―その肢體と共に全部―獻げて了ふこと、是れ「神の意に適ふ」祭物である。これを我らは感謝の意味に於て、恩惠に酬ゆる意味に於て獻ぐべきである。そして神の聖き御業のために我身體を全部用ふべきである。

パウロは右の如く全き獻身をすゝめて後ち「これ爲すべきの祭なり」と附記した。此獻身は基督者として當然爲すべきの祭であると云ふ意味である。「爲すべき」の原語を logikos（ロギコス）と云ふ。之は合理的と譯するが普通ではあるが（英語 rational）また靈的と譯することも出來る（英語 spiritual）。合理的と見れば、以上の如き恩惠を受けたる基督者がその身を獻ぐるは當然の祭であると云ふ意になる。實に理に適つた、無理のない、當然の獻身であると云ふのである。是れ普通の見方である。そして此見方には何等の故障もなくして文字上、意味上自然にして無難なる見方である。併し又靈的と見る方にも捨て難き點がある。同一の文字がペテロ前書二章二節に用ひてあつて「靈の眞の乳」（改譯聖書）と譯してある（現行譯聖書に心を養ふとあるは稍々意譯に過ぎてゐる）。又同じ二章五節には「イエスキリストに由りて神に悅ばるゝ靈の祭物を獻ぐべし」とある。この方は別の文字を用ひてはあるが此節の意味が羅馬書十二章一節と酷似せるは見逃し難き點である。或はパウロは「これ靈的の祭なり」と云ひて、ユダヤ諸祭の物質的なるに對比せしめたのかも知れぬ。殊に此頃民と祭司との墮落のために、ユダヤ諸祭はその美しき意味を忘れられて、專ら物質的、形式的の祭と化し去つてゐたのである故、パウロは殊に力をこめて靈的の祭なりと云うたのかも知れない。いづれに定まつてもその主意は同一である。

基督者にも亦祭がある。それは既に形式化したるユダヤの諸祭儀の如きものではない。又異邦に行はるゝ所のかの俗の俗たる祭の類ではない。そして又日を定めて或一日又は數日をのみ神のために用ふる祭ではない。基督者の祭とはその當然爲すべき祭であり又靈的の祭である。それは其身を「神の心に適ふ潔き生ける供物として獻ぐ」る所の祭である。一度その身を獻げて日々に連續して其身を獻げつゝゆく祭である。別の語を以て云へば信者はその生涯全部が祭である。彼には此世の謂ゆる祭は

ない。けれども祭が全くないと云ふは誤つてゐる。否祭を最も多く營む者は彼である。何となれば彼は毎日々々祭をするからである。否その全生涯が祭の連續であるからである。否その全生活が即ち祭であるからである。故に我等は他に特別の祭をする要がないのである。

以上を以て十二章一節の解を終る。まことに右の如きが基督教道德である。基督教道德は全き獻身を先づ第一とする。それより凡て行爲の細末にわたるのである。然し獻身と云ふも單なる命令ではない。まづ神の恩惠に豐に浴し、人生の根本問題を解かれて、歡喜滿悅のあまり當然爲し得る獻身のすすめである。かくして深められたる心より自發的に起る所の愛の行と生涯である。何の根柢なき道德ではない、根柢を明かにせられし故合理的に爲し得る所の道德である。理に適つて心から行ひ得る道德である。賦課ではない、心から爲し得る獻身、喜んで爲し得る獻身、及びその結果としての行爲である。これが基督教道德である。僅に一節の中に基督教道德の大體が說かれたのである。

第四十七講　基督教道德の性質

羅馬書第十二章は信者の一人としての道、十三章は社會の一員としての道を說示したものである。そして十四章、十五章は同じく實踐上の問題に係はつては居るが、特に羅馬教會特有の事柄について注意を與へたものである。故に一般的の基督教道德と云へば十二、十三章を以てほゞ其大綱を盡してゐるのである。而して前講に說きし如く、十二章の第一節は基督教道德の根柢であると共に、またそれが實行の動機であると云ふことが出來る。即ち神の愛に感激して全き獻身をなせよとのことである。もし此事さへ充分に出來れば、他の事は學ばずとも自(おのづ)から明瞭となるのである。しかしパウロは念のため尙ほ諄々として基督教道德の全般を語らんとするのである。

第一節は基督教道德の根柢である。之に對して第二節の說く所はそれの性質である。そしてパウロ

は彼れ特有の習慣として、先づその消極的半面を說き、然る後その積極的半面を說くのである。消極的半面とは二節の前半である。曰く

この世に效ふ勿れ

と。そして積極的半面とは二節後半である。曰く

汝等神の全く且つ善にして悅ぶべき旨を知らんが爲に心を化へて新にせよ

と。寔に此兩方面を併せる時、そこに基督教道德の性質は遺憾なく知らるゝのである。健全なる道德は一方に於ては此世の潮流に對する反對、他方に於ては心の革新である。此兩者を兼ねる所に基督教道德は成立する。然らざる所には基督教道德はないのである。

「此世に效ふ勿れ」と云ふ。此世に效ふ所には基督教道德はない。基督教道德は何處から見ても非現世的である。非習俗的である。今これを實際問題として見よう。基督教會なるものは兎角此世に效ひやすく、そして其爲めに墮落し易きものである。しかし眞の教會は Church-militant である。即ち此世と戰ふ教會である。此世との戰をやめて此世の風潮に效ふときには、教會の生命は失せて直に無力となり墮落する。パウロは基督教道德の內容を細說する前に當つて、まず「此世に效ふ勿れ」と云ひて、此世と其惡に對する態度を明かに示したのである。これで基督教道德の性質は可成り明かとなつたのである。

更に此の「效ふ勿れ」といふ原語の意味を研究する時は、此語が尙ほ一層意味ふかき語なるを知るのである。「效ふ」は原語を sunschēmatizō（スンスケーマチゾー）と云ふ。これ schēma（スケーマ、英語の scheme）より出でし語である。スケーマとは此世の移りゆく樣を云ふ語、スンスケーマチゾーは此移りゆく樣と共になることを意味する。故に「效ふ勿れ」は此世の移りゆく樣、流行、風潮に加はる勿れといふ意味である。世は常に風の如く流れ潮の如く動くものである。恰も婦人の服裝の流行が、流行といふ文字が示す通り絕えず流れ行くが如きが謂ゆる此世の風潮である。時代思想など云ひて之を貴ぶ人が多い。しかし世の最も高尙と見ゆるものまでがスケーマ（流行）である。帝國主義の時代があり、平和主義の時代があり、社會運動の時代があり、謂ゆる宗教的熱心の時代がある。何れもこれ婦人の衣裳の類である。昨是今非、變轉きはまりなく、何の貴さもなく、風の如くにして何等捉へ所のないものである。

然るに基督教會の多くが、又基督信者の多くが此の世の流行に效ひつゝあるは痛歎すべきことである。變りゆく此世の相に己を似せ、周圍の色の變るごとに之と同じ色に塗りかへ、世が帝國主義を高唱する時は之に同じ、世が社會運動に熱狂する時は又之に加はり、もし斯く世に效はざる時は教會又は信者の生命は衰ふべしと考へる。併し世に效はざる所に教會及び信者の生命がある。世は教會に向つて己に效ふべきを要求すれど、少しく時日を經過すれば己に效ふ者を賤むるのである。然るときは

味を失ひし鹽の如きもの、後は用なし外に棄てられて人に踏まるゝのみである。然るに此事に氣づかずして、浮草の如く潮流に流されつゝある現代教會の愚かさよ。見よ海中に屹然として立つ岩を。滿潮のとき潮は高鳴りしつゝ陸に向つて押しよせ押しよせ、海に漂ふ凡てのものを共に動かし、岩に向つても云ふ「共にかの陸に向つて行かずや」と。しかし岩は海底ふかく根をおろして毅然として動かない。又退潮のとき岩に向つて「共に沖に出でずや」と誘ふも敢て顧みない。これ正に基督者の此世の風潮に對する態度でなくてはならない。此世は亡ぶべきもの、その根本精神は物慾追求にある。神を信じて永遠の國を懷ふものは、斯かる世の流行風潮の外に超然として獨自の境を守つて居なくてはならぬ。故に云ふ「此世に效ふ勿れ」と。

次の積極的半面は「心を化へて新にせよ」である。こゝの「心」は原語 nous（ヌース）と云ふ。ヌースは pneuma（プネウマ）のごとく魂を意味する語ではない。心思（マインド）を意味し判斷力（アンダスタンヂング）を意味する。善と眞とを見分る力、これ即ちヌースである。故に心を化へて新にせよと云ふのは、人生觀を一變し一新せよとの意である。物の見方を全然改めよとの意である。パウロが玆に魂（スピリット）と云はず心情（ハート）と云はざるに注意せよ。彼は勿論必要なる場合には「魂」を云ひ又「心情」を云ふ。しかし玆には特に判斷力の變改を促したのである。人は心情だけ良いでは足らぬ。判斷力も亦良くなくてはならぬ。心思も亦涵養せられねばならぬ。かの福音を以て單に情を潔めるものとのみ見なす者は誰ぞ。これ一方に偏せる見方である。情が涵養せられても知性が涵養せられない時は、信仰的生涯に確固たる重味が加はらないのである。我等は心思、判斷力、常識を養はなくてはならぬ。そして此世の人のそれと異なる或新しき世界へ心の眼を向けねばならぬ。普通の心は「肉の心」（コロサイ書三章十八節、己の心とあるは誤譯）である。故に之を化へて靈的の心とせねばならぬ。かく心を變革するためには靈魂の改造、情性の涵養が必要である。併しパウロの特に玆に力說する所は知的判斷力の改新である。即ち心を化へて新たにせよである。これ眞に重要なる誡めである。

何故心を化へて新にすべきか。そは「神の全く且善にして悅ぶべき旨を知らんがため」である。こに神の旨（聖意）と云ふ語に對して、三の形容詞が用ひてある。第一は「善なる」である。第二は「悅ぶべき」である。第三は「全き」である。（原語の順序による）。神の善なる意、悅ぶべき意、全き意である。かゝる神の聖旨を知ることは、基督者の實際生活に於て常に最も必要なる事である。之がためには先づ心を化へて新にせねばならぬのである。

然らば神の旨を知るの道如何。或は天然の中に或は世界の推移の中にこれを探ることが出來る。併し先づ第一には聖書の研究である。聖書の中には明かに神の御旨が記されてゐる。之を「心」を以て—化へられたる新たなる心を以て—學び、そこに示されたる聖旨を知らねばならぬ。由來基督信者と

稱する者にして聖書を充分に讀まざる者、聖書の研究に頗る冷淡なる者多きは彼等の大通弊である。そして神の御旨と云へば、唯「愛」であると考へて居る。しかし其愛とは如何と問へば、明瞭なる答をなし得るもの果して幾人かある。神の御心たる愛は、かく一口に人の云ふほど簡易なるものではない、愛とは如何なるものなるかを知るために、聖書の全體を學ぶ必要がある。健全なる知的理解力を以て聖書を充分に研究し精讀せずしては、神の善にして、悅ぶべき、全き旨を知ることとは出來ない。もし斯くして充分に聖書を學ぶ時は、そこに示されたる神の御心の全く豫想外なるに驚くのである。されば我等普通の心を棄て肉の思ひを去り、變革せられたる新たなる心を以て聖書を學び、以て神の全き旨を探るべきである。聖書の研究は決して知的遊戯ではない。それに依て活ける聖旨を知り、之を實際生活に於て行ふためのものである。

今第二節を全體として見るに、全く此世の人の意表に出づる誡めであることを知るのである。此世に效ふ勿れとは先づ人の意外とする所である。此世の風潮とは多數決である。多數決は眞理であると人は考へる。然るにパウロは玆に先づ此世に效ふ勿れと云ふのである。また人は宗教問題に於ては知性よりも第一に情性であると考へ、情性の涵養だけで足ると考へる。然るにパウロは知性を變革し改新して神の心を知れと教へる。そして神の心と云へば愛を指すのであつて解りきつて居るとの普通の考に反して、右の如き新たなる知性を以て之を究め學べと勸める。かく第二節全體が悉く人の意表に出づる誡めであることに注意せねばならない。

實に神の誡めは人の意表に出づるものである。その實例は次の第三節以下である。こゝに信者の實踐道德についての聖意が記されて居るが、それを精讀してその全く豫想外なるに驚くのである。決して漠然たる愛と云ふが如きものではない。「我が思は汝等の思と異なり、我道は汝等の道と異なれり」（イザヤ書五五章八節）とある通りである。之を精密に研究して初めて神の聖意を知ることが出來る。然らずしては基督教道德の何たるかを知り得ないのである。

尙ほ注意すべき二三のことがある。第一に「效ふ」といふ文字と「化へる」といふ文字との比較である。パウロは此世に效ふ勿れ心を化へよと勸める。效ふは前述する如くスンスケーマチゾー即ち此世の樣に從ふことである。此世の樣は即ちスケーマである。そして「化へる」の原語をmetamorphóō（メタモルフォオー）といふ。これmorphē（モルフェー）より出でし語である。モルフェーは形を意味する（英語form）。メタモルフォオーは形を化へよの意である。パウロの勸めは、此世のスケーマに從ふ勿れ心のモルフェーを化へよと云ふのである。今スケーマとモルフェーとを比較するに、スケーマは前說せし通り移りゆく世の相であつて變轉きはまりなきものである。之に對してモルフェーは確固たる形である。甲は表面だけの形で常に變りゆくもの、乙は或觀念が自然に取る所の形である。即ち心ありての形である。甲は何等確實なる根據なく、たゞ新奇を好む人心に從つて變轉しゆく浮薄

なる外裝である。然るに乙は心が變りしためにそれに應じて自から變る外の形であり、從つて心が不變なる時は常に不變なる形である。されば此形即ちモルフェーを變へることは容易のことではない。これメタモルフォオー即ちモルフェーを化へることの困難なる理由である。併し乍ら一度これを化へた上は、又容易に動かざるものである。「心を化へよ」とは先づ精神を改め觀念を新たにして形までも自から變ることを云ふ。此世のスケーマ即ち變轉きはまりなき外相に從ひて己も亦變轉する勿れと、これ此世に效ふ勿れの意である。心のモルフェー（形）を變へて新しきモルフェーとなし、確固不拔再び動かざる形を取れと、これ心を化へて新にせよの意である。一方に於て世の諸相の移りゆくあり、他方に於て基督者の心の變らざるあり、世の動きつゝある間に、一度化へたる後永久に變らざる我等の人生觀あり、その對照が此節の中に、殊に此二語に充分に表はれて居るのである。

次には「效ふ勿れ」「化へよ」といふ二つの動詞の態（voice）に就て注意すべきである。人の普通知るところは能動態（active voice）と受動態（passive voice）である。日本文法には態は此の二つのみしかない。能動態とは働きかけである。「與ふ」「打つ」の類である。受動態とは受け身である。「與へらる」「打たる」の類である。甲は全然自力、乙は全然他力である。甲には自分の意志のみあり、乙には他人の意志のみある。然るにギリシヤ語その他の國語に中態（middle voice）といふものがある。之は他力と自力の結合を示す態である。即ち自分に意志はあれど力なき場合、或る他の者の力に己を任せ、其力によりて、我が意志の遂げらるゝを待つと云ふやうな場合に用ひらるゝものである。

此世に效ふ勿れ、心を化へよは、原語に於ては共に此中態を用ひてゐるに注意すべきである。即ち自力のみを以て此世に效はず心を化へよと云ふのではない。かく云はるゝ時パウロの此勸めは不可能を強うるものである。さりとて又全然自分の意志なく全く受動的に斯くなれと云ふのではない。自己の意志を少しも動かさずして唯靜かに受身の態度に己を置いたのみでは、此勸めの實現せらるゝ時はない。此世に效はないこと、心を化へて新にすること、之は自力と他力の結合の上に初めて行はるゝものである。世に效はじとの決意、心を化へんとの努力、それを抱いたまゝにて神の大なる能動の中に己を投ずるのである。そして神の力に浴して我決意を實現し我努力を有效ならしむるのである。これが此誡めの實行せらるゝ道である。基督教道德を自力本位にのみ解する勿れ。然るときは堪へ難き重荷となる。又恩惠を樂むのあまり全然他力的となる勿れ。かくては緩怠弛廢の空氣いと濃きを加へるであらう。宜しく自己の努力と神の力との一致融合の上に之を建つべきである。これが基督教道德を行ふ所の道である。

第四十八講　基督教道德の第一　謙遜

第十二章三—八節の研究

第十二章の第一節は感激より起る獻身を說く、これ基督教道德の根柢である。そして第二節は此世に效ふ勿れと云ひ心を化へて新にせよと勸める。これ基督教道德の性質である。この二つの節を以て基督教道德の根本的精神は盡きてゐる。第三節以下は之が適用である、又基督教道德の細則である。勿論第三節以下十三章の終までを以て全部を盡すと云ふことは出來ない。しかし其重なるものはほぼ擧げられてゐる。即ちパウロはここに基督教道德中大切なりと信ずるものだけを選り拔いて記したのである。我等は此心を以て注意深く之に對すべきである。

第三節より八節までは謙遜である。基督教道德と云へば直ちに「愛」と人は云ふ。故にパウロは此場合まづ第一に愛を說くべきであると考へる。併しパウロの爲す所は少しく普通の信者と違ふ。彼は第一に謙遜について記して然る後ち愛に說き及ぶ。これ特に注意すべき事である。

第三節の初めに於てパウロは先づ言ふ「我れ受くる所の恩に藉りて汝等各人に告げん」と。この發語の頗る謙遜なるを見よ。彼は使徒の一人であり殊に其最も大なる者であつた。彼は或場合には「我は何事にも最も大なる使徒たちに劣らずと思ふなり」(コリント後書十一章五節)と公言せし程であつた。殊に異邦傳道の重責を神より委託せられたる彼であつた。故に「我れ命ず」と云ひても何の差閊はなかつた。或は「我權能を以て告ぐ」と云ひても誰も怪むものはなかつた。然るに彼は我れ受くる所の恩によりて告げんと言ふ。勿論此場合の「恩」は使徒職たる資格を與へられ居ることを意味するのであるが、わざと「恩」といふ語を選びしは彼の美しき謙遜を語るものである。謙遜の敎を說くに當つて先づ謙遜の態度を取る、まことに美はしき心事と云ふべきである。

謙遜について聖書の敎ふる所如何。それが日本人の普通に考へ居る所のものと根本的に相違してゐることに注意すべきである。日本に於いては謙遜と云へば、主として外形上のことである。即ち態度言語に關したことである。その心の狀態の如きは敢て問はず、たゞ外に現はれた形を捉へて謙遜といふ。その心如何に神に對し又人に對して謙遜なるものであつても、言語や態度に於て恭謙ならざる者は傲慢として貶せられ、その心は驕慢にても表に謙遜を裝ふものは德器と稱せられて、決して僞善者と云はれないのである。我國に於て謙遜なる道德が斯く表面的に淺く見られ居るは、慨はしき事であ

る。自己の能力を用ふべき場合にても人の前にわざと隱すこと、又は集會に於て席の讓り合ひに空しく時間を費すこと、之等を以て謙遜の美德と考へ居るため、それに由りて我國人の受くる損害は一通りではない。かゝる誤れる謙遜は百害あつて一利ない。我等は宜しく之を棄てゝ、聖書の敎ふる眞の謙遜を學び、之を行ふべきである。

パウロの敎ふる謙遜とは如何。パウロは言ふ「心を高ぶり思を過すこと勿れ。神の各人に賜はりたる信仰の量に從ひて公平に思念ふべし」と。之が彼の敎ふる所の謙遜である。第二節とひとしく前半は消極的の「勿れ」であつて、後半は積極的の「べし」である。謙遜の消極的半面は「心を高ぶり思を過すこと勿れ」である。之は意譯であつて原文には「自己について正當に思ひ得る以上に思ひ過す勿れ」とある（英語聖書參照）。之を一言にして云へば「思ひ上る勿れ」である。自己を正しく知ること、自己の値打を正しく知ること、それが先づ第一である。そして其自己の價値以上に自己を思はないこと、これ即ち謙遜の消極的半面である。神に對して己の無知無力なること、キリストに對して己の罪深く穢れ多きことを知りて、人は心に謙遜を抱くべきである。大學者ニュートンが宇宙の大に對して自己の知識の淺小を充分に認め居たるが、最も美はしき謙遜の實例である。出來る事を出來ぬと云ひ知れる事を知らぬと云ふは虛僞にして謙遜ではない。自己について思を過さないことが謙遜である。深く學べるものは、自己の知識の限度を能く知りて謙遜である。眞の學者は皆謙遜である。同

樣に眞の信者は皆謙遜である。僅少の知識を誇るもの、不純なる信仰を以て得意とする者、かゝる人たちは自己について思ひ上りて、自己の淺慮を人に示して居るのである。

謙遜の積極的半面は「神の各人に賜はりたる信仰の量に從ひて公平に思ふべし」である。「信仰の量」とは信仰の分量ではなく、信仰のことについて與へられたる力の分量であると思ふ。即ち信者として自己の爲し得る働き、信者として自己に與へられし或技能を指すと思ふ。この働き、この技能相當に自己について公平に（思ひ過さぬやう謙遜に、正確に、眞面目に）思ふべきである。自己に與へられし賜物を其儘に、その値だけに評價せよである。人に皆いづれも天賦の技能がある。如何なる人と雖も何をも持たずして生れ來るものはない。そして彼が基督者となれば、神は此天賦を發達せしめ、聖化せしめ、尙ほその上に種々の能力を賜はるのである。これ「與へられたる信仰の量」である。かく與へられたる能力ある以上は、それを無なりと考へてはならぬ。いかに自己の罪は深くとも神は我に能力を賜ひて益々之を聖化せんとし給ふ。信者は此賜物の與へられあることを認めて感謝し、之を神のため主のため又人のために用ふべきである。謙遜と云ふことは自己を眞價以上に見ないとともに又眞價以下に見ないことである。正當に認むべきだけに、公平に、正確に、差支なき程度に於て自己の賜物—與へられある能力—を認むる事である。

以上第三節の說く所は謙遜の眞性質である。心を高ぶり思を過す勿れ信仰の量に從ひ公平に思ふべ

し、即ち自己を眞價以上に見る勿れ、又眞價以下に見るなかれ、自己に賜はれる能力をその儘に認むべしと云ふのである。自分に凡ての能力が具はつてゐると思うてはならない、又自分に一も能力がないと思うてはならない。自分の能力を正確に知れる者は、驕慢なることなくして能く謙遜たるを得るのである。かくパウロは說きて、四節以下に於て此謙遜の敎を實際に當てはめて說明するのである。

まづ四、五節に於て言ふ

即ち我等一つ體に多くの肢あれども皆その用を同じうせざるが如く、各人キリストに於て一體たれば亦互にその肢たる也

と。キリストに於て一體たるもの是れ基督者である。そして人體の各部が皆その用を同うせざる如く信者も亦互にその働き、その能力を異にして居るのである。人體には色々の肢がある、腦、目、鼻、口、手、足、その他內臟等各々働きを異にしてゐる。何れも相助け相補つて人體といふ一の組織をなしてゐる。目は見ることだけは出來る。しかし目は腦の働きをなすことは出來ぬ。又手の代りとなることは出來ぬ。もし目が手や足の働きをなし得ると思へば之は高ぶりである。同時に見ることも出來ぬといへば之は僞はりの謙遜—日本流の謙遜—である。目は見ることの出來る自己の能力を正當に認め、それ以上にもそれ以下にも自己を認めないのが眞の謙遜である。

一つ體の各肢體たる信者は、自己について斯く認めねばならぬ。自己にある能力だけを認め、その能力を働かして他のために盡し、他人のもてる能力を貴びてその値を認め、互に相推賞して謙遜の美を發揮せねばならぬ。哲學者ライブニッツは「有機體とは其各部が同時に手段にして且目的たるものなり」との定義を下した。目は自己を以て目的としてはならない、他の各肢體を目的として之に仕へねばならぬ。しかし耳より見れば目が又目的の一たるのである。信者各自は自己を以て目的とせず互に他を以て目的とすべきである。故に自己は自己より見れば他の手段であるが、又他より見れば一の目的である。かゝる精神が凡ての信者にあれば其敎會は實に理想的の團體となるのである。

パウロは此事を當時の敎會の實例に照して說明した。これ六節より八節までゞある。

然れば賜はる所の恩によりて各々賜を異にせり。或は預言あらば信仰の量に從ひて預言をなし、或は役事あらば其役事をなし、或は敎誨をなす者は其の敎誨をなし。勸慰をなす者は其の勸慰をなし、賙濟をなす者は吝なく施し、治理をなす者は懈らず治め、矜恤をなす者は歡びて憐むべし。

とある。敎會は各員皆な神より賜はれる技能を異にしてゐる。或人は目たり、或人は口たり、或人は足たるのである。玆にパウロは預言以下七つの務めを擧げてゐる。これ當時の敎會の實際であつたのである。故に之は謙遜を敎ふる說明を助くるに止まらず、初代敎會の實況を知る一の資料として興味深いものである。

第一に「預言をなす者」である。預言とは神より直接に啓示されし眞理を人に向つて語ることである。預言者は初代教會に於ける第一の職ではない、尙その上に「使徒」があつた。コリント前書十二章二十八節に「神は第一に使徒、第二に預言者……を教會に置き給へり」とあり、エペソ書四章十一節にも「使徒あり預言者あり……」とある。使徒の次は預言者である。そして預言をなすものは「信仰の量に從ひて」なさなくてはならぬ。信仰に相應ずるやうに預言をせねばならぬ。（玆に云ふ信仰の量に從ひては第三節の信仰の量に從ひてとは原語を異にする。英譯聖書に於ても同樣である。然るに邦譯聖書が改譯に於てまでも、兩者に同じ譯字を用ひたのは粗漏と云ふべきである。此の方は信仰に相應ずるやうと譯する方原意に近いと思ふ）。

信仰に應ずるやう預言せねばならぬとは何を意味するか。玆に云ふ信仰とは何の信仰か。これ學者間にむづかしき問題となつてゐる所である。しかし福音についての正しき信仰と見てよいと思ふ。正しき信仰に應ずるやう預言すべし、これが眞の預言である。預言に何の標準もなく何を云うても宜いと云ふ筈はない。正しき信仰は聖書に記されてゐる。聖書の範圍に於ての預言ならずしては眞の預言でない。神の示す所は漸次的であつて、神の啓示は前進的である。神は突發的に、全然既往と關係なしに新眞理を啓示し給はない。それは舊約時代より新約時代への過程がよく說明してゐる。されば今までに示されたる教の基礎に立てる新眞理の提唱が預言である。玆に預言の眞僞を判別する標準があるのである。

預言の次は「役事」である。原語 diakonia（ヂアコニア）は英語の ministry に當る。有形無形の賜物を信者に頒つこと、教會員全體を益せんために實際的の役目に當ること、今日の語にて云へば牧師と執事の職を兼ねし如きものを指すのである。これは教會全體の健全及び發達に係はる重き役目であつて、預言の次に位するものであつた。

次は「教誨」である。之をなすものを教師と云ふ。教師は預言者と等しく口を以て働くものである。しかし教師は預言者の如く新默示を語るものではない。既に示されたる眞理を說明し、敷衍して人々の了解を助くるものである。即ち教理の說明者である。

教師の次には「勸慰をなす者」があつた。之は人々を激勵し慰諭して、より強き信仰生活に進ましむる役目である。教誨は專ら知性に訴へるもの、勸慰は主として情意に訴へるものである。熱烈なる說教をなして會衆を激勵するもの、情をこめたる詩を賦して人々を慰むるもの、何れもこれ「勸慰をなす者」である。

以上四つの役目は、主として教會員及び其教會に出席する求道者のみに係はれるものである。そして以下の三つの役目は教會の此世に對する働き（今日の語にて云へば社會奉仕）に係はるものである。その第一は「賙濟をなす者」である。即ち「分け與ふる者」である。エペソ書四章二十八節に「貧者

に施さんために勵みて手づから善き工を作すべし」とあると原語は同一である。故に慈善の事務に當る人を指さずして、自己の財を頒ちて貧者を霑ほす者を指すのである。「吝なく施すべし」は「單純に施すべし」の意である（英譯 with simplicity）。慈善をなすに單純率直ならずして、種々の條件を附するは我國の通弊である。慈善は全く無條件になすべきである。これ對手を尊重し且つ自由を與へることである。又對手を信じ且愛する時は、慈善は無條件ならざるを得ないのである。慈善を單純に施して、其結果に注意を拂はざる眞の慈善である。「なんぢ施濟をする時右の手の爲すことを左の手に知らする勿れ」（マタイ傳六章三節）とは此種の慈善を云ふのであらう。

次は「治理をなす者」である。之は人を助くるための種々の事務に當るもの、慈善その他善事の實行に當る役である。教會に於て行ひ居たる種々の慈善博愛の事業の處理者を意味するのであらう。「懈らず治め」とあるは「迅速に治め」の意である。愛の事業の處理は迅速を貴ぶ。迅速ならざる時は效果が少ない。迅速熱心は此種の業の要訣である。

最後に擧げられしは「矜恤をなす者」である。之は慈善以外の愛の業を指す。病者を見舞ひ苦める者を慰める等の精神的の矜恤をなす者を云ふ。そして「矜恤をなす者は歡びて憐むべし」である。「歡びて」は歡びを以て、飛びたつばかりの歡びを以て、浮々した輕き心を以ての意である。原語は英語の with hilarity に當る語である。顏にも態度にも樂しさ、喜ばしさの充溢れる者ならずして此事に當り得ない。實に苦める者に矜恤を表はす場合には、此注意が最も肝要である。

初代教會は右の如き各種の役目があつた。そして其各々に適する人があつた。併し一人で凡てに適する人はない。謙遜とは己に適せる働きを認めて熱心を以て之に從ふと共に、自分に適せざる役目を適する如く誤認することなく、他人の適任なるは充分に之を認めて敬意を表し、各々の働きが一つ體の肢として肝要なるものなる故互に高ぶることなく、同時に自己に與へられし技能を隱さずして用ふること—これ即ち謙遜である。心を高ぶる勿れである、同時に自己に與へられし才能について公平に思ふべしである。そして一つ體の一の肢として其才能を用ひよである。半ば消極的にして半ば積極的、これ基督教的謙遜の特徴である。普通道德家の云ふ謙遜に比して其差の如何に大なるよ！　これ基督者の行ふべき謙遜である。

第四十九講　基督教道德の第二　愛（一）

第十二章九、十節の研究

前講に說きし如く、基督教道德の第一は謙遜である。そして謙遜は何人にも勿論必要であるが、殊に何か或物を持てる者に取つては格別にも必要である。即ち學識あるもの、智能あるもの、資材あるもの、地位あるもの等は特に謙遜の德を行ふべきである。故にパウロは特に教會中の有力者に向つて此德を强く說いたのである。謙遜の次にパウロは愛を說く。そして愛の特徵はそれが誰人にも必要なる點にある。有力者無力者の別なく、如何なる基督信徒に取つても、教會の如何なる一員に取つても常に行はねばならぬものは此德である。

先づ九節と十節とに注意するを要する。邦譯聖書に於て見るに左の如くある。

愛は僞ることを勿れ、惡は憎み善は親み、兄弟の愛を以て互に愛し、禮儀をもて相讓り

とありて、行文頗る簡潔である。パウロは羅馬書を論文として認めないで、書翰として認めたのである。勢ひ言葉は簡潔ならざるを得ない。且つ教義の說明に可成りの字數を用ひたる後であるから、終を急ぎしと見え、用語は恰も電文の如く簡潔である。併し短き語の中に深刻且つ高遠なる眞理が含まれて居る。注意深く一語一語を研究する時は少からず教へられるのである。

「愛は僞ることを勿れ」とある一句は、英譯聖書は五字を用ひて居るけれども、ギリシヤ原文は僅に二字より成つてゐる。即ち「愛」といふ字と「僞りなし」と云ふ字より成つてゐるのである。從つて「愛は僞りなし（僞りなきものなり）」とも解することが出來る。しかし「愛に僞りある勿れ」との誡めと解するのが正しいであらう。僞りある勿れの原語は僞善ある勿れの意である。僞善（英譯hypocricy）は假面を意味する語である。そして假面とは元來演劇より起りし語である。我國に於ても、何れの國に於ても最初の演劇は俳優が假面を被りて舞臺に演ぜしものである。故に愛に僞善ある勿れは、愛を俳優的に演劇的にする勿れの意である。人は心に惡意を抱いてゐても、外に愛を裝ふことが出來る。此世に於て行はるゝ愛といふものの如きは概ね此類である。即ち愛の假面を面にかけただけである。人生に於ける愛の交換は多くは假面劇である。不信者は勿論然り、信者の中にさへ之が甚だ多いのである。我等は此弊に陷らぬやうに心せねばならぬ。假面の愛を以て人に對せぬやう注意せねばならぬ。

是れ愛に關する一般的注意である。之より更に細密なる注意を述べるのである。先づ一般的のこと

を述べ、次に細密に亙つて述べ、兩々相俟つて了解を助くるがパウロ式敍述法である。「惡は憎み」といふ、まづ此事を勸めしは注意すべきである。愛の教の細則を說かんとして第一に憎惡を說くは、人の意表に出づることである。愛といへば全然愛にして、其中に憎の一部分なりとも含まるべきでないと普通の人は考へる。しかし乍ら眞の愛は惡に對する憎惡を充分に含むものである。假面的の愛又は淺き愛は惡を憎むことを知らない。けれども深き眞なる愛は斯くあることは出來ないのである。強く惡を憎む人ならでは強く善を愛するを得ない。キリストの愛が此種の愛なることは四福音書に明示さるゝ所である。そしてすべて彼の忠實なる弟子はこれであつた。ダンテ、ミルトン等高貴なる精神に燃えてゐた人の詩文を見よ。いかに惡に對する激烈なる憎惡が表明されて居るか。彼等は惡と虛僞と僞善とに對して憤激措く能はなかつたのである。かゝる有樣なればこそ神に對し眞理に對して熱愛を抱き、又人に對しても深き愛を抱き居たのである。これ吾人の學ぶべき事である。強き憎みを抱かずして強き愛を抱き得る筈がない。博士ジョンソンが、憎み得ざる者を其倶樂部員に加へなかつたといふのは此事を知つて居たからである。されば云ふ、強く惡を憎めよ、然らずしては眞の愛の何たるかを知り得ないと。

惡を憎むは愛の消極的半面である。次には例に依つてその積極的半面が記さる。即ち「善は親み」である。之を邦譯聖書の如く「惡は憎み善は親み」と譯しては頗る語に力のなきを憾む。憎みの原語apostugeō（アポスツェゲオー）は「嫌惡を感じて退縮す」の意である。又親みの原語 kollaō（コラオー）は「膠着す」の意である。共に強き感情の籠りたる語である。惡を見ては蛇に逢ひし如く嫌惡を覺えて退縮し、善を見ては膠を以てする如くそれに固着すべしと云ふのが此誡めである。愛は此要素を缺いてはならない。人を愛すると云うても、其人の爲す善をも惡をも共に愛してはならぬ。これ眞の愛ではない。眞の愛は其人の惡を強く憎むと共に其善を強く愛するのである。從つて惡に向つては充分忠言を與へ、其の善に向つては充分の助力をなすのである。實にパウロ式の勸めである。彼自身が斯る人であつたことは彼の生涯の行動、又彼の書きし物—殊にガラテヤ書やコリント後書等—が明示してゐる。しかし之はたゞ氣質の問題ではない。眞に神の靈に占領せられたる者は、何れも斯くあるのである、斯くあらざるを得ないのである。

善に對しても惡に對しても平然たるは不信者の常であるが、殊に日本人に此傾向の著きは痛歎の至である。自己の利益に關する事なれば非常なる熱心を表はし、寢食を忘れて狂奔する。けれども正義に對して少しも熱烈なる贊成を表はさないと共に、不義に對しては何等著しき反對を示さない。善に向つても惡に向つても常に冷々淡々、恰も別世界の事柄に對するが如くである。社會全體に漲る不眞面目と倦怠、公義の念の缺乏、人生に對する嚴肅なる態度のなき事、眞正なる友誼に乏しき事等、いづれも皆かゝる心理狀態の產物である。この邦人の通弊は基督信者となりし者の中にも往々にして殘

存する。故に我等はパウロの此誡めに深き注意を拂はねばならぬ。そして大に省る所なくてはならぬ。「愛」といふが如きは解りきつた事と思つてゐる人が多い。しかしパウロの此誡めに接して愛の眞性を學ぶ時、いかにそれが人の意表に出づるものであるかを覺ゆ。實に自ら能く知れりと思へる者は未だ其知るべきほども知らないのである。注意せよ人々！基督教的愛の如何なるものなるかを學べ！そして之を實行し得るやう祈れ！

愛に僞りがあつてはならない。そして愛の要素として缺くべからざる事は、惡を強く憎み善を強く愛する事である。然らば次に必要なる事は何か、それは「兄弟の愛をもて互に愛し、禮儀をもて相讓」る事である（十節）。「兄弟の愛」とは謂ゆる兄弟姉妹の愛の意ではない、肉身の兄弟の愛の意である。原語 philadelphia（フィラデルフィア）は此意味である。「互に愛し」は原語を philostergoi（フィロステルゴイ）といふ、家族に對する情的の愛情を意味する語である。故に「兄弟の愛を以て互に愛し」は兄弟、肉身、骨肉の間の愛の如き愛を以て、深く強き愛着の心を以て情的に相愛せよとの意である。基督信者の間の愛は斯くあらねばならぬ。眞の基督者は相互に對して此愛を抱く。この愛の行はるゝ所が即ち「エクレジヤ」である。初代の教會は之であつた。又福音の思ひの外早く世界に擴がりし理由の一は、初代信者間に實在した此愛のためであつた。我國に於ても明治の初めに於て一時福音が盛であつた頃は信者間の愛は眞に美はしく、かゝる潔き愛の行はるゝ處に我も加はり度しとの考から教會に加入した人が多かつたのである。

あゝ四十年前に於ては、我國にも此美はしき信者間の愛があつたのである。然るに近時は如何、どこに此種の愛が行はれて居るか。兄弟姉妹とは口に上せる言葉たるだけに止まつて其實は何處にあるか。信者の間に存するものは嫉妬、憎惡、惡感、惡言、陷穽等である。教會墮落の有樣如何、實に痛歎すべき限ではないか。共に主にある者は當然この愛を以て結ばるべきであるに、事實然らざるは是れ其信仰に何かの缺陷がある證據である。我等は信仰を深く養ひ、心の底より兄弟姉妹に對して深き愛情を感じ、此愛を以て互に相愛するやうならねばならぬ。而して理想的エクレジヤの建設を計らねばならぬ。

讃美歌三百二十三番は博士J・フォーセットの作にして、此兄弟姉妹の愛を歌ひしものとして有名である。殊に博士が此歌を作りし由來を聞いて、一層美はしき歌となるのである。博士は英國バプチスト教會の教師であつて、學識深く人格高潔の傳道者であつたが、永く田舍の小教會を牧して何等名聞を求むるなく、貧しき生活に安んじて無欲淡白の生を送つてゐた。併し博士の學識と信仰とは、博士をして首都の大都會の牧者たらしむべく充分であつた。ロンドンの大教會は博士を迎へんとした。博士も亦中央に於て主のため充分に働き度くなり、且つ田舍の其村のために盡すこと既に多年にしてほぼ盡したこととて、遂に此招聘に應ずることゝなつた。やがて別るゝ時は來つた。最後の安息日に

教會に於て爲したる最後の說教は一同をして涙を絞らしめた。かくていよ〳〵別るゝ時は來た。村人一同は博士夫妻を村境まで送り來つた。愈々最後の別離の時となつた。老幼男女より成る此一群は理想的の牧者に別るゝの悲しみに堪へなかつた。牧者を失つた後ちの淋しさを思ひて胸に少からぬ痛みを感じた。遂に一同は言ひ合せた如くに泣いた。この涙を見て博士夫妻も亦泣いた。妻は夫に向つて言うた「此順良なる村人を棄てゝ都に赴任することが出來ようか」と。夫は聲に應じて答へた「不可能」と。かくて荷物を運び行く馬車は家に歸ることを命ぜられ、博士は又その村の牧者として止まるに至つた。村人の愛は深く博士の心を動かした。其時作つたのが此歌であると云ふ。「神によりていつくしめる、友の交らひはいとも樂し」と云ふ。時は千七百八十二年—今を去ること百四十年前の事であつた。之を今に於て見んとするも見る能はざる美はしき出來事である。信者間の愛の稀薄となれる今日、我等は此美はしき事件と此美はしき歌とを想起せざるを得ない。

次は「禮儀をもつて相讓り」である。之は意譯であるが、大體に於て原意をよく傳へた譯である。英語聖書には In honour preferring one another とある。名譽に於ては互に他を己に勝れりとせよの意である。名譽の原語を time（チメー）といふ、むしろ尊敬の意である。人が人に對して抱く敬意を云ふ。故に此場合に於ては「信者が兄弟に對し、彼も己と等しくキリストに贖はれて神の子となりし者として抱く所の尊敬の念を指す」のである（ゴーデー）。此語を羅馬書二章七、十節、ヘブル書五章四節等には「尊貴」と譯し、マタイ傳廿七章六節には「價」と譯してゐる。即ち他のものに對して抱く價値の感を指したのである。兄弟に對する敬意に於ては互に他を己に勝れりとせよと云ふ。即ち兄弟に對して充分の敬意を抱き自己以上の人として相對せよと云ふ意である。後年パウロがピリピの信者に對して「各謙りたる心を以て互に人を己に愈れりとせよ」（ピリピ書二章三節）と勸めたのは全く之と同じ心である。

「愛は非禮を行はず」とある（コリント前書十三章四節）。狎るゝは愛の乏しき證據である。兄弟に對して深き眞の愛を抱く時は互に他を己に勝れりとして、その間に美はしき禮讓が生れざるを得ない。兄弟の缺點のみに着目するは愛の足らぬためである。キリストに贖はれし者、神の子とせられしもの、後にはキリストに似る榮の姿に化せられんとする者、これ即ち兄弟姉妹である。故に先づ抱くべきは尊敬を含みたる愛である。愛の中に宿る禮儀、禮讓である。たゞの人すら、神に造られし者として又心靈的存在者として之に敬意を抱くを當然とする。ましてキリストが其爲に命を棄てて贖ひし兄弟姉妹に對しては特別の尊敬をもつべきである。

今や信者間に愛の缺乏著しきは信仰の衰頽に基くこと當然であるが、又實に此注意を忘れしもその一因であると思ふ。尊敬の念なき所人々相狎るゝに至り、相狎るれば相爭ふに至る。即ち愛に禮儀の缺くるときは、其愛自身が消え失せるのである。禮儀尊敬は今や却て不信者の間にあつて、信者の間に

ない。從つて信者間に信用のなきこと著しい。基督信者と稱する者が同じく信者なる主人に仕へる場合の如き、主人と己とを同樣と思ひ又特別の愛を要求し、何等の禮儀をも表はさざる我儘は我等をして大いに不快を感ぜしめる。かくの如きは我國信者間の大通弊である。

以上九、十節を反復精讀せよ、いかに深き又行き屆いた誡めであるか。先づ「愛は僞ること勿れ」と一般的注意を與へ、次には細則に入りて其第一に「惡を憎み」と大切なる注意を與へて人々の怠りがちなる點を警め、次には「善は喜び」と注意し、そして尙ほ「兄弟の愛をもて互に愛し」と積極的の勸めをなし、次には「禮儀をもて相讓り」と人の忘れ易き點に注意を促す。まことに至れり盡せる愛の敎である。

第五十講　基督敎道德の第二　愛（二）

第十二章十一—十五節の研究

前講に於ては愛の性質について說く所があつた。まづ愛に僞りあるべからずと云ひ、次に細則に入りて、惡を憎み善を親むべき事、兄弟の愛を以て互に愛すべき事、禮儀をもて相讓るべき事をあげた。大體に於て愛の內部的方面である。即ち心の內の働きと見ての愛である。併しながら愛は心の中に働くのみに止まるべきものではない、外に現はれて働くものでなくてはならぬ。外に現はれざる愛は、愛としての效果を未だ充分に表はさぬのである。この愛の外的表現について敎へたるものが十一節以下である。

十一節に云ふ「勤めて惰らず心を熱くして主に事へ」と。「勤めて惰らず」は熱心にして惰らずの意である。そして此誡めは自己の事についてではなく他人の事についての誡めである。即ち自分の事に

ついて熱心にして怠る勿れではない、他人の事について熱心にして怠る勿れである。此誡めの前後が他に對する愛の教である故、この誡めも亦他に對する道であるに相違ない。人は自己の事には自然熱心なるも、他人の事に就ては不熱心に陥りやすきものである。故に少しく注意を怠れば、他人の事については兎角怠慢に流るゝ嫌ひがある。さりながら自己についてのみ熱心なるは、愛の道ではない。又キリストに在る者の爲すべき事ではない。之は不信者の行ふ所である。キリストに在るものは、他人の事についても自己の事についての如くに熱心でなくてはならぬ。これ愛の道である。故に云ふ、勤めて惰る勿れと。

次には「心を熱くして主に事へ」とある。心を熱くするとは心を煮えたゝせるの意である。原語 zeo（ゼオー）は元來煮え立つ（英語 boil）を意味する語である。燃え上り沸き立つ如き熱心を云ふのである。愛のために煮えたつ如き熱心を起すことを、パウロは玆に望んだのである。基督信者と云うても此種の人はあまり多くない。しかし時にかゝる人に會ふことがある。その愛に煮え立てる有樣、恰も母親が子の愛のために心を燃やして居るが如くである。これ深くキリストの心を宿せる人の心の狀態である。

「心を熱くして主に事へ」と一の句のやうに譯してあるけれども、之は正確に云へば「心を熱くし、主に事へ」と二句に譯すべきものである。何故こゝに兄弟に事へよと云はずして、主に事へよと云うたのであるか。そは兄弟に事ふることが即ち主に事ふることであるからである。いと小さき兄弟の一人に爲したのは、即ち主に對して爲したのである（マタイ傳二十五章三十一節以下の美はしき訓話を見よ）。主に事へることは人を愛することである。我等は兄弟に事へて主に事へるのである。故にこに主に事へよと記して、兄弟に事へよとの意味を暗示したのである。

或原本には「主に事へ」を「時に事へ」としてある。時に事へよとは、時に己を適應せしめよとの意である。即ち場合々々に應じてそれ〴〵適當に行動せよとの意である。これ兄弟に對する愛の實行に於て甚だ有益なる戒であると思ふ。從ってマイヤー、ゴーデーの如き一流の學者にして、前後關係に訴へて此讀方を採用する人がある。これたしかに棄てがたき讀方であると思ふ。併し大抵の原本には時とあらずして主とあるのである。

次は第十二節である。「望みて喜び、患難に耐へ、祈禱を恒にし」と云ふ。こゝに前後同樣また三つの相連絡せる誡めがあるのである。希望を抱くがために喜び、患難に會しては忍耐を以て之に處し、凡てに於て祈禱を恒にせよと云ふのは、基督者に對して極めて適切の誡めであること云ふまでもない。ホフマン此節を解きて曰ふ「望むべき理由あらんか我らをして喜ばしめよ。苦しむべき理由あらんか我等をして忍耐せしめよ。祈禱の戸我等に向つて開けんか我等をして祈りをつゞけしめよ」と。まことにその通りである。

殊に此の節は兄弟姉妹のうち罪に陷れる者ありし場合に最もよく適用せらるゝ誡めである。かゝる場合に罪の人を審判き、賤め、遠ざけるは大なる過ちである。かくては彼は失望して遂に亡びの道に奔り去るに相違ない。かゝる際には先づ望みて喜ばなくてはならぬ。即ち彼が悔改めて再び健全なる信仰の狀態に立ち歸り、舊き罪を洗ひ流されて、尙ほ良き信仰に進み得る時のやがて來るべきを望み喜ぶことが大切である。決して彼について失望すべきでない。かゝる際に失望落膽は最大の禁物である。宜しく彼の前途について滿々たる希望を抱いて先づ喜ぶべきである。信者と雖もこの危險にして誘惑多き世にあつては、測らずも罪に陷ることがある。かゝる時必ず用ふべきは愛である。愛を以て彼のために慮ることである。パリサイ人の態度を學んで彼をさばいてはならぬ。先づ彼の復活すべき時あるを望みて、滿々たる希望の喜びを抱きて彼の爲に計るべきである。而して彼のために種々の困難が起るべきも、この「患難に堪へ」ることを努めねばならぬ。波瀾の通過するまで靜かに困難に堪へることを力めねばならぬ。又殊に必要なるは「祈禱を恒にする事」である。祈りは凡ての場合に必要であるが、斯る場合には殊に必要である。過ちに陷れる兄弟のために、又他の凡ての兄弟姉妹のために、熱誠なる祈りが天に向つて上らねばならぬ。以上の三は兄弟に對する愛の道として—殊に罪を犯せる兄弟のありし場合には—極めて大切なることである。

十三節に至つてパウロの誡は益々具體的になる。曰く「聖徒の匱乏を賑恤し、遠人を慇懃にせよ」と。「賑恤し」の原語 koinōneō（コイノーネオー）は、同情又は援助を以て自己を人に結びつける事を意味する語である。聖徒の窮乏に對して、同情と援助とを以て己を彼又は彼等に結びつけよと云ふ教である。これ實に基督信者間に於ける美はしき關係である。初代教會の初めに於て、教會が一種の共産社會の姿を呈せしは聖書の明記する所である。共産的なると否とを問はず、兄弟姉妹の間に於て餘れる者が足らざる者を賑恤すことは、愛の表現として美はしき事である。實に基督教的愛があれば兄弟の缺乏を互に相補ふといふ事は當然あるべき所の事である。

近時は社會主義的の精神が次第に勢力を得つゝあるやうに思はれる。これ貧富の差別を打破し、凡ての人餘れるもなく足らざるもなき社會を造り、以て萬人一家族たらんとするを以て理想とせる思想である。その實行せられ得べきか如何は知らず、併し乍ら人類間に愛の缺けたる時に於て形のみに愛を行はんとするは如何。我等同一の主にある兄弟姉妹は、先づ我等の間に愛の遺憾なき實現を計るべきである。その形は何れにせよ、有無相通ずるの實を擧ぐるが愛の道である。今日の教會が信者間に於ける愛の實現を計らずして、唯世に向つて社會政策を施す事に熱中しつゝある如きは、本末を轉倒せるの甚しきものである。神を信ずる兄弟姉妹の間に愛の道が行はれずば、不信者の間にそれが行はるゝ筈がないのである。我等基督者は兄弟姉妹に對する愛の道として、何等かの形に於て互に缺乏を補ふの態度を取るべきである。

「聖徒の匱乏を賑恤し」とあるが、聖徒と云へば初代教會に於て信徒を指す語となつてゐる。しかし或は此の場合殊に教師を指したのであるかも知れない。何れにせよ教師の缺乏を補ふと云ふ事は、信者として常に心がけねばならぬ事である。眞正なる福音の教師は概ね窮乏に惱まさるゝものである。パウロの如きは勿論さうであつた。ルーテルも生涯の大部分は貧しくあつた。もとより福音の師は此世の安樂致富を希つてはならぬ。窮乏はむしろその喜ぶ所でなくてはならぬ。さりながら信者にして師の缺乏を少しも念とせざる如きは愛の缺乏の著しきものである。彼等に其師を富ます必要はない、けれども其缺乏を補ふだけの心掛は常になくてはならぬ。

「遠人を慇懃にせよ」とは謂ゆるホスピタリチー（hospitality）の教である。即ち見知らぬ人を客として親切に待遇することを云ふのである。原語 philoxenia（フィロクセニヤ）は未知の人に親切なるを意味する語である。旅館のなき國、旅館のなき時代に於ては民家に宿するより外に道なく、從つてホスピタリチーといふ美風が起つたのである。我國に於ても蓮月尼が

宿かさぬ人のつらさをなさけにて
おぼろ月夜の花のしたふし

と詠じたる如きは、旅館なき處にての作として見て初めて面白味が解るのである。今日に於てもアラビヤ、メキシコ、露領沿海州等に於ては旅館なくして此美風を見ることが出來る。殊にアラビヤ人間において此美風の盛なりしは昔より名高きことである。而して初代教會の時代に於ては、甲地の信者が乙地に旅するや、其處の信者の家に客となりて主人一家の歡待を受け信仰と愛とを交換して主客ともに大なる慰めを得たのである。實に美はしき風習であつた。故にパウロは基督教的愛の表現の一として、玆に之を數へたのである。尙ほペテロ前書四章九節、ヘブル書十三章二節、テモテ前書五章十節、テトス書一章八節にも同樣なる教訓がある。以て此事が初代教會時代に於て、如何に美はしき德として見られたるかを知るのである。我國に於ても明治の初め、基督教會の初現時代には、斯かる美はしき事の多少行はれたことがあつた。併し忽ち此美風は衰へ去つたのである。歎ずべき事である。

次は十四節である。「汝等を害ふものを祝し、之を祝して詛ふべからず」とある。九節より十六節まで主として信者間の愛を說きつゝあるに、その間に挿まる十四節が獨り敵に對する教を說くは不思議である。これは寧ろ十七節以下の愛敵の中に加はるべきものであると思ふ。併しながら教會の腐敗、信徒の信仰の墮落は既に當時に於て萠して居たのであれば、同じ教會員と稱する者の中にさへ他の兄弟姉妹を毀謗し、讒害し、陷穽する者があつたと思はれる。故に汝等を害ふものを祝せよと云ふ戒めは、不幸にして對信者道德の一部を形造ることとなつて居たかも知れないのである。

十五節は之につゞいて言ふ「喜ぶ者と共に喜び哀む者と共に哀むべし」と。これ一見平凡なる教なるが如くして實は深き教である。又キリストの靈に浴さずしては到底實行の出來ざる教である。人の

心は自然と人の悲みに對しては同情する。人の不幸、災禍、哀苦を知りては、如何に冷淡なる人にても少しは同情を感ずる。これ人間の天性である。故に基督者となつても、兄弟姉妹に對して同情（英語 sympathy 即ち悲みを共にすること）を感ずることは比較的容易である。即ち「哀む者と共に哀むべし」といふ誡めは割合に實行し易き誡めである。併しながら人の難しとする所は喜ぶ者と共に喜ぶことである。他人の成功、繁榮、立身等に會しては喜ばざるを人情の常とする。如何に自己に親しき者と雖も、其成功は却て嫉妬を起さしむる。或る場合には其失敗が却て我の喜びとなることがある。これ罪の子たる人に於ては自然のことである。從つて信者となりし後と雖も、その實行は中々困難である。兄弟姉妹の失敗過誤を見て却て一種の快感を覺ゆると云ふ如き事が、たとひ微なりとも起り易きものである。併し是れ兄弟姉妹に對する道ではない。我等は宜しく喜ぶ者と共に喜ぶの域に達し得るやう祈らねばならぬ。聖靈の感化を祈り求めて、心の惡しき嫉妬を去り、兄弟が成功し繁榮して喜ぶ時は、恰も我れが成功し繁榮せし如くに喜ぶやう力めねばならぬ。この爲し難きを主の靈を受けて爲さんとする所に、信仰生活の力が存するのである。悲む者と共に悲むだけでは足らぬ、喜ぶ者と共に喜ばねばならぬ。換言すれば共に主にある者は常に悲喜哀樂を共にせねばならぬ。これ兄弟に對するの道である。

以上十一節より十五節までを反復熟讀せよ、何れも簡單なる戒めであるが、然し一として意味の深からぬものはない。我等基督者はいづれも再思し三考してその眞意を深く味ひ、そして之を實行し得るやう祈り求めねばならぬ。

第五十一講　基督教道德の第二　愛（三）

第十二章十六―十八節の研究

十五節までは前講に於て說いた、更に之に加へて十六節を見ねばならぬ。そは十六節までは信者間に於ける愛の道であり、十七節以後は不信者に對する愛の道であるからである。勿論信者にもパウロの謂ゆる僞の兄弟がある故、十七節以下も或る場合には信者に對する道となることもある。併しそれは或特殊の適用であつて、十七節以下の目指す所は對不信者、對社會である。故に先づ十六節を前回の繼續として講じて對信者の愛を終へ、然るのち十七節以下に對不信者の愛を探ることにする。

十六節を原語聖書もしくは英語聖書に於て見よ、それは左の如く三つの成文（センテンス）より成り立つて居るの

である。

相互に意を同じうせよ。
尊大志をなさず、反て卑微に附けよ。
自己を智しとする勿れ。

そして之は別々の教ではなく互に相關聯せる誡めである。「相互に意を同じうせよ」を解して「相互に對する關係に於て調和的なれ」となす人があり（サンデー）、また「各々が他と同じ思ひ及び努力をもつ所の愛の調和を意味す」となす人もある（マイヤー）。異體同心とも云ふべき信者間に於ける美はしき靈的一致を勸めた語である。而して此一致を妨ぐるものは、各自の抱く尊大の心である。高き位置を望む野心である。故に第二の戒めとなつたのである。「尊大志をなさず」は高き事を思ふ勿れ、高き地位を望む勿れの意である。これ教會内に於て高位に上り、又は名譽ある職に就かんとの野心を戒めた語である。次に「却て卑微に就けよ」と云ふ。微賤低卑と思はれ居る地位或は仕事に從へよとの意である。即ち教會内に於て好んで低き地位に就き、微賤なる仕事に從へといふ誡めである。人々が高きを望んで低きを避ける時は、到底教會内に靈的一致は起らない。之に反して各自が低きを望んで高きを避くる時は、謙讓の美はおのづから信者間の一致を惹き起すのである。

一致は謙遜を伴ひ、謙遜は一致を生む。之を羅馬書十二章十六節が說き、又ピリピ書二章前半が說く。後者の第二節に言ふ「なんぢら念を同うし愛心を同うし意を合せて念ふ事を一にし我喜びを充滿しめよ」と。そして三節後半に於て「各々謙りたる心をもて互に人を己に愈れりとせよ」と云ひ、以下イエスの謙りの例を引き來つて人々に謙遜を勸めてゐる。平和一致は信者間の關係に於て最も大切なるものである。そして之の實現は各自の謙遜に依て成る。人々が他を己に愈れりとし、他を尊敬し他を推重する態度に出づれば自然と平和一致が生れる。故に高きを願はずして卑きに就くことを念となし、以て信者間の平和實現を計るべきである。

高きを思はず卑きに就けよとは、普通道德としても貴き教である。人は誰人も斯くあり度きものである。今や世の人が何れも高きを競ひつゝありて、其れがため嫉妬、紛爭、擾亂の絕えざるは慨かはしき事である。さり乍ら基督者は之を學んではならぬ。基督者は卑きに就くを以て常の心がけとせねばならぬ。神は人類を救はんとするに當つて、其獨子を卑き人の形として降した。而かも羅馬世界の片田舍たるユダヤ國に、ユダヤ國の片田舍たるナザレ村に降した。神の獨子たる彼は「神の形にて居りしかども自ら神と匹しく在る所の事を棄て難きことと思はず、却て己を空しうし僕の形をとりて人の如く成」つた。父なる神の爲す所、また子なる神の爲す所すでに斯くの如くである。然らばキリストイエスの心を以て心とすべき基督者たるものは、宜しく此態度を學ばねばならぬ。高きに就くは信仰の衰へたる時のことである。信仰の盛なる時、即ち比較的キリストに近くある時は、低きに就くを

以て喜びとすること當然である。

註解者の中には此語を解して「高き所に目を着けず卑き人と共にせよ」といふ位に取る人がある。ゴーデーの如きは其一人である。當時教會の墮落やうやく兆して、會員の中徒らに教會内の高位を望む人があつた。パウロは之を戒めて高き地位に目をつけず卑き人と共にせよと勸めたのであらう。高き地位を貴び高貴の人に近づくを望み、卑賤微小なる人に遠ざかる如き態度を取るは信仰の低落である。基督者は常に高き地位を思はず低き人の友でなくてはならぬ。使徒ヤコブが信者を戒めて「もし人金環をはめ美はしき衣服を着て汝等の會堂に來り、又貧しき人汚れたる衣服を着て來らんに、なんぢら美しき衣服を着たる人を顧みて汝この榮位に坐れと曰ひ、又貧しき者に汝彼處に立てと言ひ或は我足下に坐れと言はば、汝等は各人のうち區別を立てまた惡念を以て人を分つ者に非ずや」と述べたるを見よ。初代教會が早く既に此の弊風を生みて、信仰衰頽の兆を示したるは歎ずべき事である。信仰の健全なる所、必ず高きは望まれずして卑きが思はれるのである。

平和の道は此謙だりの心より行はれる。この心あれば不和の生るゝ餘地はない。爭の起るは人々が上へ上へと頭をもたげんとするからである。下へ下へと低きに就かんとする所いかで爭の起る餘地があらうか。我等は此心を以て不斷の心となし、以て平和の實現を計るべきである。

第三の戒めは「自己を智しとする勿れ」である。これ箴言三章七節にある「自ら看て聰明とする勿れ」を引用せしものである。併し勿論無意味に此句を引用したのではない、この場合に適切なる戒めとして擧げたのである。今箴言に於て此句をその前後の語と併せ記すに左の如くである。

汝心をつくしてエホバに倚り賴め、おのれの聰明に倚ること勿れ。汝すべての道に於てエホバを認めよ、さらば汝の道を直くし給ふべし。自ら看て聰明とする勿れ、エホバを畏れて惡を離れよ。

即ち神に賴らずして自己を過信することを戒めたのである。そして神を信ずる者の中にも往々にしてあまり自己を信じ過ぎるものがある。之をパウロは戒めたのである。却て信仰の強しと云はるゝ人の中に此種の人がある。自己の判斷を以て絶對の正となし、之を神の聖意と誤信して、他人が之に從はんことを求め、之に從はざる場合には其人を以て神の聖意に背くもの―基督者として不純なるもの―と考ふる人がある。「誰か己の過失を知り得んや」（詩篇十九篇十二節）。誰か自己を以て常に智しとなし得んや。誰か自己を以て常に正しとなし得んや。我等宜しく謙だりて相推奬すべきである。

兄弟姉妹間の協同一致の美を破るものは、此自己を智しとする心である。己の判斷を絶對の眞として他に讓らざるの態度である。福音の根本義については、何が眞であり何が虛であるかは聖書の明示する所である。しかし人生の實際問題については、一定せる規定を立てがたきものである。人々思ふ所を異にすること當然である。從つて斯る際は交讓の美德を以て事を定めねばならぬ。各々自己の所見をのみ正しとせば歸着する所を知らず、又互に審判くことゝなりて忌はしき不和、紛爭、分裂を惹

き起し、百害ありて一利ない。我の思ふ所と彼の思ふ所と一致せざる場合、いづれが正しきかは唯た神のみ知り給ふ所である。基督者は常に神の聖意を探りて、之を行はんことを心がくるを要す、而して我も信者であり彼も信者であつて、我と彼との思ひの一致せざる場合は、何れを以て神の聖旨と定めようか。この際我等は宜しく謙遜でなくてはならぬ。あまりに自信があり過ぎてはならぬ。或は彼の思ふ所が正で、我の思ふ所が誤であるかも知れぬ。故に深く自ら考察して彼の意見をもまた充分に參酌し、自己の意見について幾度も省み、又兄弟姉妹各自の思ふ所をも參酌して、最後の決定に到着せんと力めねばならぬ。これ決して微温き妥協を好むのではない、謙遜と愛との生む當然の態度である。あゝ人誰か己の正しきを知り得んや。我等は宜しく自己について或程度までの自己不信を抱くべきである。そして愛のためには喜んで自己を棄つる心を抱くべきである。自己を智しとする態度は、愛の一致にとつて最大の妨害物である。

宗教的に偉大なる人は決して自信の強い人ではない。否却て自己不信に強き人であつた。モーセはエホバに召されてイスラエル救出の大業に從はしめられんとするや、到底己のその器にあらざるを思ひて、種々の申し譯を作りて只管召命に應ぜざらんとした。そしてエホバが如何に諭すも、頑としてそれに應じなかつた。「わが主よ願くは遣はすべき者を遣はし給へ」と云ひて、飽くまで自己の不適任を云ひ張つた。エホバ遂に憤りを發するに至つて、モーセは已むなく立つに至つたのである。事は出埃及記三、四章に精細に記されてゐる。イザヤ、エレミヤ等も亦自己の不適任を認めしも、エホバの强ふる所となつて已むを得ず立つたのである（イザヤ書六章、エレミヤ記一章を見よ）。またルーテルの宗教改革の如き、決して自己に力ありとなして企てた事でなく、已むを得ずして立ちし結果が、圖らずして宗教改革といふ大事業にまで進展したのである。自己不信の人、謙れる人、愈々立つまでには長き躊躇を經驗せる人、かゝる人が宗教的偉人である。かの徒らに自己の信ずる所に强烈頑固にして、他の人の思ひを悉く排し、以て我れ獨り聖意を得たりとせる輩の如きは一種の妄想者にして宗教的小人と云ふべきものである。我等キリストの心に倣はんとせば、宜しく自己不信と謙遜とを以て相推讓し、以て平和の道を全うすべきである。

十六節の含む三つの誡めは上述の如くである。これを心に留めて之を行はんと力むる所、平和と愛とは漲るのである。かくて無益なる爭ひ、愚かしき分裂、及び幾多の紛議や不快は起らずしてすむのである。

十六節までは兄弟姉妹に對する道、十七節からは不信者に對する道である。十七節の初に言ふ「惡をもて惡に報ゆる勿れ」と。是れ敵を愛する道である。故に之は十九節以下の愛敵の教と合せて見るべきである。次には言ふ「衆人の善とする所を心に記めて之をなし、行し得べき所は力を竭して人々と睦み親むべし」と（十七節後半及び十八節）。これ不信者に對する道として頗る適切なる教である。

不信者の爲す所、思ふ所、信ずる所を徹頭徹尾否認して、信者のみ正しとなすは狂信者流のことである。かゝる謬想に囚はれしめ、狹量頑執非禮となりて對社會の關係に於て徒らに紛亂に陷り、或はこれがために苦惱し或は迫害に會へりとて得意とする者がある。これ誤れるの甚しきものである。基督者は平和の民でなくてはならぬ。成るべく紛爭を避けるやう心がけねばならぬ。已むを得ずば世に背き人と爭ふ。しかし出來る限りは他にも善き所を發見して、之を採り之を行ふやう力むべきである。爭のために爭ふ奇矯の徒となつてはならぬ。武士道にも、儒教にも、佛教にも、又此世の道德習慣にも良き所がある。强ひて之に反對して爭ふ必要はない。衆人の善しとする所には何かの意味があるに相違ない。勿論衆人の善しとする所が明白にキリストの精神に背いて居るときは、之を採ることは出來ない。しかしさうでない限りは、即ち主に背かざる限りは世人の善しとする所は行ふべきである。行つて何かの益ある時は勿論、行つて別に害のない場合にも世人の行ふ所に從ふべきである。基督者は小問題について世と爭ふべきではない。根本問題にあらざる限り、枝葉問題については主に背かざる限り世と行動を共にして宜しい。否共にする方が宜しいのである。他に爭ふべき重大な問題がある。爭ふべき重大な場合がある。何れでも良き事については世に從へ、そして精力の浪費、無益の衝突を避けよ。即ち「爲し得べき所は力を竭して人々と睦み親むべし」である。

パウロはこの事を人に勸め、又自ら實行した。彼は熱心なる信者ではあつたが、狹量頑固奇矯なる狂信家ではなかつた。彼に廣い心があつた。彼に深い思慮があつた。彼に教養ある紳士の品位と餘裕とがあつた。コリント教會の姉妹たちの間に、社會の風習に背いて男子と同じ位置に己を置かんとする風のあつた時、彼はそれを戒めて彼等をして飽くまで當時の婦人道德を守らしめようとした（コリント前書九章）。純粹の理論から云へば、女子に尙ほ多くの權を認め得るかも知れぬ。又當時の婦人の習慣が別に良いものと云ふ程ではなかつたかも知れぬ。しかし斯かる事に於ては、社會の風習に從ひて無益なる紛議を避くべきである。出來るかぎりは世人とも睦み親むべきである。故にこそ彼は斯く戒めたのである。又彼はユダヤの社會にありてはユダヤ人の如く行ひ、ギリシヤ人の間にありてはギリシヤ人の風俗習慣のまゝに行つた。之は「更に多くの人を得ん」と云ふ大目的があつたため、より小なる事については世に從ひて「自ら己を凡ての人の奴隷とな」したのである。「いかにもして彼等數人を救はん」との高き心ありしために、より小なる事については「又すべての人には我れその凡ての人の樣に循へり」といふ態度を採つたのである。

パウロの此心は今又われらの心とならねばならぬ。愛のためには出來るかぎりは世の人と睦み親まねばならぬ。平和を愛する人、心の廣き人、他に對して相當の敬意をもつ人、これ眞にキリストに在る人である。この心を以て基督者は此世の生涯を營むべきである。

基督者は出來るかぎり世に從ふ。しかし世に降るのではない。根本問題に於てはいかで此世に降り

得よう。主にある以上いかで此世の人と全く同じきを得よう。出來るかぎりは世と共たらんと力むるも、心に於ては此世の人との間に天地の差があるべきである。故に此世の人は往々にして基督者を敵となして迫害し來る。かゝる場合は如何にすべきか。かゝる場合も亦愛を以てせよ。愛を以て憎に勝てよと。これ十九節以下の教である。

第五十二講　基督教道德の第二　愛（四）

第十二章十九―二十一節の研究

愛の教は九節より始つて章尾の二十一節まで續く。そして最後に記さるゝが愛敵の教にして、十九節以下が即ちそれである。しかしパウロは十九節以前に於て二度この問題に觸れてゐる。その第一は十四節にして「汝等を害ふものを祝し之を祝して詛ふべからず」とあり、其の第二は十七節前半にして「惡をもて惡に酬ゆる勿れ」とある。敍述の順序から見れば、之は慥かに亂れてゐる。愛敵の教を全部まとめて一箇所に記す方が敍述としては整つてゐる。しかし茲にパウロの心が見える。彼は九節より愛の教を說きつゝ進んで、一刻も早く愛の絕頂とも云ふべき愛敵の勸めに入りたかつた。故に第十四節に於て一度それに入つた。しかし入り方が早過ぎた。尙ほ愛敵の勸めの前に云ふべきことがあつた。依て第十五節から問題を逆戻りさせた。併し同じ心の働きよりして、十七節前半に於て二度愛敵の勸めに入つた。それで又問題を後戻りさせた。そして第十九節に至つて愈々正式に愛敵の教に入つたのである。まづ「我が愛する者よ」と呼びかけて充分の注意を促して後ち、左の如く述べてゐる。

その仇を報ゆるなかれ、退きて主の怒を待て。そは錄して主の曰ひ給ひけるは「仇を復すは我に在り、我必ず之を報いん」とあれば也。是故に汝の仇もし飢ゑなば之に食はせ、もし渴かば之に飲ませよ。汝如此するは熱炭を彼の首に積むなり。なんぢ惡に勝たるゝ勿れ、善をもて惡に勝つべし。

「その仇を報ゆる勿れ」と先づ一般的に說き、次に「退きて主の怒を待て」と云ふ。原語には「怒に場所を與へよ」とありて、特別に誰の怒とも斷はつてない。然し五章九節にもたゞ「怒」とのみありて、神の怒を意味してゐる。且つ十九節後半の舊約引用に照して見ても、之は明かに神の怒を意味して居るのである。神の怒に所を與へよである。神をして充分に罰すべきを罰せしめよ。我を苦むる敵に對しては我より報ゆる勿れ。神に其怒を注ぐべき餘地を與へおけ。敵は必ず神の罰に會するであら

う。故に我等は敵に對して何ら報復の道を取るを要しないと云ふのである。之が正しい見方と思ふ。

この怒を人の怒と見る學者がある。その中甲は之を「敵の怒」と見て敵をして勝手に怒らせて置けとの意に取り、乙は「汝の怒」と見て汝の怒（即ち復讐心）を抑へよとの意であると見る。しかし前後關係の上から此兩說は共に謬つてゐると思ふ。怒はやはり此場合「神の怒」でなくてはならない。

「仇を復すは我にあり、我れ必ず報いん」との舊約引用は申命記三十二章三十五節（ギリシヤ譯）である。神は惡をなす者を必ず罰すといふ意味を傳へた語である。惡き者に對して處分を施すは神のことである。我を苦むる惡しき者を彼は必ず罰し給ふ。故に之が處分を一切彼に任せて、我等自身仇をかへすことは差控へよといふ意味である。次に二十節の「汝の仇もし飢ゑなば之に食はせ……」は箴言二十五章二十一、二節よりの引用である。最後にパウロは「なんぢ惡に勝たるゝ勿れ、善をもて惡に勝つべし」との有力なる語を述べて、此重要にして美はしき勸めの語を閉ぢたのである。

敵を愛するの教は必しも基督教に限らない。他の宗教、他の道德に於ても之れは美として勸められてゐる。たゞ注意すべきは、基督教に於てはキリストの生涯が愛敵の結晶であることである。パウロが羅馬書十二章に此教を說いたのは勿論彼の創始ではない。キリストの教訓及び生涯に倣つてのことである。キリストは山上の垂訓中、マタイ傳五章四十三節以下に於て明白に愛敵の教を說き、又それに似たることを同三十八節以下に於て說いてゐる。之は彼の教であるが故に、羅馬書に於けるパウロの教よりは勿論美はしく且意味に深みがある。そして兩者を照して見て、基督教の愛敵の精神を知ることが出來る。キリストの生涯が愛敵實行のそれなりしことは誰人も知る所である。されば彼を信ずるものは彼の生涯に倣ひ又彼の教訓に適ふやう、愛敵の道に於て遺憾なからんことを力めねばならぬ。祈つて聖靈の助を受け、以て之を實行し得るに至らねばならぬ。

然るに遺憾なるは泰西二千年の歷史である。基督教を國教として選び、教會を立てゝ宗教教育を施し、王はキリストの道を守ることを誓ひて即位し、又異教國を教化せんとして宣教師を派遣す。然るに愛敵の道に於て全然缺けたるは何故であるか。敵とあれば極度の憎惡を以て之を殪さんとし、自己の利權を擁護するために不義の戰を起して盡くる時を知らない。共にキリストにある兄弟姉妹であり乍ら、各民族の間に憎惡嫉妬の心强く、互に他を苦めて己を利せんとしてゐる。而して事は之のみに止まらない。力なき半開又は野蠻人を苦めて、自國及び自國民の利慾を逞うしつゝ今に至つた。近世期の初めスペインがアメリカ及びメキシコに土人を虐げしを始めとして、英、佛、獨、米相競つて世界到る處に弱き民を虐げつゝ來つたのである。愛敵は愚か、何等我に敵對せざる平和の民を捉へて白刃を揮ひ銃丸を放つたのである。基督教國とは名のみである。彼等にして基督教國民たらば惡魔も亦天使たるのである。彼等の罪惡は歷史の頁の上に鮮かに殘りて、永久にその不信背逆を物語つてゐるのである。

然り謂ゆる基督教國は眞の基督教國ではない。福音を委託せられたる歐米民族は、却て福音の明白なる教訓に背いてゐる。併しながら此事は聖書の愛敵の教の値を一毫も減ずるものではない。信者と稱する者が之を行はずとも、之は是非とも行ふべきものである。他人は如何あつてもよい、我等は之を行ふべきである。行はねばならぬのである。キリストの誡なるが故に之れを行はねばならぬのである。そして是れ決して退嬰的の弱き道德ではない。ニイチェが之を弱者道德として擯斥したのは、其眞意を知らなかつたからである。之は復仇する以上に力を要することである。人間自然の情に任せるは難しきことではない。自然の情は憎みに報ゆるに憎みを以てせんとする。然るに憎に報ゆるに愛を以てするのは、自然の情に打ち克つて、聖靈の恩化に浴して初めて可能なる事である。敵の憎の力に打ち勝つだけの力が我にあつて、初て敵を愛し得るのである。故にこれ頗る積極的、進取的の道である。之を消極的、退嬰的と見る者の如きは、此の教の眞意味を知らざるものである。

「汝かくするは熱炭を彼の首に積むなり」とは何を意味する語であるか。熱き火を首に積むと云ふことは、激しき苦痛を與へると云ふことである（ヘブル人、アラビヤ人の間に於ては此語を此意味にて用ひしと云ふ）。しかし何の意味の激しき苦痛であるかゞ問題である。或人は神より來る刑罰と見る。即ち「仇を復へすは我にあり」とある如く神は必ず敵を罰し給ふ故、自ら仇を報いざるは神をして彼の上に大苦罰を與へしむる所以であると見るのである。けれども之は果して敵を愛する道であらうか。之は却つて敵を呪ふことではないか。且つ又次の節の「善をもて惡に勝つべし」との教と矛盾する。故に多くの學者の云ふ如く、敵に激しき苦痛を與へると云ふのは、敵をして深く慚愧せしむる事を意味するに相違ない。パウロは云ふのである「汝敵に復讐せんと欲するか、然らば玆に最上の道がある。決して憎みを以て敵に對する勿れ。むしろ敵に對するに愛を以てせよ。飢ゑなば食はせ渴かば飲ませよ、これは熱き火を彼の首に積むことである。即ち彼に慚汗背をうるほして身の置き所もなきほど痛悶せしむることである。この時の彼の良心の苦痛は如何に激しいことであらうか。かく彼を苦めれば汝の復仇の目的は達したではないか、然らば敵を愛するは敵に復仇する最上の道である。故に復仇を望まば敵を愛せよ、而して彼をして慚悔せしめよ」と。即ち善を以て惡に報いて敵の首に痛恨の熱火を起せよと云ふのである。

最後にパウロは云ふ「汝惡に勝たるゝ勿れ、善をもて惡に勝つべし」と。敵の加へし惡に負けて惡を以て惡に報ゆる態度に出づる勿れ、汝の愛と善とを以て敵の惡を征服せよとの意である。惡に酬ゆるに惡を以てするは惡に負けたのである。何をも報いないで唯忍んで居るのは戰はないことである。善を以て惡に對するのが惡と戰つて勝つことである。怨に酬ゆるに德を以てし、憎に對するに愛を以てし、惡に對するに善を以てする事、これが愛敵の教である。故に愛敵はたゞ敵を愛すると云ふ事だけに止まらない。惡と戰つて之を亡ぼすと云ふ壯快なる戰の意味が主となつて居るのである。

この教は實行して初めて値あり、又實驗して初めてその眞なるを知り得るものである。敵に會しては愛を以てするが最上の道であること、人生の實驗に照して明かである。惡に對するに惡を以てすれば底止する所を知らない。敵の惡は益々增大し、自己の惡も亦益々增大する。相互の憎惡憤怒はその激怒を增すのみである。敵に對して愛を以てせよ、我を憎む者を愛し、我を呪ふものを祝し、我を苦むるものに幸福の至らんことを祈れ、我が愛心を注ぎ出して彼のために盡せ。然るときは敵の惡は止むであらう。或は進んで懺悔の涙が彼の眼より流れ下るであらう。そして是は推測ではない、幾人かの實際に經驗せし所である。まことに恨に對しては愛を以てするほか道はないのである。

此の愛敵の教の美はしき物語として、詩人ローエルの作なるYussouf（ユスーフ）なる一章をここに紹介し度い。これ恐くはイエス及びパウロの愛敵の教に對して與へられたる、幾多學者の註解にまさる最上の註解であると思ふ。ユスーフ（ヘブル名のヨセフ）はアラビヤの首長であつた。恰もヨブ記の主人公ヨブの如く、其富と信仰と德行とを以て聞えし人であつた。ある夕見知らぬ人が彼の幕屋に來た。そして云うた「私は私の生命を求むる者に逐はれて死の危險の中にある者である。逃れ來つたけれども枕する所がない。それで私は善人と綽名されて居るあなたの處に來たのである。どうか一夜の宿りと糧とを惠んで下さい」と。之に對してユスーフは答へて云うた「此幕屋は私のものである。しかし亦神樣のものであります。お這入り下さい。そしてゆつくりと憩んで下さい。そして私が神樣の物を自由に頂いて居るやうに、あなたは私の物を何でも自由に御取り下さい。彼は私共の此幕屋の上に夜と晝の美はしい大空をかけてゐます。そして彼の戸口では誰人も否と拒まれたことはありません」と。ユスーフは神の大愛の下にあるが故に、又誰人に向つても愛を注がんとするのである。かくして逃避者は彼の手厚き保護の中に受け容れられたのである。

其の夜ユスーフは心をこめて客人を歡待した。翌朝未だほの暗き中にユスーフは客を起して言うた「こゝに黃金がある。又第一等の駿馬には既に鞍が置かれてゐる。早くお逃げなさい。日の出ぬ中に早く〳〵」と。昨夜よりのあまりの親切に客の心は動かされた。言ひ知らぬ感動が彼の心を波うたせた。彼の心の中には嵐の如き動搖が起つたらしく見えた。彼は跪づいてユスーフの手の中にその前額を埋めて獻欷しながら云うた「私はかうして此處を去ることは出來ない。私はあなたに報いねばならぬ。私こそあなたの一子を殺したイブラヒム（ヘブル名のアブラハムか）であります。どうか私の命を取つて復讐して下さい」と。ユスーフは知らずして其子の仇敵を隱まひ且歡待したのであつた。けれども彼は靜かに云うた「その黃金を三倍にして與へよう。之であなたと共に、私の惡念も亦沙漠の方に行つて再び歸らないであらう。私は殺された子のことを忘れず、又仇を討たうと長年考へてゐた。しかし今その子の敵を厚遇したことが即ち復仇したことである。之が最上の復讐である。之でもう私のいやな心も失せてしまつた。實に有りがたいことである」と。そして又死せる子のことを想起

して云うた「わが長子よ、凡て神の定めは正しい。おまへの復讐は今立派に出來た。どうか安らかに眠つてくれ」と。之が此詩の語る所である。僅に三十行より成る短詩ではあるが、其の教ふる所は深いのである。

印度獨立運動の指導者ガンヂーが最近捕へられたと云ふことである。彼は三億の印度人を率ゐて、印度を英國より獨立せしむる事のために努力奮鬪してゐる。彼の獨立運動は曾てなきほど英政府を震駭せしめてゐると云ふ。彼はイエスの愛敵の教に堅く立つてゐる。決して武器を以て英國に對して反抗はしない。即ち叛亂と云ふことを堅く避けてゐる。彼は平和的に獨立の實現さるゝ日を待ち望んで其の招來のために苦鬪してゐる。彼は英國宣教師の教ふる所の聖書の教に從つて堅く無抵抗を主義としてゐる。決して英政府と其官吏とに反抗しない。そして此主義を極力印度人に向つて吹きこんでゐる。凡て英官吏の命令に服せ、凡ての課稅の要求に應ぜよ、壓制であつても暴虐であつてもそれに反抗せずして之に服せよと教へる。彼は英政府の印度に於て爲す所が全然聖書の教に背けることを主張してゐる。しかし此暴虐に對しては全然抵抗しないと宣言してゐる。又さう教へてゐる。實に無抵抗主義を以てする獨立運動である。

三月廿九日（一九一二年）發行のアウトルック誌によれば、ガンヂーは最近に於て六箇年の禁錮を言ひわたされた。その審問に際しての彼の態度は實に見上げたものであつた。彼は言うた、自分の行が罪に値すると判事が認めたならば如何樣に處罰されてもそれに服する、けれども出獄の後は無抵抗を信條として獨立の宣傳を續けると。そして英政府は此不當の所罰を彼に課したけれども、印度の民は彼の平生の教により何等叛亂を起すやうの事なくして靜肅の中に暮してゐると云ふ。彼の感化衰へざる限り、印度人はキリストの愛敵の教を實行しつゞけるであらう。かくして此聖教訓は初て國際的に實行されんとしてゐるのである。謂ゆる基督教國に於て未だ國際的に實行されない宗教が、こゝに彼等の蔑視しつゝある未開の異教徒に由て國際上に實行されんとするのである。恥ぢよ有名無實の基督教徒等よ！

かの徒らに信仰箇條を高調し、教義の純正を誇るも、敵を愛するの道を顧みざる者の如きは、未だキリストの心を知らざる者である。教義の純正を誇る神學者何者ぞ。キリストは一度もかゝる事を誇つたことはない。しかし彼は愛のため其凡てを―その生命をまで―獻げた。彼を信ずる者は愛の人にならねばならぬ。敵を愛し得る人にならねばならぬ。然らずしては教義の穿鑿も聖書の研究も凡て無益である。愛敵の人ならずば基督教でないのである。然るに今や基督教國と自稱基督信者とは少しも之を行はない。これ自己の僞善を暴露してゐるのである。

第五十三講　基督教道德の第三　政府と國家に對する義務

第十三章一―七節の研究

第十二章に於て個人間の道德を說いたパウロは、第十三章に入つて政府と國家に對する道德を說くのである。かく云へば十三章は十二章とは全然別な誡めの如くに思はれるが實はさうでない。パウロは十二章の愛の敎の繼續として、十三章の對國家の道を說いたのである。人を愛すべし、我を苦むる人をも愛すべし、國を愛すべし、我を苦むる國をも愛すべしと、これ十二章、十三章を一貫して流るる精神である。

十二章は九節より愛の敎に入り、それより愛敵の敎に說き進み、その最後に於ては「なんぢ惡に勝たるゝ勿れ、善をもて惡に勝つべし」との偉大なる語を發した。羅馬書はその處々に於て論述の高調に達するを見る。三章二十四、五、六節の贖罪提唱の如き、八章末尾の凱歌の如き、十一章末尾の讃美の如き之である。そして此の十二章末尾の如きも正に實踐道德の絕頂にして、其想其辭ともに高調に達せりと云ふべきである。人の道德は到底これ以上に出づることは出來ぬ。實にこれ人間道義の絕頂である。「善をもて惡に勝つ」とは心中の戰を云うたものである。人より惡を受け、其惡にまた惡をもて報いんとの心を起すは、即ち惡に負けたのである。この復讐心と戰つて之を抑へ、其惡に對するに善を以てするが即ち善を以て惡に勝つたのである。惡を以て惡に對して敵を屈服せしむるは、惡にまけたのである。惡に堪ふるのみならず、進んで敵を愛するに至るが惡に勝つたのである。キリストの十字架は此勝利の極として著しきものである。彼は敵人の包圍に會つて之に抗せず、其儘十字架の悲運を甘受し、しかも我を殺す敵のために宥めを父に祈る程の愛心を發した。かくの如き人を主と仰ぐ者は常に此心を以て人に對さねばならぬ。愛敵の心盛なる所、社會には平和漲り、國と國との間には爭は起らないのである。

十二章末尾の此精神を以てすれば、十三章の對國家の道はたやすく了得し得られるのである。先づ第一節に言ふ「上に在りて權を掌てる者に凡て人々服ふべし、蓋神より出でざる權なく、凡そ有る所の權は神の立て給ふ所なれば也」と。これ此世の政治的權能に服從すべしとの勸めである。そして其理由として、此世の政治的權能と雖も亦悉く神の立て給うたものであると强調したのである。基督者は神にのみ服從すべきであつて此世の權能に對しては毫も服從する要なしと主張する者を、パウロは

戒めるのである。故に二節に於て言ふ「是故に權に悖ふものは神の定に逆くなり、逆く者は自ら其審判を受くべし」と。此世の權能に逆ふは神の立て給ひし權能に背くのであれば、即ち神の規定に背くのである。故に其審判を受くるに至ること當然であると云ふのである。全世界にわたれる神の統治を認め、制度尊重、秩序保續の健全なる精神をパウロは玆に鼓吹するのである。

次に三、四節を見よ、「有司は善行の畏に非ず、惡行の畏なり。汝權を畏れざることを欲ふ乎、唯善を行へ、然らば彼より褒を獲ん。彼は汝を益せん爲の神の僕なり。若し惡を行さば畏れよ、彼は徒らに刃を操らず、神の僕たれば、惡を行ふ者に怒をもて報ゆる者なり」とある。此世の權威に對する道は只善を爲し惡を避けるだけの事である。善を爲すものは有司より賞せられ、惡をなす者は罰せらる。有司は神の僕である故、善を賞し惡を懲らす役目を行ふ。されば善をなす者は少しも此世の權能を畏るゝの必要がない。正しきを行ふ者に恐怖の襲ふ理由は寸毫もない。併し惡をなせば必ず有司の罰が來る。されば惡をなす勿れとパウロは警めるのである。依て進んで五節に於て言ふ「故に之に服へ、たゞ怒によりてのみ服はず良心によりて服ふべし」と。即ち刑罰の畏懼に依てのみならず亦實に良心よりして權能に服へと勸めるのである。

次の六、七節は以上の原理の適用とも云ふべき所である。「是故に汝等貢を納めよ。彼等は神の用人にして常に此職を司れり。汝ら受くべき所の人には之を予へよ、貢を受くべき者には之に貢し、稅を受くべき者には之に稅し、畏るべき者には畏れ、敬ぶべき者は之を敬べ」と云ふ。その意味は說明を待たずして明かである。たゞ貢と稅との別について一言しよう。獨立國の民は稅を納むれども貢は納めない。いかに重稅を課せられても稅だけである。然るに古代にあつては、屬國の民は稅を納むる外に、尙ほ貢なるものを納むる必要があつた。これ服從忠順を象徵する所のものであつた。されば羅馬本國の民は稅を納むるだけを以て足りたけれども、ユダヤ人は稅と貢とを兼ね納めねばならなかつた。故にパウロが玆に貢の納入を勸めたのは、征服國の政府が被征服國の民に向つて課する暴壓にも服從せよとの意味である。

以上の如く一節より七節まで其意味は至極平易であるが、之れに關聯して二三の重要なる問題が起るのである。まづ近代人はパウロの此敎に抗議を提起して云ふ、これ古代專制治下に於ての誡めであつて現代の民本政治に於ては全然無用なるものではないかと。否然らず。いかなる時代の如何なる政治組織の下に於ても、一國の秩序を維持するための權能は必ずあるべきである。そしてパウロは此權能に服して、以て秩序を重んじ騷擾を惡み、平和順良を愛する民たれと勸めるのである。從つて此誡めは如何なる時代に於ても廢るべきものではない。且またパウロの此國權服從論は、十二章の愛及び愛敵の敎よりおのづから引き出されたものである。即ち如何なる人をも愛し我敵をも愛するが基督者の道である以上は、良き國家に對しても惡き國家に對しても服從と愛とを以て對し、たとひ暴壓治下

にありても尙ほ我を虐ぐる權能者に服ひ、且これを愛するの心を抱くべきであると云ふのである。從つてパウロの此國權服從の根柢に横はるものは、基督的愛の大精神である。玆に於てか知る、彼の此の誡めの永久に廢らざる誡めとして殘れることを。

基督者とはその國籍を天に移せし者である。「我等の國は天に在り」（ピリピ書三章二十節）とある通りである。故に此世の事は實はどうあつても宜いのである。何となれば是れ彼にとつては、人生第一義の問題ではないからである。故に强ひて此世の權能に反抗するほどの熱心が起らない。何れでもよい事である故むしろ服從を以て此世の權能に對するのである。今これを近時むづかしき問題となりつつある勞働問題について考へて見よう。今や勞働者は資本家の横暴殘忍を攻擊し、資本家は勞働者の怠慢無謀を攻擊してゐる。我等基督者は資本家が横暴なれば勞働者に同情する。しかし又勞働者があまりに無謀なれば資本家に同情する。基督者はあらゆる場合に於て正者の味方である。併しもし彼が資本家の一人であるならば、勞働者の暴舉のために損害を受けても之をあまり問題としないのである。又勞働者の一人であるならば、到底熱心に資本家攻擊に從ひて收入增加のために奮鬪するの心を起し得ないのを當然とする。彼は既に財を天に貯へたものである以上、この世の財のことについては餘り大なる熱心を起し得ないのである。此世の事に重きを置かぬものは、此世の事には無頓着である。そして斯く此世の利益問題に無頓着なる故、無益なる抗爭、反抗、騷擾等に從ひ得ないのである。愚かなる怒や自己の小利害の故に此世に於て爭を起すことなきが基督者の健全なる狀態である。勿論神のため、又平和のため大なる運動を起し、またはそれに携る場合がないとは云へない。けれどそれは稀のことである。平素は平和、服從、秩序、權能尊重の民たるのである。

されば基督者は平和の民である。世にありて革命、騷擾、叛亂を起すことを厭ふ。眞の基督者にして社會の秩序を紊したものあるを聞かない、又自ら好んで革命叛亂を起したものあるを聞かない。歐米の諸國が基督敎國と稱し乍ら、屢々醜陋なる戰に從ふごときは虛僞の極である。併し玆に一の問題が起る。もし國の政府が腐敗を極めて明白に民の敵となりたる時の如き、もしくは自國が壓制國の版圖に屬して暴虐横恣の下に惱む場合の如きは如何、かゝる際には之に反抗して革命獨立の旗を飜すを可とすべきではないかと。例へばクロムウェルの英國革命戰爭、オレンジ公ウィリアムのネーデルランド獨立戰爭、ジョウジ・ワシントンの米國獨立戰爭の如きは、何れも不義の跋扈を抑ふるべく義のため愛のために起つたのである。故に之は義戰として稱揚せらるべく、又基督敎徒の當然携はるべき性質のものと認めらるべきではあるまいか。叛亂と云へば叛亂であるが、之は基督敎的に推奬―少くとも是認せらるべき性質のものではあるまいか。

この問題に對して先づ注意すべきは、斯かる場合の甚だ稀であると云ふ一事である。そして稀なる或場合には或は政權反抗が正しくあるとしても、そのため常の場合の反抗が正しいと云ふことにはな

らない。パウロは玆に基督者平素の心得を教へたのであれば、平素の場合に於ては政權服從を可とすると云ふ原理を述べたのである。然らば右の如き或特別の場合に於ては如何。パウロは一般の原理を述べただけで特別の場合には言及して居ない。けれども彼の精神のある所を見、殊に主イエスの心に訴へて見て斯かる場合に際しての最上の道をほゞ知り得ると思ふ。即ち政治の非違その極に達して民皆苦む場合の如きにも、基督者は平和的手段にのみ訴ふべきである。先づ謙遜と靜和とを以て權能者に向つて抗議（プロテスト）すべきである。幾度も〳〵繰返して抗議し、其他平和を超えぬ範圍に於ては凡ての道を取るべきである。百折不撓の心を以て目的の貫達を祈るべきである。併し乍らその目的が達せられずとて、武器に訴へて叛亂を起すべきではない。平和的手段だけに限りて、成敗は悉く大能の手に任せ奉るべきである。

然らば基督者が正義のために抗議せし場合、それが罪に問はるゝ如きこととならば如何。己の命を求めらるゝ場合は已むを得ず叛亂を起すべきか。否かゝる場合には權能者の命のまゝに我生命を差出すべきである。この點に於てはギリシヤの哲人ソクラテスは多くの基督教徒以上に基督的であつた。彼は政府の批政に對してはたゞ抗議（プロテスト）するだけであつた。捕へられて死刑の宣告を受けるや、無實の罪にしても、政府が合法なる機關を通して爲したる判決であると云ふ故を以て潔く之に服した。そして友人等が準備を悉く整へて脱牢を勸むるや、國法に背くの不道理を唱へて之を峻拒した。彼の場合に於ては國法の適用は誤つては居るが、國法の命ずる處に背くは彼に於て全然なし得ざる所であつた。そして彼は、悲み泣く弟子らに靈魂不滅の教を說きつゝ毒杯を傾け、最後の瞬間に至るまで諄々として說いて變らなかつた。げに壯美の極と云ふべきである。神の獨子（ひとりご）の死たるキリストの十字架は別として、人として、ソクラテス以上に美しき死を見ることは出來ない。されば國法服從の一點に至つてはソクラテスはオレンジ公、クロムウェル、ワシントンに遙かに勝ると云ふべきである。而してキリストは此點に於てソクラテスに似て、又ソクラテス以上であつた。彼は何等反抗の手段に出でずして、權能者の審判（さば）くまゝに死に就き給うた。我等はキリストに倣ふべく、又ソクラテスに倣ふべきである。

此點に於て印度革命者ガンジーの無抵抗的革命の如きは、正にキリスト的である。在來の武器を以てする革命はキリストの心に適はざるものである。壓制者に向つて武力を以て抗爭すると云ふは、彼等に對する憎惡の發現と云はざるを得ない。基督者にして壓制者に武力的に反抗せしものは、皆かれらを神の敵として憎惡呪咀した。しかし壓制者をも愛を以て救す態度こそ基督者の採るべき態度である。彼等のためにも祈る心を抱くに至らずしては、眞の愛と云ふことは出來ない。クロムウェル、ミルトン等は偉大雄烈なる基督者にして我等の深く尊敬する所であるが、此點に於ては到底我らの模範とするに足りない。その驚派心、抗爭心の盛にして權能服從の心乏しく、愛敵の道に於いて足らざり

19328

しは惜むべきの至りである。此點に於ては我等は彼等に倣はない。全然ナザレのイエスに倣はねばならない。權能に服し國法を重んじて死に就き、われを殺す敵のために祈るの大精神を發揮したるナザレのイエスに倣はねばならない。

最後に注意すべきは、パウロの羅馬政府に對する態度である。十三章の權能服從の語は、事實的には羅馬政府に對しての服從を勸めたものである。史家の認むる如く羅馬帝國の政治と云へば、地上の政治としては最も完備した政治であつた。凡ての點より見て人間の力を以て之れ以上に整備せる、之れ以上に威力ある、之れ以上に巧妙なる政治を見ることは出來ない。故に是れ民が一たとひ屬國の民なりとも一喜んで服從すべき政治であつた。殊に此政治は基督教の世界的傳播にとりて大なる助となつた。かゝる完備せる政治組織の下に、福音はその盛なる交通網に乘りて、羅馬全版圖に早くも弘まつたのである。されば此帝國も亦これ神の攝理の中に現はれしものである。故にパウロは此の政府に對しては、多くのユダヤ人の如く憎惡を抱かず、廣く高き視點よりして之に大なる好意を寄せてゐたのである。これ彼の博大なる精神より出でたことであつた。彼の權能服從論の背景として此事あるを我等は忘れてはならない。

然らば我等は日本の政治に對して如何に考ふべきであるか。もとより其有する種々の病弊は痛歎すべきであるが、大體より見て比較的良政であると認めねばならない。これ外國漫遊の後故國に歸りし日本人の概ね認むる所である。又日本に滯在せる外國人にして之を認むる人も少くない。生命財産の安全、信仰の自由、或程度までの思想の自由等は慥に此國に存する。此國にありて我等は平和の中に福音を研究し、且宣傳することを得る。もしパウロにして今日我國に生れたならば、此國に於ける福音宣傳の自由と便宜との故を以て深く日本政府を德とするであらう。そして一節一七節の如き政權服從論を唱へるであらう。不信者の營む政治なりとて、直ちに之をサタンの政治の如く思ふは過つてゐる。之を始から敵と見て反抗せんとするは賤愚である。良心を以て一心より一服從の德を以て對すべきである。神の定には服ふべし、敵なりとも愛すべし、出來得べきかぎりは人々と睦み親むべし、不信社會に生を送る我等は強き信仰の人たると共に宏量、坦懷、寛大、愼慮の人たらねばならないのである。

第五十四講　基督教道德の第四　社會の一員としての愛

第十三章八—十節の研究

パウロは十二章に於て愛の道を說き、その最後に於ては愛敵の勸めに入り、これに促されて十三章に於ては政權服從の大義を唱道し、其終に於て「汝等受くべき所の人には之を予へよ。貢を受くべき者には之に貢し、稅を受くべき者には之に稅し、畏るべき者には畏れ、敬ぶべき者は之を敬べ」(七節)と云うた。そして彼は次の八節より十節までに於て再び愛の敎を說く。併しながら彼は新題目に移るに方て前との連絡をたちきりて全く筆を改める事を餘り好まない。自然と滑りこむが如くに何時とはなしに新題目に入るを以て特徵とする。故に八節より新題目に入つたのであるが、意味に於ては七節の續きである。曰く「汝等互に愛を負ふのほか凡ての事を人に負ふこと勿れ、蓋人を愛する者は律法を全うすれば也」と。稅を納めよ、貢を納めよ、拂ふべき者には凡て拂へ、愛のほかは凡ての事に於て人に負ふ勿れ、一切の負債義務責任を果せよと敎へるのである。

八節—十節は十二章後半と同樣に愛の敎である。從つてパウロに反復又は冗長の罪を歸する人もある。併しながら十二章の愛は一個の人として隣人に對して抱くべきものを云ひ、十三章のそれは國家の一員たる者に取つての法律の實行力としての愛である。同一の愛にしても、全然異なる立場より眺められたものである。甲は個人道德としての愛であり、乙は國民道德としての愛である。之は前後の關係より見て極めて明かなることである。

八節前半「汝等互に愛を負ふのほか凡ての事を人に負ふこと勿れ」の一語は、パウロの發せし偉大なる語の一である。之を正確に譯せば「何人にも何物をも負ふこと勿れ、たゞ相互に對する愛だけは別なり」となる。何人にも何物をも負ふ勿れ、負債は悉く償却し義務は悉く果せ、但し愛を負ふことだけは全く別である。愛の義務は一生負うて居るべきものであると云ふ意味である。

愛のほか何人にも何物をも負ふ勿れとは、人生の一軌範として洵に大切なることである。政府に對し社會に對し隣人に對し果すべき義務は之を速かに果せ。或は物質を以てする義務、或は身體を以て爲すべき責務は出來るだけ正確に果せ。例へば納稅の如き之を忘りて何時までも負債として止め置く勿れ。期限內に正確に納入して負ふ所なきに至れ。又借財の如きは斷じて之を避くべきである。已むを得ずして之に陷りたる時は、一刻も早く償却すべく努力すべきである。負債の中にあるは健全な

る生活の大なる支障である。そのため人に對する獨立心を喪失し、卑屈陰柔の生活に陷る虞れがある。或はそのために親族故舊の間の友誼を妨げ誤解を生み、人をも我をも害し苦むる恐しき結果を起し易きものである。パウロの如きは最も之を厭ひし一人であつたと思ふ。負債を避けると云ふ事は、人として大切なる處世の道である。基督者として尙更である。之は自他のために大切なる心得である。

さりながら「負ふ勿れ」とは單に借財を警めた語ではない。之は頗る廣義に於て人生の全般に關する誡めである。負ふ勿れとは義務を果たさぬまゝにして置く勿れの意である。人は世に生れ來て各方面に對して爲すべき義務を抱いてゐる。主權者に對しては忠誠の義務、師長に對しては尊敬の義務、親に對しては服從の義務、人に對しては奉仕の義務を抱いてゐる。その他此世に生を享け、家族の一人として、又社會の一員として、又國家の民として各種の義務を雙肩に擔つてゐる。これ人として自然のことである。人はこの義務を承認し之を立派に果たすべきである。これ即ち負債償却である。何人にも何物をも負ふ勿れとは、此の負債償却―義務遂行―を怠る勿れとの意である。然るに現代の多くの人は義務は少しも果さうとしない。即ち多くの事を多くの人に負ひしまゝにて平然としてゐる。負債の中にありて冷然として知らぬが如くである。然し乍ら權利の行使及び伸張には驚くべきほど熱心である。實に自己中心の極である。何人にも何物をも負ふ勿れとのパウロの誡めは、現代人に取つては正に口に苦き良藥である。さあれ彼等は此良藥を取らうとはしない。そして益々滅びの淵に向つての進度を早めつゝある。あゝ！

然り何物をも何事をも負ふ勿れ、責任未濟の中にある勿れ。義務は悉く之を果せ。併し「愛」の一事に至りては全く別である。愛は相互に對して負へるまゝにて可いのである。愛は到底果し得ない負債である。人を愛する事には限界がない。或程度まで又は或時期まで愛したからとて、愛の負債は償却されない。愛は一生涯もちつゞけねばならぬもの、故に一生涯かゝりても拂ひつくされぬ負債、果しつくされぬ責務である。故に愛を施すべき責任は常に持ちつづくべきものである。即ち愛だけは負ふのがよいのである。愛を負はずと云へばもはや全く愛さなくなつたのである。されば相互に對する愛だけは、飽くまで熱心に負ふべきものである。

人と人との間にありては、相互に對する義務は完全に果して貸借なしの關係に於てあるべきものである。けれども何もかも皆な果し盡しては、彼我の間に何等の關係の殘らぬ憾みがある。何か一の負債だけありて互に負ふ所あるため、彼我の關係の繫がるゝを可とする。而して此役目に當るべきものが愛の負債である。人を愛することは止むべき時がない。故に愛といふ負債は拂ひつくせぬ負債である。いくら拂つても拂つても拂ひ盡せないのである。故に彼我の間に此負債あれば一生涯相互の關係は絕えないのである。されば人は相互に對して愛の負債を抱きて、其關係を一生涯つゞくべきである。

もと〳〵我等は神に對して爲すべき務を果さずして、重き負債の中に陷沒し居たるものである。然るに神はその獨子の死を以て我等の負債を消除したのである。換言すれば獨子が我等に代つて負債を辨償しくれし故、我らはもはや神に對しては自身負債償却の道に入る必要が失せたのである。玆に於てか神に對して拂ふべきを、人に移して拂ふに至るべきである。別の語を以て云へば、神すでに我等の罪をキリストの故に赦免したる故、われら此大愛に感激して人を愛するの態度に出づるを當然とするのである。これ即ち愛の負債である。愛さねばならぬと云ふ義務である。これ一生涯かゝりても到底拂ひつくせぬ負債である。之だけは、有りて名譽、無きは不名譽である。

何人にも何事をも負ふこと勿れ、負債に陷る勿れ、義務不履行のまゝにあること勿れ、これ獨立尊重の信仰生活に於て缺くべからず。併し乍ら愛だけは常に負債として抱け、この負債だけは償却し盡さざるを可しとすると、これ八節上半の敎である。英語聖書に於ては十字、原語聖書に於ては僅かに八字より成る一成句であるが、其の含む内容の廣さ、深さは比類の少きものである。處世の指針として一殊に此複雜なる社會に處する人々に取つて一まことに絶好の敎であると信ずる。

九節は云ふ「それ姦淫する勿れ、殺す勿れ、竊む勿れ、妄の證を立つる勿れ、貪る勿れと曰へる此餘なほ誡あるとも、己の如く汝の隣を愛すべしと曰へる言の中に包りたり」と。玆に列擧せし五つの禁條は十誡第六條以下である。己の如く汝の隣を愛すべしとは、レビ記十九章十八節にある誡めである。イエスは此誡め及び神を愛すべしとの誡めを以て、凡ての律法中の最大なるものとなし、「凡ての律法と預言者は此二つの誡めに因れり」とさへ言ひ切られた（マタイ傳二二章四十節）。パウロも亦この精神に倣うて、此誡めを以て十誡第六條以下即ち對人道德を一括せしめたのである。洵に然り。人に對する道を列擧すれば十誡の第二部（第六條以下）を初めとし此世の道德、此世の法律、その數をさへ數へ得ないほど多くある。併しながら「己の如く汝の隣を愛すべし」と云へば之等の凡てを盡してゐるのではないか。隣人を愛すること我を愛する如くすれば、如何なる場合に於ても對人道德は充たし得るのである。故に凡ての道德や法律は失せ去つても宜い。たゞ「己の如く汝の隣を愛すべし」との誡めだにあれば足るのである。

八節後半には「蓋人を愛する者は律法を完全すれば也」の句あり、又十節は「愛は隣を害はず、是故に愛は律法を完全す」とある。こゝの「律法」なる文字には定冠詞が附いて居ない。故にモーセ律又は舊約律法のみを指したのではなく、凡そ法律といふ法律、道德といふ道德を不定的に言うたものである。法律とは人々の權利を維持してその侵略を防ぐためのものである。故に法律の種類、その無數の條文、それのために生存する裁判官と辯護士……何ぞ複雜の甚しき。唯愛あれば隣人の利を計るも害を計らない。故に愛ある所法律はあるも無用である。愛に依て他人の生命や所有物が確保されれば、法律の要はなくなつたのである。如何にして法律を民に嚴守せしむべきかは、一の難しき問題と

見られてゐる。しかしパウロの玆に提出する道は愛である。「人を愛する者は律法を完うすればなり」は「……したればなり」の意味である。人を愛せし者は事實上すでに法律を完うしてしまつたと云ふのである。そして法律を完うしてしまへば、法律はその目的を達したのである。

國に對する道如何、國家の一員としての責務如何。まづ權能服從である。次は凡て愛を以て人に對することである。この愛さへあれば、法律の各個條はおのづから實現されるのである。愛のなき所には法律は如何にその威權を增すも、充分には實行せられない。即ち愛は社會の一員として社會的の義を行ふ道である。殊に基督者に於ては此事を明確に悟り居らねばならない。誠めは至極簡單なれども意味は深長、效果は明確である。古來福音のよく行き亙れる社會に於ては國法のよく守られたるは、此理由によるのである。服從と愛とを以て國法に從ひ且つ之を完うしたからである。法律を守る事は法律以上の愛の上に立ちて、法律を超越して、初めて可能である。之を超越せる故これに拘泥せず、却て之を守り得るのである。

パウロには尙ほ記すべき幾つかの實踐教訓があつたであらう。けれども最早書翰を終結せしむべく急がねばならぬ。即ち實踐倫理の箇條書きは十節を以て打ちきりて、十一節より大希望提示に入つたのである。「此の如く行すべし」とは以上一切の實踐教訓を實行すべしとの意である。そして「我等は時を知れり、今は寐より寤むべきの時なり、蓋信仰の初より更に我等の救は近し」と云ひ、以下有名なる大文字となるのである。これ即ち再臨の希望を以て道德の實行、行爲の緊張を迫つたのである。

「翻つて十二章の初を見るに「されば」と云ひて恩惠の救全部の說明を受け、「神の諸の慈悲を以て汝等に勸む」と云ひて專ら道德の土臺として信仰に由る恩惠を置いてゐる。そして今最後には再臨救濟の希望を以て道德實行の奬勵者となして居る。行は信と望の間にある。信を以て土臺とし望を以て激勵者として行は擧がる。そして基督教に於て行と云へば、愛といふとほゞ同一である。信だけにては足らず、望だけにても足らず、兩者兼ねそなはりて愛は初めて行はれるのである。これ即ちパウロ特愛の三連語として彼の書翰に散見せる「信、望、愛」の教である（その最も著しきものがコリント前書十三章にあるは人の知る所である）。信を以て義とせられて感謝のあまり愛の生活に入る。しかも何か或鮮かなる目標の前程に聳ゆるなくしては、愛の歩みはともすれば弛緩しやすい。即ちこゝに救の希望がある。救の日は信仰の初より益々近よれりとの實感は、一脈の緊張味を愛の歩みに與へるのである。かくて信望愛は信仰生活の三要素として缺くべからずである。洵に完全なる教、至れり盡せる人生の指針と云ふべきである。我等はいつまでも父、子、聖靈の神を信じて、信、望、愛の三標語を守らんかな！

第五十五講　日は近し

十三章の十一節以下は世の終末、キリストの再臨、信者の復活榮化等の大問題に觸るゝ重要なる箇處である。十二章の一節よりパウロは基督者の實踐道德を提示し、先づ對個人道德として謙遜と愛とを詳說し、次に對社會道德として權能服從と愛とを力說する。そして愈々最後に至つて再臨の希望に言及するのである。從つて十三章十一節以下が、十二章一節より十三章十節までに何かの深き關係をもつことは、言はずして明かである。

而して前講の最後に於て說きし如く、基督者の道德實行を助くるものは信仰と愛である。十一章までに說きしは信仰、そして十三章十一節以下は希望である。キリストと其贖ひを信じて其大なる恩惠に感激するは、人をして愛の行に出でしむる根源である。しかし乍ら之だけにては根柢の强きあるも

激勵の足らざるを憾む。こゝに主再臨の希望ありて其時迫れりとの實感より强き刺戟が加へられ、自からにして緊張せる信仰生涯が生れるのである。即ち信望愛は常に相離れずして、信は愛の根柢たり望は愛の激勵者たるのである。然るに現代は信と望とを神秘不可解となして排し只愛のみを說く。不信者は勿論然り、信者と稱するものまでが亦然る有樣である。併し唯の倫理敎ほど無力なるものはない。之はたゞ人に愛を賦課するのみにて少しも愛を行はしめないのである。故に信と望なくしては愛は立ち得ないのである。此事は過去千九百年間の人類の經驗に因て明白である。信と望の稀薄となりし時に愛の充分に行はれし例はない。愛の盛なる所には必ず信と望とが伴ふ。凡て醇眞なる基督者は皆この事を自己の生涯に於て實驗したのである。

十三章十一節以下の趣旨は暗黑の時代たる現代は旣に終とならんとし、今や恰も夜すでに更けて日昇らんとする如き狀態にあれば、基督者は此の主再臨後の時代に適應するやう、暗黑の業を避けて光明の業をなすべしと云ふのである。十一節前半は「かくの如く行すべし、我等は時を知れり、今は寢より寤むべきの時なり」とあるは譯としてやゝ不正確である。改譯聖書には「汝等時を知る故に、いよいよ然なすべし、今は眠より覺むべき時なり」とあるは多少の改善であると思はれる。原意は「汝等は今の時期が眠より覺むべき時であることを知れば以上の如く行ふべし」との意味である。即ち以上に述べし所の凡ての道德的行爲實行の理由として終末の近接を揭げたのである。

「われらは時を知れり」と云ふ、「時」とは何を云ふか。之をたゞ普通の意味の時と見てはならぬ。英語聖書に之を time（時）と譯せるを、同改訂聖書は season（期）と改めてゐる如き注意すべきである。原語 kairos（カイロス）は或る定まつた、短い、はつきりした時期を指す語であつて、聖書に於てはキリスト再臨の前の或る期間を云ふに用ひられてゐる。コリント前書七章二十九節に「今より後の時はちゞまれり」とある如きを見よ。即ち此處にいふ「時」は「福音の時代」である。福音の宣傳せらるゝ時代である。既にキリスト出現し、その十字架の犧牲成りて、今や舊約の時代は去り新約の時代となつた。しかし此の福音宣傳の時代は決して永久に續くものではない、之には必ず終がある。しかもその終たるや決して永き未來の事ではない。比較的近い中に之が來るのである。そして此時代は一面に於ては福音宣傳の時代ではあるが、又その眞性より云へば暗黑の時代である。イエスは己を捕へんとして來りし祭司の長、殿司、長老どもに言うた「今は汝等の時かつ黑暗の勢なり」と（ルカ傳二二章五三節）。惡が跋扈し、不善が横行し、眞と義とが至て力なく見ゆる時代である。しかし此の時代は永くはない。既に間もなく終らんとしてゐるのである。即ち暗黑の夜は既に更けて東天は早くも紅を呈し、義の太陽はその赫燿たる輝きを以て全世界に照り出でんとしてゐるのである。

されば「信仰の初より更に我等の救は近し」（十一節後半）である。我等の救はるゝ其日、キリスト再臨の日、審判の日、怖るべき日、しかし我等の救はるゝ復活榮化の日、其日は既に近づける故信仰に入りし初の頃より我等の救は近くなつたのである。即ち「夜すでに央けて日近づけり」（十二節前半）である。暗黑の夜は更けて光明の時代は近づいたのである。故に左の如き誡めが當然キリストを信ずる者に向つて說かるゝのである。

故に我等暗昧の行を棄てゝ光明の甲を着るべし。行を端正して晝あゆむ如くすべし。饗宴醉酒、また姦淫好色、また爭鬪嫉妬に歩むこと勿れ。惟なんぢら主イエスキリストを着よ。肉體の慾を行はんが爲に其の備へをなすこと勿れ（十二節後半より十四節まで）。

日は既に昇らんとしてゐる、キリストはすでに來らんとして幕の彼方に待つてゐる、此故に暗黑の行爲は棄つべきである。そして光明の甲を以て裝ひ、晝歩むが如くに何人から見ても正しき行に歩むべきである。凡ての肉慾陶醉を避けよ、肉體の慾に耽るためにその備をなす勿れ、たゞイエスキリストを着よ、然り只イエスキリストを着よとパウロは勸めるのである。

こゝに三種の惡が擧げられてゐる。第一種は饗宴と醉酒、即ち暴食と暴飲である。これは食慾の放縱である。第二種は姦淫と好色、これは性慾の放縱である。第三種は爭鬪と嫉妬、これは所有慾又は自利中心主義の放縱である。この三種の荒亂に或一人が悉く從ふこともあらう。しかし多くの人は全部を行はずして、大抵その一種に從へるものである。即ち暴食暴飲に從ふか、然らずば姦淫好色か、然らずば爭鬪嫉妬かに己を任せて居るのである。けれども全部を行ふが惡である如く、一部を行ふも

亦惡である。これは皆夜の行である。はや日は近づかんとしてゐる。早く夜の行を去れ、早く光明の中にある如く行へ……かくパウロは叫ぶのである。

終末近しとならば誰人も眞面目ならざるを得ない。終末の近きを明知して、その生活と精神と共に緊張せざるものはない。自己の死近きを知れば失望の中にも覺悟して、凡てに於て立派なる態度を示す人が少なくない。信仰の人は勿論、無信仰の人と雖もさうである。まして世の終末の近接は單に終末の近接ではない。また實に新しき時代の到來、慕ひつゝ待ちし主の顯現、自己の救の完成、復活榮化、光明と榮光と生命との充ちあふるゝ時の來ることである。この望ありて如何なる基督者か不眞面目なるを得べき。不信者すら何かの望を前にしては奮勵し努力する。まして絶大の恩惠を受けんとする大救濟の其日を望む者をや。

併し乍ら反對者は云ふであらう、理論としては洵に然らんも、事實千九百年間待てども待てどもキリストの再臨なかりしは如何、これ空しき望を以て人を警め若しくは勵まさんとするものではないかと。果して然るか。千九百年とは人の思ふ程永き時であらうか。永遠の時に比しては實に一瞬時に過ぎないではないか。されば永遠を手に握り給ふ宇宙の主宰者に於ては、それは我等の一日にも足らぬのである。「主に於ては一日は千年の如く千年は一日の如し」とある（ペテロ後書三章八節）。時の長しと云ひ短しと云ふ如きは、要するに比較的のものである。一人に於ても其經驗に於て必しも同一ではない。苦悶の八時間は幾箇月の如く長く、熟睡の八時間は一瞬間である。キリストの再臨後れたりとて何かあらん。そのため墓にある時が長くなりたりとて何かあらん。墓に眠れる間は幾千年にても幾萬年にても眄覺めし時は之を一瞬時と感ずるに相違ない。故に待つことは如何に永くも敢て厭はないのである。

そして今や兎にも角にも世が其終に近づきつゝある事――信仰の始より我等の救の近くなりし事――それは明瞭に過ぎるほど明瞭である。世界大戰中に始まりし世界の墮落は、戰後に至つて益々甚しくなり進んだ。その荒濫敗頽の實狀はげに凄まじき限りである。かゝる狀態にて世が尙ほ永續するとはいかで信じ得よう。今は世界がその終末に向つて急速に歩みつゝありとは、多くの識者の一致して認むる所である。神世界を治め給ふ。かゝる荒濫の長びく筈はなく、さりとて改善の曙光は何處に於ても發見せられない。世は終末に近づきつゝありと認むるが最も自然の見方である。歐洲各國の眞面目なる思想家にして、廣き知識の立場より又冷靜なる學者的思索の立場より世の終末近きを認むるものが多い。まして我等基督者にして、聖書に於て主の約束として又使徒の敎として此事が明白に敎へられあるを知る者に於てをや。われら聖書的の此希望を疑ふことなく益々それに於て堅くなり、以て希望に激勵せらるゝ愛の行に勵むべきである。

信仰に由てのみ義とせらるゝの恩惠、それより起る愛のみにて事足るか。希望を否認するものは信

と愛のみを高唱する。これ信をまで斥け去る現代に於ては、少しは良き部類に屬する方である。しかし是れ頗る不完全の道である。人は弱きものである。過ちやすきは人である。この弱くして過ちやすき人に向つて、信に由て救はるゝだけにて足ると云へば、兎角その行に於て弛みを來しやすい。悔改めて信ずれば足ると敎ふる我國淨土門の敎の起す弊害は周知の事實である。殊に親鸞の淨土眞宗に至つて完成せりと云はるゝ此他力救濟の敎は、遂に如何なる放恣邪行をも是認し、人間一切の罪を煩惱の業となして寛假せんとするの傾向に陷り、その極如何なる醜陋の行爲も信仰と並立し得るものとなすに至る。見よ此信仰又は思想中に漲れる汚氣を！　これ信だけを立てゝ望を抱かざるより起る弊害である。人は信だけを以て良き行の人となり得る筈であるが、人の弱きや到底かく成り得ない。玆に望を以て之を補足する必要がある。再臨審判の期待に由て畏怖を抱いて其行に緊張嚴肅を加ふると共に、主の憐みに由て其時刑罰を免かれて救に入れられんとの信賴の中に敬虔の態度を取り、又希望に伴ふ救の喜びに溢れて自ら善行に出づる事、これ此の希望の結果である。故に信望愛は基督者の健全なる生活の三特徴であらねばならぬ。

世の終を信ずるは果して迷愚であるか。今や世は終末に近づきつゝありとは、識者を以てせずしても何となく感ぜらるゝ事ではないか。世界の荒亂、全世界に充つる陰暗なる空氣、凡てのものが病的に過度に陷れる如き現狀、如何なる放恣邪行も何かの美名を以て是認せらるゝ今日――この凡ては果して終末の豫感を人に與へないであらうか。八年前の世界と今日とを比較して果して如何。今や露獨の紙幣の如きは世界に於て殆ど無價値のものとなつたではないか。誰か八年前に今日の此事あるを思つたか。八年以前を回顧せよ。その時露國はザールに無限の權能ありて政權も敎權も彼の一手にあり、彼の下なる官權は世界無比の權能を以て民を威壓し、少數の革命運動者を除いては何れも之に褶服しつゝあつたのである。誰か此時露國の帝政が一朝にして崩壞し、勞農政府が起り、その紙幣が無價値にひとしきものとなるを思ひ得たであらうか。獨逸帝國と雖も八年前の勢威は如何なりしぞ。そのカイザルの威風と、その整然たる軍國的設備と、其旺盛たる科學的工業とは以て世界を風靡するの力を有して居たのである。誰かその時に於て此大帝國が衰微してそのマルクが今の如き低落を示すを豫知し得たか。世の變動は今やかくも急激を極むるに至つた。さらば今より八年後の世界を今に於て誰か豫知し得るものぞ。八年の後世界各國の紙幣が皆無價値となりて、餓莩全地球の表に充つるの日なしと誰か斷言し得るものぞ。かくて誰か世に終末來らずと言ひ得るものぞ。

世の終末とよ！　然り其時は今まで貴ばれしものが凡て賤きものとなり、今まで賤まれしものが凡て貴くなる時である。然り價値顚倒の時、これ即ち世の終である。その時は人の貴べる財寶の如き何の値すらもたない、一夜にして皆形もなく失せ去るのであらう。その時今の世の權者富者と稱せらるるもの――即ち暗き夜たる今に於て跋扈跳梁せる蝙蝠族、梟族、鼠族等は東天紅を呈すると共に其

の姿を隱し、夜に於ては何の勢力なかりし雲雀、班鳩、鶯等は義の太陽の登上と共に歡喜に充ちて唄ひ又跳り、こゝに世界は全く轉倒し、新世界は生れ、人類とその社會と宇宙とは玆に一朝にして完成するのである。この世界完成の希望こそ、我等此世にありて力なき者を勵まして愛の行爲に出でしむる最大の動力である。

世の終末は如何なる形に於て來るか、それは明白でない。しかし如何やうにしても來り得ることは確實である。文明の破壞、地の變動、地球の壞滅、太陽系の變動……いかにしても世の終末は來り得る。この何時變動し何時覆滅するか測り得ぬ地上にありて、永久の安固を願ふ人の愚さよ。この恃みがたき地上に藏を增し加へて財寶を貯へ「斯て靈魂に向ひ靈魂よ多年を過すほどの許多の貨物をもちたれば安心して食ひ飲み樂めよと言ふ」ものゝ愚かさよ。然るに神これに曰ひけるは無知なる者よ今夜汝が靈魂取らるゝ事あるべし」と云ふ（ルカ傳十二章十六―二十節）。然り洵に然り。然るに恃み難き地上に賴みがたき物を積み、賴みがたき權力にあこがれて蠢動することの愚なるかな。營々として努力し紛々として爭鬪し、そして得る所は遂に滅亡あるのみではないか。「剛愎にして悔なきの心に循ひ己の爲に神の怒を積みて其義しき審きの顯はれん震怒の日に及ぶなり」（ロマ書二章五節）とは即ち此事である。我等信によつて義とせられたる者は希望を併せ抱きて、この信とこの望とに勵まされて此時代にありて「光明の子」として愛の生活を營むべきである。暗き夜にありて決して失望せず、黎明近きを信じて、光明の甲を着て歩むべきである。

第五十六講　小問題の解決

羅馬書は第十三章までを以て福音に關する大切なる問題は說き了へたのである。個人は如何やうにして救はるべきか、人類は如何やうにして救はるべきか、人は基督者として道德的に如何なる行爲をなすべきか、凡そこれ等重要なる問題に對しては、既に充分に解答が與へられたのである。そして十四章以後は比較的小なる又ロマ敎會特有の――他の敎會に無いとは云はぬが――問題をのみ取扱つて居るのである。故にパウロは此等の問題に入るをやめて十三章を以て此の大書翰を閉づべきであつた。よし又彼が十四章以後を記した事には意味があるとしても、既に根本問題を研究し了へたる我等は玆に研究を中止するを至當とすべきではあるまいか、かく思ふことも出來る。併し乍ら小問題また

之を閑却すべきではない。人の生涯に屢々生起するものは小問題である。その解決如何は信仰生涯の健全なる歩みの上に影響する所決して小ではない。故にパウロが小問題解決に用ひし精神を學ぶは我等に取りて亦頗る有益且必要なる事である。或意味に於て大問題の解決と等しきほど重大であるとも云ひ得る。我等はやはり十四章以下を研究すべきである。

まづ十四章を見よ。その全體が食物問題である。これ小問題ではあるが基督的愛の問題に關係する所大なる點に於ては決して小問題ではない。パウロが此問題を基督的愛の高所に立ちて解決したるは頗る注意すべき點であると云はねばならぬ。次の十五章前半は十四章と同じ精神の續けるものであり、その後半はパウロの羅馬教會に對する態度及び福音宣傳の上の覺悟の披瀝の如きものである。そして十六章に入つては全く個人的の挨拶となる。玆にパウロは幾人かの友人について記し、その一人一人について簡潔適切なる紹介をなして居る。玆に彼の友人觀を知ることが出來るのである。彼の如き大宗教家が如何なる友をもつて居たか、又その友について如何なる細かき又良き見方をなして居たか、その一つ一つを見て偉大なる胸中に潜める婦人の如く纖細優雅なる愛を窺ふことが出來る。まことに注意すべき所である。そして十六章は最後に至つて二十五節以下の壯大なる讃美となつて玆に愈々此の大書翰は結了するのである。

キリストは神である、又人である。彼は此世の聖人の如く神らしき人、又は人にして神の如きものではない。彼には二つの性質があつた。曰く神性、曰く人性、即ち彼は全き神であつて又全き人であつた。基督者は勿論純然たる人であるが、又キリストの宿る所となつたものである。故に唯の人とは違ふ。キリストに在りて「皆新しく」なりし者である。彼の中にはキリストが在る。故に彼に神心(かみこころ)があると共に人心(ひとこころ)がある。優れたる基督者は強く神らしく (intensely divine) あると共に又強く人らしく (intensely human) ある。努力修養に依て人らしき所を殺して謂ゆる聖人となつたものではない。特別の修養工夫に依て此世を超越し人間性を脱却すると云ふ事が佛教の理想であるとするならば、此點に於て基督教と佛教との相違は甚だ著しいのである。特別に聖き生活に入る事、特別に聖き事に從ふ事、即ち形の上の聖さは基督教に於ては少しも要求されて居ない。基督者は形に於ては此世の人と何等異なるを要さない。心も亦人らしくあつて宜いのである。唯その人らしさが神の靈に依て深められて、強く又深く人らしくなるを要するのである。パウロの如きは偉大なる基督者なりし故その神らしき方面も人らしき方面も共に深刻强烈であつたのである。羅馬書十四章以下の三章は彼のこの人間的方面の發露として見て、限りなき興趣が存するのである。

人に缺くべからざるは此二つの方面である。Divinity（神らしき方面）と Humanity（人らしき方面、これを人間味と譯すべきか）、天に關しての熱心と地に關しての熱心、この二つが互に相補つて眞の人が生れる。一方に偏するときは——乙の方に偏するのは勿論、たとひ甲の方に偏するにても

――その人は健全を失つた人である。我が日本民族の如きは人間味に豐かにして神的興味の甚しく缺けたる民である。故に人として健全を缺くのみならず、その人間味さへも亦甚だしく淺薄に流れやすいのである。見よその國語は情を表はす美はしき語に富めども、神聖嚴肅なる事を言ひ表はす語に甚だ乏しきことを。人は此の兩方面を具備して初めて眞の人たるのである。パウロがその宗教的偉大の故を以て人間味の缺乏せる者の如く思はるゝは大なる誤解である。彼が宗教的に偉大なる事その事が彼の人間的にも亦偉大なることを示すのである。何となれば凡そ人間味に於て缺けたる者が宗教的に偉大なる筈はないからである。

羅馬書は偉大なる神學書と稱せらる。そして實に偉大なる神學書である。個人の救と人類の救と實踐道德とに關する完全なる敎の提唱である。到底これ以上の神學書が此世に現はるゝ事はない。羅馬書以前に羅馬書なく、羅馬書以後に羅馬書なきものである。併しながら此書がもし神學の提示のみを以て終るならば、あまりに莊高嚴肅に過ぎて人をして近づくを得ざらしむるものと成るに相違ない。然るに玆に十四、十五、十六章がある。これは彼とロマの信者との個人的關係を示すものにして、彼の人間味の美はしさが遺憾なく表はれてゐるのである。之あるがために羅馬書が我等になつかしき書となり、又パウロ彼自身が親しき人となるのである。十四章以下はこの意味に於て貴重なる部分であると共に、其内容の傳ふる敎訓から見るも亦頗る貴重なる所である。我等は之を輕視してはならぬ。

十四章は第一節に於て先づ言ふ「信仰の弱き者を納けよ、然れど其意ふ所を詰る勿れ」と。これ全章の精神である。信仰上の根本問題については爭はねばならない。しかし生活上の小問題については他の信者の意ふ所を詰つてはならない。彼をして其の信ずるまゝに行はしめなくてはならない。そして彼を審かずして兄弟の一人として愛を以て納けねばならない。人の小問題にまで干涉して彼をして我の意に從はしめんとしてはならない。人おの〳〵見る所あり、然るが故に互に人の意を尊重し、その自由を認容し、寛き愛の心を以て互に相納くることを心掛けねばならぬ。

「或人は凡ての物を食ふべしと信じ或人は弱くして只野菜を食へり」と第二節に在る。こゝに信者に肉食をなす者と之を避ける者との二種類があつたのである。そして後者が肉食を避けた理由は今日の菜食主義者とは目的を異にしてゐた。當時希臘、羅馬等の諸都市に於いては、偶像の宮に獻げし肉類を商人に拂ひ下げ、商人は之を他の肉と混へて市に賣る風習があつた。從つて肉食する時は偶像に獻げし肉をも食する虞れがあつた。こゝに於てか當然信者の間に二種類の人が出でた。謂ゆる「信仰の强き者」は偶像に獻げし肉を食ふことを少しも虞れなかつた。彼等はイエスの語（マタイ傳十五章十六―十八節）を引用して口より出づるものは人を汚せど口より入る者は毫も人を汚さずと主張したであらう。彼等は形式の事に拘泥しない强い信仰と强い人格の所有者であつた。パウロ自身の如きは勿論之に屬する人であつた。然るに謂ゆる「信仰の弱き者」があつた。彼等は愼み深い人か或は氣の小さ

い人であつた。エホバ神を信ずる以上偶像に獻げし物を食するは信仰的に不純であると考へた。これを不徹底と云へば云へる。けれども人には各々生來の性向や過去の境遇や遺傳がある。凡ての人が謂ゆる強き信者となる事はできない。弱き信者の思ふ所にも亦一理ある。その良心の鋭敏なると、偏へに敬虔ならんとつとむる心はまた大に採るべきである。

又日を守る守らぬの問題があつた。「或人は此日を彼日に愈れりとし、或人は諸日も皆同じとす」（五節）とある。「或は節期、或は月朔、或は安息日の事」（コロサイ書二章十六節）につき舊き律法をそのまゝに守る人があつた。彼等は謹みて日を守らずしては神の御心に背くと思ひて日を守つたのである。然るに或人に取つては凡ての日が同じであつた。彼等は或日には特別なる或奉仕をすると云ふやうな形式主義を脱してゐた。凡ての日に於て同樣に神に事ふるを以て必要且つ充分であるとなした。前者は謂ゆる弱き信者、後者は謂ゆる強き信者であつた。

右の如く強き信者があり、又弱き信者があつた。かくて二種類の人のある事は別に困つた事ではない。困つた事は兩者の間がとかく愛の一致を缺いた事であつた。強き者は弱き者を小心者として嘲りてわざと其の前に食するやうな事をなし、弱き者は強き者を不敬虔不謹愼となして行動を共にするを恥ぢ、その間に厭ふべき乖離が起りつゝある狀況に於てあつた。その暗雲は多分まだ色濃くはなかつたであらう、それでも暗い雲の起つて居た事は事實である。

そしてパウロは勸めて言ふのである、此の小問題の不一致を問題とせずして愛に於て一致せよ、互に審かず又輕しめず、小問題なるが故に相讓りキリストの愛に於て一たれと。殊に強き信者に向つて彼は特にその注意を喚起するのである。強き信者にとつては食物や日の問題は自由の問題である。どうでもよい問題である。肉は食してもよい、故に或る理由があれば食さなくてもよい。彼等に於てはどうにでも出來る事である。故にもし肉を食する事が愛の道に適はぬ場合は肉を食すべきでない。「肉を食ふ酒を飲む何事に由らず汝の兄弟を倒し或は礙かせ或は懦弱くするは宜からざる也」（二十一節）とあるがパウロの意である。食物問題は小問題である。しかし愛は大問題である。小問題のために大問題を犧牲にしてはならぬ。小問題に於て自分の意地を通すため大問題たる愛の道を破つてはならぬ。日は守るもよし守らぬもよし、肉は食ふもよし食はぬもよし、しかし愛は是非とも行はねばならぬ事である。故に愛の道に適ふやうに日を守るべし、又肉を禁ずべしである。兄弟を愛するが故に日を守り肉を禁ずべしである。「そは神の國は飲食に非ず、ただ義と和と聖靈に由れる歡樂びにあり」（十七節）である。故に飲食問題を主要問題として爭ふなく、かゝる小問題は愛の故に讓りて、偏に義と和と歡びとの實現を計るべきであると、かくパウロは勸め戒めるのである。まことに小問題の如くであるが、その解決如何は決して小問題ではない。事は大問題に波及し來るのである。故に小問題が大問題となるのである。

觀劇如何の問題、禁酒禁煙等の問題がある。觀劇が絶對に悪いと定めることは出來ない。又小量の飲酒喫煙は場合によつては却つて保健の道であるかも知れない。之等を行つたものは罪悪を行つたものであると云ふことは出來ない。併し乍ら之を禁ぜる兄弟の前にて殊更に之を用ふる如きは愛の道に適はない。かくして人を礙かせばこれ明白に罪である。殊に信者にして飲酒喫煙する如きは同信の青年を礙かせ易きことであり、又未信者をして福音を誤解せしめ易きことである。共に愛の道に適はない。故に凡て此種の實際問題に於ては、何れでも宜しきもの故、愛の道に適ふやうに行ふべきである。

故の札幌農學校教頭ウイリヤム・S・クラークは日本に來る際健康維持の必要上四ダースの純良ブランデーを携へ來つた。これ醉うて樂しむ爲にあらず、時々小量づゝ用ひて疲勞を醫し健康を維持せんためであつた。然るに品川より小樽への船中、飲酒が如何に日本人——殊に日本の青年を毒しつゝあるかを實見して大に感ずる所あり、日本を救ふために禁酒奬勵の必要を感じ、札幌に着くや先づそのブランデーを棄てゝ自ら禁酒の實をなすと共に禁酒會を起し、以て禁酒の必要を熱心に宣傳する所あつた。此一事によりて先づ禁酒の美風が我國に入り、以て今日の盛なる禁酒事業の一源泉となつたのである。何れでもよき事である故に愛の標準に照して定むるとは、正にかくの如きを言ふのである。

謂ゆる信仰の強き者は小問題に於ては弱き者に讓るの心得を要する。これ愛をして全からしむる道である。又弱き者は強き者を審判いてはならぬ。「食はざる者は食ふ者を審判する勿れ」と三節にあり、尙ほ次の四節に於ては強き語を以て之を戒めてゐる。又弱き者は強きものに向つて愛の要求を爲してはならぬ。愛の不足を責め愛の尙ほ多からんことを要求する如きは卑劣の行爲である。強き者は弱き者を許して愛の故に彼を輕しむる勿れ。弱き者は強き者の行爲に對して愛の故に審判かざれ。かくせば兩者の間に差別と乖離失せ、キリストにありて一體たる兄弟姉妹として美はしき愛の團結を續け得るのである。

信仰の根本問題に於ては強烈無比、一歩も讓らざりし剛漢パウロが、愛について慮る所のいかに周密纖細なりしかを見よ。人生の實際問題についての彼の解決の如何にキリスト的愛に根ざすかを見よ。彼はその確信に於て巖の如く堅く、その感情に於て婦人の如く細かく行きとゞいて居た。彼は強く神的なりしと共に亦強く人的であつた。第三の天に携へ行かれて人の語るまじき言を聽くほどに宗教的に偉大なりし彼は、一人の弱き信者に對しても妻が夫を思ふ如き熱愛を以てするほどに人間的であつた。そして多くの信仰の偉人は皆さうであつた。之が靈的偉人の靈的偉人たる特色である。靈的に大なると共に人間味に富めること、弱き兄弟のために自己の自由を制限せんとする心やり、これが眞の信者に存するものである。われら亦深くパウロの此心に汲み、強く宗教的たると共に又強く人間

的なる、情味のゆたかなる、愛に於て纖細なる人とならねばならない。

第五十七講　パウロの傳道方針

第十五章十四節以下の研究

第十二、十三章を以て一般的の實踐道德を說き、十四章より羅馬敎會特有の問題に入つたこと前述せる通りである。そしてパウロは後者のために十五章十三節までを用ひて熱心に說く所あつた。そして最後に「望を與ふる神の汝等をして聖靈の能に由り其の望を大にせんが爲に、汝等の信仰より起る諸の喜樂と平康を充たしめ給はんことを願へり」と述べて結んでゐる。羅馬書の本文は玆に一先づ終つたと見ることが出來る。一章の十六節より十五章十三節までを以て、敎義の解明及び實踐道德の提唱は結了したのである。故に殘るは餘論又は挨拶の如きものである。これ即ち十五章十四節以下である。

十五章十四節より章尾までは專ら自己に係はる事の說明である。これ一種の挨拶の如きものである。しかし其中にパウロの傳道方針が判然表はれて居る。われ等は之に注意すべきである。

先づ十四、十五節に曰ふ「わが兄弟よ、われ汝等が仁慈に滿ち凡ての智に充ちて互に勸め得ることを信ず、然れども兄弟よ我れなほ汝等に憶起させんため憚らずして略汝等に書きおくれり」と。こゝに見るはパウロの大なる謙遜である。彼もとより羅馬の信者に敎ふるに足る充分の力あり、彼等また彼より敎を受くべき人たちであつたこと勿論である。しかしながらこの敎會は彼の創設した敎會ではなかつた。その中に彼の知れる信者ありしとは云へ、大部分の敎會員は未知の人であつたに相違ない。こゝに適當の禮節と謙遜とを要する理由が存する。故に「なんぢらは我より敎へらるゝ必要なき人たちにして、信仰と行とに秀でて居るけれども、尙ほ知れる事を思ひ起さしめんために斯く永々と書いたのである」との意味を先づ述べるのである。彼の如き種々の事に於て優秀なる人物が、又謙遜に於ても優秀なりしは注意すべき點である。謙遜の要なきに謙遜する所に彼の偉大が存する。もし彼に此美點がなかつたならば他の幾多の長所も亦輝きを薄くしたに相違ない。この美德ありて他の凡ての長所が一層光輝を增すのである。これ明かに彼の靈的偉人なりし特徵である。ために彼の人格が一層の美しさと偉さとを加へるのである。われ等は宜しくパウロの此態度を學ぶべきである。加之、かく人の感情を重んじ、人の誤解を避けんため、又良き感じを起さしめんために細心の注意を拂ひたる用意

周到を見よ。益々以て彼の偉大を示すものではないか。

十五節の最後には「これ神の我に賜ふ所の恩に因るなり」とある。即ちロマの信者に向つて福音を說きしは神より賜はりし恩惠に因ると云ふのである。この恩惠とは何ぞ、これ即ち特に彼に賜はりし異邦傳道職である。彼は十六―十九節に於て之を說明した。彼は神に招かれてこの大任を授けられ、キリストの役者となりて專ら異邦人敎化に從ひ、キリストに助けられて、「異邦人を順從しめん爲に休徵と奇跡の能と神の靈の能をあらはし、言と行とを以てエルサレムより徧くイルリコに至るまで」福音を宣傳した。これ今まで彼の爲せし所であつた。そして此異邦傳道は之からも益々熱心に爲さんとする所、即ち彼の一生の業である。故にロマの信者に向つて福音を說くも、亦これ此職分に忠實ならんが爲である。ロマの敎會が異邦にある敎會なるが故に、その敎會に向つて彼が異邦使徒たるが故に敎を說くのである。

二十節に於てパウロはその傳道上の大方針を披瀝した。即ち「且われ愼みて他人の置きし土臺に建てじとイエスの名の未だ稱へられざる所に福音を宣傳へたり」と云ふ。彼は主として心靈未開の野の開拓に從事した。未だ人の斧を入れざる樹木を伐り倒し、未だ人の鋤を入れざる地を耕して、そこに福音の播種をなすを以てその一生の大方針とした。故にユダヤ傳道には手を下さざるのみならず、異邦に於ても他人の建てた敎會は力めて之を避けんとした。彼は福音の全く入り居らざる地、一人も信者のなき地を選んで其處に福音を宣傳したのである。「愼みて」は正譯ではない、「努めて」と譯してやゝ原語の意味を表はし得る。しかし「野心を抱けり」との意を原語は傳へる。即ち「他人の置きし土臺に建てじとイエスの名の未だ稱へられざる所に福音を宣傳せんとの野心を抱けり」である。彼は此事を自分の野心(Ambition)となし、又名譽となし、心から之を喜び求めたのである。こゝに彼の獨立心が見える。又他の信徒の領分を侵さぬといふ武士的廉恥心が見える。又世界を傳道區域とする其聖望の偉大さが見える。

心靈未開の地は全世界に充ち〳〵てゐる。パウロはその開拓に從事して日もまた足らざる有樣であつた故に、ロマに到らんとするも到る時をもたなかつたのである。「是故に屢ば阻げられて我れ汝等に詣ることを得ざりき」と二十二節に在る。次に彼は言ふ「今この地に傳ふべき處なし。われ年來なんぢらに往かんと願へる故に、イスパニヤに赴かん時に汝等に就るべし。蓋經過る時に汝等に遇ひほゞ意に滿足ことを得て又汝等に送られんことを望めば也」(二十三、二十四節)と。彼は小亞細亞、ギリシヤ方面にもはや福音を傳ふる餘地がなくなつた故いよ〳〵ロマに行くことに定めたと云ふ。しかしロマ行はロマ行を目的とするのではない。イスパニヤ(スペイン)に行くとき序にロマに立ち寄り、ある期間とゞまりて心充ちたる後ちロマを出立してイスパニヤに行かうと云ふのである。彼はかくの如く遠大なる世界傳道の計畫をもち、且それを實現せんと努めたのである。

羅馬教會はパウロの建てた教會ではない。故に彼は之に對して適當なる遠慮と禮儀を表はした。他人の事業に係はる事である故、綿密なる注意を以て之に對し、專ら他の權限内に自己を入るゝやうの事を避けた。まして他人の業を自分のものとする如き横領的の心は少しも彼にはなかつたのである。羅馬教會は文明世界の中心に立てる教會である。これを我有とするは、恰も高山の頂より山下の全野を俯瞰するが如きものである。世界傳道を以て天職とせる彼は、もし此教會を以てその本據としたならば如何に萬事に好都合であつたであらう。しかしパウロは努めて他人の置きし土臺に建てじと決心せる人であつた。故に飽くまで或る遠慮を以て此教會に對し、充分の禮節を盡すを忘れずしてそこに美はしき謙遜の表はるゝものがあつた。パウロの此心事を知りて、ロマの信者は却てパウロを自己教會の監督として迎へ度しとの心を抱いたかも知れない。しかし乍らパウロは他人の建てし土臺に建つるを潔しとしない。彼の思ふ所は西陲イスパニヤである。小亞細亞とギリシヤとの傳道を了へたる彼は、スペイン傳道のために其殘生を獻げんと志したのである。しかしロマ行は多年の宿望であれば、スペイン行の序でを以てロマに立ち寄り、そこに或期間を愛の交換に送りて後ち、ロマの兄弟の祈禱に送られてスペインに行かうと志したのである。

以上の如きがパウロの傳道計畫である。當時の文明世界全體を掌に握るが如き氣宇の宏大なるを見よ。實に彼の異邦使徒職は全異邦を傳道區域としてもつ所のものであつた。彼の大なる到底これ以下を以て滿足することは出來なかつた。彼はこの大方針に從つてその三十年の傳道生涯を送つた。彼がその計畫せし如くイスパニヤまで行きたりしや否やは、全然推測の範圍に止まる問題である。或は行き得たかも知れぬ。或は未だ行かざる中に迫害の手にロマ府に殪れたかも知れぬ。いづれにせよ彼の傳道事績を知るには、彼の殘存せる凡ての書翰に合せて使徒行傳に據るほか道はない。この使徒行傳はその半ば以上をパウロの傳道記錄に用ひてゐる。これ聖書中最も興味深き文書である。當時の地理、人情、風俗等を研究して、これらの背景の前に此書の記事を立たせて見るとき此書より無限の興趣が湧き立つのである。由來良き旅行記は基督者に清き樂しみを與へるものとして最も歡迎すべきである。之を近時續々として出づる片々たる文學物の如きを讀むに比しては其差實に千里である。リビングストンのアフリカ傳道旅行記の如きはその代表的なるものである。そして使徒行傳は凡ての旅行記中最も優秀の旅行記である、我等は羅馬書十五章後半にパウロの世界傳道の精神を學ぶと共に、その具象化せるものとして使徒行傳の記事に深甚なる注意を拂はねばならない。

パウロは此世界を家とする傳道者であつた。萬國の民に福音を宣傳せよとの主の命令を彼は實現せんと欲した。從つて他人の拓きし所を避けて、專ら光の照らぬ野に谷に、光を照らさしめんとした。これ彼の一生抱きて變らざりし聖望であつた故に彼は異邦世界の各要地に播種しつゝ進み進んで遂に當時の世界の西陲なるスペインを志すに至つたのである。思ふに彼は平生世界地圖を眺めつゝ頻りに

此意圖の實現方法を考案したことであらう。そして常に若々しき希望に心を躍らして居つたことであらう。勿論彼は特別の意味に於て選ばれし器なるが故に、誰人も彼の如く世界に傳道する人となることは出來ない。けれども彼の此の大精神に效ふことは出來る。他人の据ゑし土臺に建てじとの氣慨、心靈未開の地を選みてその暗黑を拓かんとの志、それは彼より學び得ることである。

何故に指頭の如き小天地に互に派を立てゝ相鬩ぎ相侵すのであるか。何故眼を南方の洋土に注ぎてそこに在るボルネオ、ニューギニヤの靈的未開地を思はないのであるか。何故北方の曠漠無限の如き大シベリヤを閑却するのであるか。其沿海州だけに於ても廣きこと如何ばかりぞ。誰かヤプロノイ、スタノボイ兩山脈の峰に福音の旗を高く北風に飜すものは無きか。近く隣邦たる支那に眼を注ぐも、我島帝國の幾倍かの地が誰人か來つて之を福音的に占領する日を待ちつゝある。魂の未開地は全世界に充ち充ちてゐる。その廣さは測り得ぬほどである。その中の一部を我區域として賜はりても、日本全土を我有とするにまさること萬々である。かゝる聖望に燃えたつものはあらざるか。神はかゝる勇敢なる僕を要し給ふのである。

然るに今の日本人の考ふる所は何か、その望む所は何か。その最大問題は物質問題、經濟問題である。その最も望む所は自己の收入の些少の增加である。又は自己中心の小さき戀愛問題である。その最も好んで讀むものは遊戯的の愛欲を題材とした片々たる小說の類である。自己の小利害——之が現代の日本人を支配してゐる凡てである。實に侏儒の集合と云ふべきは我民族の現狀ではないか。そして基督者と稱するものまでが此惡風に染みて、多くはたゞ自己の小慰安のためにのみ福音を信じつゝあるは痛歎すべき極みである。かく己を主とする信仰は決して眞の信仰ではない。己を忘るゝ信仰こそ眞の信仰である。己を忘れて世界を思ふこと、之を我等は日本今日の基督教徒に勸める。廣漠なる世界、そこには未だ福音の光に觸れざる民が何億となく存在してゐる。福音の光に照らされざる地が幾千萬方哩となく存してゐる。此事を常に忘れてはならない。もとより世界傳道の使命を受くることなくして世界傳道の旅に上ることは出來ない。故に傳道者は特別の人に限る。たゞ凡ての信者に要求せらるゝことは、自己の慰安を主とする信仰を棄てゝ世界を思ふ信仰を抱くことである。かくして一身の利害得失を忘れて、我信仰生活の性質を向上させその內容を豐富にする心掛を持たねばならぬ。

故にパウロの傳道計畫を學び、その傳道の方針を探ることは單なる史的研究ではない。之は亦實に自己を覺醒さする爲の研究である。我等は深く彼の心に汲み、强く彼の心にならふことを力むべきである。

第五十八講　パウロの友人錄

第十六章一—二十四節の研究

パウロは自己の傳道計畫を說明して第十五章を了へた。そしてその最後に「平安の神なんぢら衆人と共に在さんことを願ふアメン」と、恰も此大書翰を結ぶが如き一語を下した。彼は此時はもう筆を擱かうとして居たのかも知れぬ。しかし此書翰の持參人たるフイベを一言ロマの信者に紹介するの必要を想ひ起して、十六章一、二節の語を成した。そして更にロマに在る彼の友人を想起してその名を列記し、「安きを問へ」の連發を以て十六節までに至つたのである。

「安きを問へ」は日本語の「宜しく」に相當する。希伯來人の挨拶の語は「シャローム・アレーケム」であつて、神の平安汝等にあれを意味する。彼はロマの信者中よりその知れる人々を想起して、一々「宜しく傳へよ」と全會衆に向つて注文したのである。勿論こゝに列擧せられし人々も此書翰の讀み手の中に加はつて居たのであるから、殊にかく云ふ必要はないやうであるが、彼はかく述べて全會衆が此人々に注意せんことを望んだのであらう。とにかく之は人名の連續にして、特に研究する必要ありとは思はれぬ。歷史的には多少の意味あらんも信仰的には別に研究の要あらじと人は云ふであらう。併しこれ淺見である。敬虔を以て研究せよ。言葉の裏に潛む深き意味を探り出せ。然る時はこれ亦確かに神の言の一部にして、人の信仰を助くる文字なることを悟るであらう。不注意に之を讀むときは恰も砂漠を旅するが如く感ずるであらう。しかしながら砂漠は決して無價値のものではない。その中に僅か在る所の草花、昆虫の類は博物學者にとつては無限の興趣を荷ふものである。聖書の研究に要するものは敬虔の心である、又深く探る精神である。

パウロは先づ「ケンクレアにある敎會の執事なる」フイベを「我等の姉妹」として彼等に紹介した。そして「なんぢら聖徒のなすべき如く主に緣りて彼女を納け、その需むる所は之を助けよ」と勸め、次にフイベの爲人を簡潔なる語を以て述べて「彼は素おほくの人を助け、また我をも助く」と云うた。僅かに二節ではあるが實に至れり盡せりと云ふべき紹介の語である。

次に安きを問ふべき在ロマの人々を列擧せんとして先づ第一にプリスキラとアクラを擧げた。プリスキラは妻、アクラはその夫である。使徒行傳十八章に於て此夫妻のことは明かである。彼はもとロマの人であつたが、一時コリントに滯在し、此の時パウロと職業を共にし——彼等は天幕工であつた

――又福音のための勞苦を共にしたのである。後ち又パウロと共にエペソに到つて同樣の働きをなした。其後この夫妻はロマ府に還りしと見え、パウロは幾人かに挨拶するに當つて、誰よりも先に此二人を擧げたのである。實に彼等はそれに充分値する人たちであつた。「かれらはイエスキリストに屬して我と共に勤むる者なり。又わが命の爲に己の頸を劍の下に置けり。たゞわれのみならず異邦人の凡の教會もまた彼等に感謝せり」と記す。短かき語を以て豐かなる事實が示されたのである。パウロは彼等と共に勞苦せし年月を想起して、萬感胸に迫るの感あり、彼等に對して抱ける感謝の念がおのづから此の美はしき推讃の辭となつて表はれたのであらう。

次に擧げらるゝはエパイネトである。「かれはアジアに於てキリストの初に結べる實なり」と云ふ。アジアは小亞細亞の一州の名、エペソは即ちその首府である。多分エパイネトはパウロのエペソ傳道の時最初に悔改めた人であらう。この一事實の中にエパイネトの人物と信仰の性質がよく見える。パウロは彼の名譽のために此事を特にロマの信徒に告げたのであらう。

次には「我等の爲に多くの苦勞をせしマリアに安きを問へ」とある。この婦人について委しき事は少しも分らないが、たゞ此一語に依て彼女が信仰の戰士であつたことが分るのである。次にはアンデロニコとジュニヤを擧げる。この二人はパウロと共に或期間獄舍に住みしことあり、又使徒の間に名高き人々であり、且パウロよりも早く悔改めた人であるとパウロは記して居る。此數語で彼等が如何なる人物であつたかは分るのである。尙續いてアンピリアト以下十數名を擧ぐるに當つて、出來るだけ其人の特徵について一言せるに注意すべきである。「キリストに屬て我等と共に勤むるウルバノ」と云ふ如き、「キリストに於て鍛錬なるアペレ」と云ふ如き、「彼等は主に於て苦勞せし女なり」と云ふ如き、何れも一言を以て其人の特徵を語れるものである。

以上の如くして、ロマの信徒がその中の重なる人々に敬意を表すべきを慫慂したるのち、パウロは十六節に於て一先づ此挨拶を閉ぢんとして「汝等きよき接吻を以て互に安きを問へ。キリストの諸の教會なんぢらに安きを問へり」と記した。前半はロマの信徒各自の間に於ける愛と敬意との交換をすすめしもの、後半は他の教會より傳言を一纏めにして取次いだのである。

右の挨拶の語はロマに於けるパウロの友人錄である。彼はロマに右の如き善き友人をもつて居たのである。凡そ人は何等の目的なくして如何に獨坐工夫を凝すも決して大思想を抱き得るものではない。大思想は人を助けんとする愛に燃ゆるとき自づと湧起するものである。羅馬書の內容が基督教的救拯の完全なる說明たるは云はずもがな、之を一の宇宙觀、人生觀として見て偉大、深奧、莊美なる大思想たるは誰人も否定し得ぬ所である、そして何が斯くの如き大思想を產んだのであるか、これ幾つもの解答を促し得る問題ではあるが、ロマ信徒に對するパウロの愛なくして之の生れなかつたことは明らかである。されば我等は玆に羅馬書を產みし原因の一として、パウロの幾人かの友人の名を知

るのである。プリスキラ、アクラを初めとして玆に記されたる二十有餘名の人々――此種の人々を慰め、勵まし、敎へんとする愛の迸流が遂に羅馬書の大思想となつたのである。

カーライルのクロムウェル傳は世にある傳記中の最も優秀なる者であらう。彼はクロムウェルの書翰と演說を出來るだけ多く蒐集し、それに說明を加へて讀者の了解に便ならしめて、之を世に提供したのである。故に題して『クロムウェル傳』と云はず、『クロムウェルの書翰及び演說』と云ふ。けだし彼もし自己の筆を以てクロムウェルの生涯を描き出さんか、讀者はカーライルを通してクロムウェルを知ること丶なりて、その知識は間接なるを免かれないであらう。しかしもしクロムウェルの書翰と演說とをそのまゝ讀者に提出するときは、人々は直ちにクロムウェルの姿に接するを得て、其知識は直接且純粹なるを得るであらう。カーライルは斯く考へし故、わざと自己を隱して專らクロムウェルだけを人の前に提出したのである。これ彼のクロムウェル傳の特に貴き理由である。まことに人の手紙ほど其人を能く表はすものはない。羅馬書の如きは一つの系統ある思想の大なる發表であるが、最後に此等人名錄を見て、此が一の書翰として此等の人々に送られしものなる事を知りて、此書が單なる論文にあらずして活ける人に送られし一の活ける消息であることを知るのである。實にこの人名錄は羅馬書の價値と性質とを示すものである。

此の人名錄の中、三分の一が婦人なることは特に我等の注意をひく事である。第一は此書翰の持參人たるフイベ、第二はプリスキラ、第三はマリヤ、この三人については前述せし通りである。就中プリスキラはパウロ及び夫のアクラと共に主のため十字架を負ひし女であつて、且その夫より先に名の記しあるを見れば（使徒行傳十八章十八節、二十六節、テモテ後書四章十九節に於ても同樣）信者としての彼女の優秀は一般の定評であつたのであらう。そして第四にパウロの擧げし婦人はテルパイナとテルポサである。「彼等は主に於て苦勞せし女なり」と云ふ。この二人（多分骨肉か）は福音のために努力盡瘁せる婦人であつた。第五には「愛せらるゝペルシーに安きを問へ、かれは主に居りて多く苦勞せし女なり」と記して、彼女が充分に十字架を負へる人なることを示してゐる。次にはルポの母を擧げて「即ち我母なり」と簡單なる一語を加へてゐる。以て彼女の價値ある老婦人なりしを知るのである。尙ほ十五節のジュリヤは婦人であり、その外「ネリオと其姉妹」の語がある。かく初代敎會には婦人多く、しかも優秀にして福音のために努力せし婦人が多かつたのである。

既にキリストの在世中にも幾人かの婦人が弟子の中にありて、それ〴〵重き役目に當り、或意味に於て男子にまさりしこと四福音書に記さるゝ通りである。そして玆に記さるゝ通り、使徒時代に於ても亦婦人に多くの善き信者ありて、彼等は男子に劣らぬ良き働きをなしたのである。かくて婦人は基督敎世界に於て事實的にその値を示して、その地位を高め進んだのである。由來希臘、羅馬の文明は決して婦人を重んずるものではなかつた。その社會に於ては著しく男尊女卑の風があつた。當時の哲

人賢者の著書を見るもその婦人觀は一般のそれと似たものである。かゝる時代と社會にありて、福音は新たに婦人の價値を發揚し、婦人の地位を高めし點に於て全く獨創的であつた。これ福音の革命的性質其者の一表顯である。パウロはコリント前書に於て「女の首は男なり」（十一章三節）との男主女從主義（男尊女卑にあらず）を主張しながらも、「されど主にありては男は女に由らざることなく、女は男に由らざることなし」（十一章十一節）との一種の平等觀を述べてゐる。そして又こゝには其友人錄中に幾人かの女性を擧げて彼等を推奬してゐる。これ當時の大哲學者たるセネカやシセロと雖も到底なし得ぬ所であつて、パウロの革命的なるを充分に語ると共に、彼をかく革命的にせし福音そのものゝ革命的勢力たるを知るのである。

次に注意すべきは玆に記されし人々が皆信仰の勇士なることである。或は富者もあつたであらう。高官に在る人もあつたであらう。或は貧しき下層社會の人もあつたであらう。或は奴隷もあつたであらう。それが皆愛と信仰の故に一致して玆に一の美はしき靈的一團を形成したのである。玆に記さる る二十七人がパウロの知れるロマ信者にして孰れも良き信仰の持主なるを思へば、彼の知らざるロマ信者中にも幾人かの良き信者ありしこと勿論である。以て初代教會の靈的豐强を知るのである。

尙ほ注意すべきは五節前半「又その家にある教會にも安きを問へ」の一語である。教會とありても今日の教會とは大に違ふ。これは原語エクレシヤであつて、一の團體をなしてゐる信徒全體を意味する語である。即ちこの場合に於ては、プリスキラ、アクラの家に幾人かの信者が度々集會をした其集會の人々を指したのである。今日の謂ゆる教會と云ふ如き組織的のものは紀元三世紀まではなかつた。原始教會はたゞ愛を以てつながる兄弟的團體たるに過ぎなかつた。羅馬教會と云うても別に堂々たる會堂を所有してゐたわけではない。たゞ信者の家で會合を保つだけのものである。プリスキラの家にある教會と云ふのは其一であつて、尙他にも之に類するものがあつたのであらう（十四節、十五節を見よ）。實に簡素な、單純な、別に教職と云ふ職業的の者もなく、教權とか教會政治とか云ふ此世の政治組織をまねたものもなく、自由な、樂しい教會であつたのである。かゝるものが教會であるならば我等も勿論これを斥けない。否これを我等の靈的家庭として迎へる。然りかくの如きものゝみが眞の教會である。基督教が潑溂として生きて居た原始時代に於ては教會とは凡て之であつた。後ち靈に於て失ひし所を肉に於て補はんとして今見る如き教會なるものが生れたのである。

玆に我等は十五章二十五節以下に注意し度い。二十四節までに於てパウロはスペイン行の計畫について語つた。しかし二十五節より一轉して云ふ「然れど今われ聖徒を助けん爲にエルサレムに往かんとす。マケドニヤとアカヤの人々エルサレムの貧しき聖徒のために供給をすることを喜悅とせり……この故に我この事をはり此果を付しゝ後なんぢらに由りてイスパニヤに往かん」と。彼はかねての約束通りエルサレムの貧しき信徒を助くるため異邦より獻金を募つた。そしてロマ行に先ちてエルサレ

ムに至つて之を手渡しせんと計つた。そしてそれを實行した。彼はコリントにて羅馬書を認めし後ち兄弟たちと共にエルサレムに向つて旅立つた。エルサレムにパウロ排擊の空氣濃きは著明の事實であつた。其地の頑固なるユダヤ教信徒は彼を讐敵の如く惡んでゐた。故に彼のエルサレム行は火焰の上に躍るが如き危き者であつた。從つて兄弟姉妹たちは彼の此行をひきとめんとして、心をこめたる忠告を試みた。しかし彼は敢然としてエルサレム上りを決行した。彼は生命を賭して此愛の勤を實行したのである。そしてもし幸にしてエルサレムに於て生命を全うするを得ば、西向してロマに赴き、ロマより又スペインに往かんと志した。果して彼はエルサレムに於て身命の危險に會した。しかし神は能く死より生を起し給ふ。パウロのロマ行の望みは徒(あだ)とならなかつた。彼は思ひもよらず囚人としてロマに行くことになつた。神は斯くの如き道を以てパウロのロマ行の切望を達せしめ給うたのである。讃美すべきかな彼！（事は使徒行傳二十章以下に於て明かである）。

時は紀元五十九年の春の頃であつたと史家は云ふ。パウロは囚はれの身ながらも春の如き若き希望に輝きて、伊太利半島とシシリー島との間を北上して半島西岸の港プテオリに上陸し、そこより陸路ロマに上り、ロマの兄弟たちと相合した。其時プリスキラ、アクラ以下數十名（又は數百名）の兄弟姉妹たちの喜びは如何に大なりしか。又多年翹望の對象なりしロマ府を見し時の大使徒の喜びは如何なりしか。此地に數年を過せし間、この大使徒と信者たちの交りは如何に美はしくあつたであらう。これを兄弟姉妹相爭ふ今日の教會に於て眺めて、無量の感慨に打たれざるを得ないのである。

第五十九講　終結＝頌榮の辭

第十六章二十五節以下の研究

幾度も終らんとして終らなかつた羅馬書は愈々茲に最後に達した。十六章二十五節以下はこの大書翰の最後を飾るにふさはしき大讃美である。

パウロは十五章十三節を以て一先づ此書翰を了へしも、追伸して三十三節に至り茲に再び此書翰を了へんとした。しかし又追伸して十六章十六節に至つて三度び擱筆せんとした。しかし又追伸して異論を戒めて二十節に至つて茲に四度び擱筆せんとした。しかし又追伸して彼と共に在る者の挨拶の語を取次いで後ち愈々此大書翰も終結に達せし故、茲に最後に大なる頌榮の辭を述べたのである。これ書翰の態より見ればやゝ變則であると云はねばならない。けれども筆者の心は此の變則を通して輝い

て居るのである。恰も一の宗教的集會を催せし場合に、一旦集りを閉ぢし後ち尙ほ講師より附言する所ありて二度び集りを閉ぢしも、更にまた附言する所ありて三度び集りを閉ぢ、尙かくすること數回にしてやうやく終はりしが如きものである。これ集會の形式より見れば明かに混亂であるが、却てその中に靈的生命の豐かさが見ゆるのである。

羅馬書は偉大なる書翰である。そして劈頭の語（一章一節より七節まで）が偉大である。これに應じて其終尾の頌榮の語が偉大である。莊麗なる殿堂を飾るべく、其表門と裏門とが莊麗なのである。われ等は今この莊麗なる裏門に全注意を注集すべきである。この頌榮の辭は三節にわたつて居るけれども、實は全體で一の成文（センナンス）をなして居るのである（最後のアメンは別として）。邦譯聖書に於ても、英譯聖書に於ても、やはり一成文となつて居る。原文に於ては九つの句より成る一成文で五十四字より成り（冠詞まで加算して）、必しも混雜した文ではないが、邦譯に於ては邦文の性質上頗る混雜した文になつて居るのである。故に左表の如く一句々々に分析して研究の便を計り度い。こゝにパウロは僅か一成文の中に彼の廣汎なる基督教思想を壓搾したのである。故に一句ごとに思想が新しくなる。甲の句が一の大思想を傳へれば、又乙の句が別の大思想を傳へる。故に一句々々に深き注意を拂はねばならぬ。

汝等を堅固（かた）うし得る者に

我福音に依りて
イエスキリストの宣傳に依りて
奧義の啓示によりて
永き閒世に隱れたりしも
今顯はれ
窮りなき神の命に由り
預言者たちの聖書を以て
信仰の服從に入らしめんために
萬國の民に示されたる
獨一叡智の神に
世々限りなく
イエスキリストに由りて
榮光あらんことを

この頌榮の辭の中、根幹といふべきは「汝等を堅固（かた）うし得る者に、即ち獨一叡智の神に、世々限りなく、イエスキリストに由りて榮光あらんことを」の句である。あとは此根幹に附隨する枝葉であ

る。勿論枝葉と云うても大切なるものではあるが、先づ注意すべきは右の根幹である。「汝等を堅固うし得るもの」は即ち「獨一叡智の神」である。信仰は神より與へられしもの、又信仰生活の堅立は神の導きに依るのである。神は彼を信ずる者を堅固うし得るのである。即ち堅固する力を有し給ふのである。ああかの幾人かの信者を作れりと誇稱する輩は何者ぞ。然らば汝は花を造り得るか、樹を育て得るか。「我は植ゑアポロは灌ぐ、長つる者はただ神なり。植うる者も灌ぐものも數ふるに足らず、ただ貴きは長つる所の神なり」とある（コリント前書三章六、七節）。傳道者はいかに大なる働きをなすとも、信者を造り、育て、堅固うすることは出來ない。之を爲し得るはたゞ神のみである。故に「神は終まで汝等を堅くし、我等の主イエスキリストの日に於て汝等に責なからしむ」（コリント前書一章八節）と云ひ、また「汝等の心の中に善き工を始めし者これを主イエスキリストの日までに全うすべしと我ふかく信ず」（ピリピ書一章六節）と云ふ。パウロは信仰を堅固うし得る所の獨一叡智の神を讃美するのである。

次に注意すべきは「世々限りなくイエスキリストに由りて榮光あらんことを」とパウロがキリストを通して神を讃美したことである。キリストを以て神と人との仲介者となし、彼を通して神と交はり彼の故に罪を赦され、彼を以て永生を與へらるゝとの事は福音的基督教の基調である。今や彼を除きて神を信ずる事が流行し、基督信者と稱する者の中にさへキリストを大教師とのみ見る者多きは、パウロの此心と全く正反對なるものである。キリストの外に救なしとは福音的救濟の根本義である。パウロは此大なる頌榮の辭の最後に「イエスキリストに由りて」の一句を用ひて、彼の抱ける此の篤き信念をおのづから表はしたのである。

以上の讃美の語が廿五、六、七節の根幹である。パウロの頌榮の辭の骨は之だけである。しかし之に附隨せる各句が又一つ一つ重大なる思想の發表である。今それを概觀し度い。第一の句は「我福音に依りて」である。神は福音に依りて信徒を堅固うするのである。「我福音」とあるも別に普通の福音と異なるものを指したのではない。これパウロ特有の語にして、彼は二章十六節に於て又テモテ後書二章八節に於て同一の語を用ひてゐる。けだし我說く所が純正の福音なることを確信し居たる彼は、時にこの種の語を用ひたのであらう。「われ等にもせよ天よりの使者にもせよ、若し我等が曾て汝等に傳へし所に逆ふ福音を汝等に傳ふる者は詛はるべし」（ガラテヤ書一章八節）と云ひし程のパウロである。彼のこの確信を知りて「我福音」なる語が決して偏狹傲慢を意味せぬことを知るのである。

次の句は「イエスキリストの宣傳に依りて」である。神は福音に依り又キリスト宣傳に依て信徒を堅固うするのである。キリストを宣傳すること、彼とその生涯、その十字架、復活、再臨を人々に宣べ傳へること、彼に關する事の外は宣べざること、これ即ちキリスト宣傳である。そして福音と云ふは要するにキリスト宣傳に外ならぬのである。

次には「奥義の啓示によりて」の句がある。イエスキリストの宣傳に依りてと云ふことを言ひかへれば「奥義の啓示によりて」である。そして此奥義は「永き間世に隱れたりしも今顯はれ」たものである。「我等の語る所は隱れたりし神の奥義の智慧なり、こは創世の先より神の豫め我等をして榮を得しめんが爲に定め給ひしものなり」とパウロは曾て云うた（コリント前書二章七節）。その通り、豫め定められては居たが隱れて居たのである。その隱れて居たものが今神の獨子の出現、その生涯、その十字架、その復活に依りて明かに啓示せられたのである。これ即ちパウロの謂ゆる「我福音」である。我福音と云ふも決して自己創造の教ではない。神よりキリストを通して啓示せられた教である。もし福音が人間創造の教ならば之に眞の生命はない。たとひ榮ゆるも朝に咲きて夕に枯るゝ野の花の榮の如きものである。又その宣傳者たるパウロその他の使徒たちに、かくの如き巖よりも堅き確信と火よりも熱き熱心とを與へた筈がない。まことに福音が神の啓示なればこそ、彼はその宣傳のために凡てを拋つて毫も悔いず、鷲の如く翼を張つて上つたのである。

そして此奥義の今啓示せられたるは「限りなき神の命に由り」である。永遠に在す神は玆に此時を以て此奥義の啓示をなすことを自ら定め給うたのである。即ちこの福音は全然神の意志より出でたのであつて何等人の心に依據しないのである。又此奥義の啓示は「預言者たちの聖書を以て」である。即ち舊約聖書を以て神の啓示は行はれたのである。但し「永き間世に隱れたりしも」とある通り、キリスト出現以前には舊約聖書の眞意も人々には充分にわからなかつたのであるが、今キリスト出現の故にその眞意あきらかとなり、こゝに聖書を通して神の啓示は行はるゝことゝなつたのである。勿論聖書以外に聖靈の指導は不可缺である。しかし聖書が此新啓示の手段となつたことは明かである。「聖書（舊約）は汝をしてキリストイエスを信ずるに因りて救を得しめん爲に智慧を與ふるもの也」とパウロが後年テモテに說きしを見よ（テモテ後書三章十五節）。尙ほ最後に此啓示は「信仰の服從に入らしめんために萬國の民に示されたる」ものである。啓示の目的は世界萬國の民をして神に歸屬するに至らしめんためである。げにキリストの福音の目的は之である。決してこれ以下ではない。福音の本質はあくまで抱世界的である、全人類をして神に信從せしむるにある。神は之を目的として常に全人類を招きつゝある。然り常に全人類を招きつゝある。

以上の如きがこの大なる頌榮の辭の大意である。今大體原文の順序に依て之を解りよく云ひ直せば大凡左の如くである。

汝等を堅固うし得るものは神である。神は福音に依りて汝等を堅固うするのである。換言すればイエスキリストの宣傳に依りて汝等を堅固うするのである。又換言すれば奥義の啓示によりて汝等を堅固うするのである。――此奥義は永い間世に隱れ居たれど今顯はれたのである。その顯はれたのは窮りなき神の命に由るのであつて、舊約聖書を通して顯はれ、且萬國の民に彼等をして

信仰の服從に入らしめんために示されたものである。――かくの如くして汝等を堅固うし得る神に、即ち獨一叡智の神に、世々限りなく、イエスキリストに由りて榮光あらんことを願ふ。

まことに多くの學者の云へる如く、この頌榮の中に羅馬書全體が要約せられて居るのである。

神の榮を讃美することは基督者が凡ての場合に於て爲すべきことである。如何に大なる成功を以て見舞はるゝも、彼は之を自己の力に歸してはならない。之を全然神の力に歸してその榮を讃美せねばならない。又いかに大なる不幸に會しても神を無慈悲としてはならない。やはり神を讃美せねばならない。大災禍に會して「われ裸にて母の胎を出でたり、又裸にて彼處に歸らん、ヱホバ與へヱホバ取り給ふなり、ヱホバの御名は讃むべきかな」と云ひしヨブは我等の好き模範である。大書翰を認めてその最後に何等自己の力を思ふことなくして、凡てを神に歸して美はしき頌榮の辭をとゞめたる大使徒パウロは我等のよき模範である。

げに然り、凡ては神より出づるものである。人はたゞ神に使役せられて彼事此事に當るに過ぎない。人に何かの能力あるもそれはもとより天賦である。人に何の誇る所があり得よう。人は神の前に立ちて絶對の謙遜あるのみである。彼は事に當りて常に獨一叡智の神を讃美すべきである。一の事を爲し了へて神を讃美し一日を暮し了りて神を讃美し、一週を、一月を、一年を送り了りて神を讃美すべきである。回顧して自己に何かの善きを見出すは未だ信仰の不純なる者である。そして此世を去るの時、御許に召さるゝの時愈々來らば、一生を回顧して自己の功績を思ふことなく、凡ての良き事を神に歸し以て聲高く頌榮の辭を述ぶべきである。大著述の最後を頌榮を以て結びたる大使徒にならひて、我等も與へられし我小生涯の最後を頌榮を以て結ぶべきである。我等をして今も、後も、いつまでも神を讃美せしめよ、然り神を讃美せしめよ。

以上の如きが實にこの偉大なる書翰を結ぶ所の大讃美の辭である。パウロならで羅馬書が草せられなかつたやうに、彼ならでかゝる大なる頌榮の辭は出でなかつたに相違ない。その一語一語、一節一節を見よ。空しき語は一つもない。その一つ一つが重大なる思想の壓縮である。大著述をなして後も大使徒の力は少しも衰へずして、その終にかくの如く盛なる靈的生命の結晶とも云ふべき大讃美が、彼の魂の底より天に向つて擧つたのである。事それ自身が實に壯美なる事である。これぞ眞の畫龍點睛である。これあつて羅馬書は永久に世界第一の書である。

第六十講　羅馬書大觀

凡て書物を讀みたる後に於て忘れ得ざるものは大體の印象である。勿論その中の重要なる箇處も亦忘れ難きものではあるが、最も強く永く我心に留まるは其全體の空氣である。恰も百花咲き匂ふ春野を逍遙せし後に於て、個々の花の忘れ難きもあれど、むしろ花の野に身を浸してその香に醉うたといふ事その事が最も強き記憶として殘るたぐひである。羅馬書を讀み了へし後の感も亦同樣である。その三章後半、或は七章後半、或は八章全體と云ふ如き著しき箇所が我等の記憶に強く殘ることは事實である。けれども尙強く我等を動かすものは、大體の印象である。今こゝに此大體の印象を述べておきたい。これ即ち羅馬書大觀である。

羅馬書全體に關する事を講述の題目とする時は尙他にも多い。二三の例をあげれば、羅馬書の世界歷史に於ける影響と云ふ如きは確かに面白き題目である。ルーテルの宗教改革の如き歷史的大革新が彼の聖書研究、殊に羅馬書研究に源を發せし如きその最大なるものである。その他此書の研究は幾度も史的革新の源泉となつたのである。或は又幾人かの偉人傑士の羅馬書觀＝此書に對する見方或は此書より得し印象等＝を學ぶことも確かに興趣深き事である。その他この書について學ぶべきことは多いけれど、今は暫くこれを省略して置く。

羅馬書を讀了して受くる第一の印象は、それが信仰第一の書であると云ふ事である。信仰によりて義とせられ、信仰によりて潔められ、信仰によりて榮化せらる。信仰を以て始つて信仰を以て進み信仰を以て終る、之を說いたのが羅馬書である。羅馬書は勿論愛を說く、又望を說く。その愛を說きし十二、十三章の如き、その望を說きし八章の如き、いづれも著しき所ではあるが、しかし羅馬書全體に漲れる空氣は信仰第一のそれである。パウロは律法に信仰を對立せしめて、後者を以て前者を打ち破つたのである。かくして舊き律法時代に暇を告げて、新しき信仰時代の到來を公宣したのである。これが即ち羅馬書である。此書は實に信仰時代の曙を告げる曉の鐘の音である。

第二に受くる印象は、此書が恩惠の書であると云ふことである。神の人に對する道は絕對的恩惠である。神はたゞ恩惠を以て人を義とし、人を救ひ給ふ。「キリストは我等のなほ罪人たる時われらのために死に給へり、神は之によりて其愛を彰はし給ふ」（五章八節）とあるは羅馬書の大主張である。我等が罪人であることは少しも神の恩惠の發動を妨げない。否罪人を救はんためにこそ彼はその獨子を世に賜ひて、彼をして十字架に人類の罪を贖はしめて、以て罪人の赦され且救はるゝ道を開き給うた

のである。事は何等人の功に由らない、又人の願に由らない、只專ら神の自發的行動に屬してゐる。故に絶對的恩惠である。此事を極力闡明するのが羅馬書である。

神はかく只恩惠を以てのみ人に對し給ふ。人の功なくて救はるゝの道は既に備へられてゐる。故に人は只此のまゝ神に立ち歸りて信從の生活に入りさへすれば宜い。實に簡易の極とは此事である。然るに多くの人は此事を知らない。神が手を開いて寶物を與へんとしつゝあるを知らない。故に此の恩惠の中に己を投げ入れようとしないのである。又信者と雖もこの福音の中心的生命の所在を充分に知らない。故に信仰生活を以て努力作善の連續と誤想する。そして其のために早くも既に疲憊しつくして信仰生活の弛緩無力を生むのである。これ一に神の恩惠の眞性質を知らぬ事に起因する。まことに今日の基督信者はたゞ恩惠々々と叫ぶのみであつて、この恩惠の何であるかを知らないのである。パウロは信仰中心の人であつたが、その基に神の恩惠、神の愛を置いた人であつた。即ち神が先づ愛を以て人に對するが故に之に感激して人が信仰を起すのであると彼は說く。實に恩惠なくして福音はないのである。羅馬書が神の恩惠を何よりも先に立つる書であることを忘れてはならない。

基督教と云ふからとて之を他の謂ゆる宗教と同一列に置くは誤つてゐる。基督教は謂ゆる宗教ではない、神より人への啓示である。宗教は人が神を求むるものであるが、基督教は神が人を求むるものである。故に前者は人の努力、工夫、攻究、修養、論理、修道に重きを置くに反し、後者はたゞ神の恩惠の受納を主眼とするのである。自己が種々の方法をめぐらして神に近よりゆくのが普通の宗教であつて、たゞ恩惠を受けて感謝喜悅に入るのが基督教である。かく此世の宗教と神よりの啓示たる福音は相違してゐる。地の產と天の產との間には或根源的の相違があるのである。然るに人は多く此區別を知らずして、或は比較宗教學の立場より、或は努力修養の道より、或は論理攻究の道よりして福音の生命に達せんとする。これドクトル・ヂョンソンの謂ゆる牡牛より乳を搾取せんと願ふの類である。赤子の心を以て謙だりて神の與へ給ふ生命を受くること、之が救ひに入る唯一の道である。神は人を求めつゝある。彼は人が努力修道の險路を經て近より來るを靜かに待ち給ふ神ではない。神は常に人を求めつゝある。兩手に珠玉を滿載して人々が手を伸ばして受取るのを待ちつゝある。人は信仰を以て之を受けさへすればよい。それより眞の生命は臨むのである。

羅馬書は以上の如き事を傳ふる書である。從つて信仰を以て此恩惠を受くる態度を人に要求する書である。しかしながら斯かる態度に入るに當つて先づ必要なるは、如何にして神の前に義たらんかとの問題を心に强く抱くことである。自己の積罪汚濁に堪へ兼ねて聖き神の前に己を置くに堪へず、神の刑罰に當然値することを認めて苦惱重く心を壓し、いかにして神の前に義たらんかとの問題に惱む人、斯る人に取りては羅馬書は絶好の伴侶である。羅馬書は要するに此人生の最難問題に對して明確にして最後的の解答を與へ、以て心の重き苦悶を取去りて、晴天白日の境に人を引きだすものであ

る。即ち人の提供する義にあらずして神の提供する義、人にある所の義にあらずしてキリストにある所の義、この義を凡て信ずる者に賜ふことを羅馬書は敎へて、人々をして動かざる歡喜の世界に入らしむるのである。パウロはピリピ書に於て此事を述べて「信仰に基づきて神より出づる義、すなはち律法に因れる己が義に非ず、キリストを信ずるに由れる所の義を有て」と云うた（三章九節）。この義を人に與へて人の罪の苦悶を取り去るのが羅馬書に謂ゆる福音である。故に羅馬書は此むづかしき問題に苦惱せる人の讀むべき書である。

然し乍ら如何にして義たらんかと云ふ如き問題を抱かぬと云ふ人が此世には數かぎりなく在る。しかし乍ら此事は決して此書の普汎的價値を損ずるものではない。何となれば人が眞に人生に目ざめし時、眞に自己の實相を知りその最深の要求を探りあてし時、人が最も眞面目になりし時、かゝる時に必ず心に湧起するものは此一問題であるからである。故に誰人も羅馬書を讀むべきである。今日のために又は他日に備ふるために誰人も羅馬書を讀むべきである。そして此書に示されし如き福音の道を經て、此書に示されし如き生命に入るべきである。これ此世に生を享けし人が他の凡ての事柄にまさりて全注意を獻ぐべき人生第一の業である。

尙ほ注意すべき一事がある。「イエスキリストの僕パウロ」を以て始まりし此書は、最後に「獨一叡智の神」を讃美して終つた。彼は先づキリストの僕として自己を全く彼の下に隱して紹介し、そして最後には神を讃美するのみにて少しも自己を顯はさない。もとより強き特徵をもつてゐた彼の事であるから到る處に彼の精神は鮮かにあらはれ、殊に七章後半の如き痛烈なる自己一身の告白などありて、此書を讀みしのちに於て著者たるパウロ彼自身が可なり強く讀者の心に殘るは自然である。しかし是れ求めて爲せし所ではない。彼は偏に自己を顯はさじと努めたのである。彼は「我名に托りてバプテスマを施すと人に言はれんことを懼れ」（コリント前書一章一五節）て、つとめてバプテスマ施行を避けた人であつた。また「言と智慧の美たるを以て……神の證を傳へ」なかつた。これ自己の力を以て人を福音に惹くを虞れたからであつた。「蓋なんぢらの信仰をして人の智慧に由らず神の能に由らしめんと欲へばなり」と彼は言うてゐる（コリント前書二章一—五節）。彼はかく常に注意して己を隱して神とキリストとを顯はさんとした人であつた。故に羅馬書を讀みて彼の姿が可なり強く見ゆるとは云ふものの、それにも增して——然り幾十倍も增して——強く見ゆるものは神とキリストの姿である。實に此書に於て神の愛とキリストの救とはパウロの凡ての特徵を押しのけて立つてゐる。然り神とキリストは滿天の輝きを受けし如き鮮かさを以て立つてゐるのである。故に此書を讀んで更に知り度く思ふは、パウロではなくして神とキリストである。パウロが極力自己を隱して顯はさんとした此の神、キリストは何であるか、その愛、その救について尙ほ深き知識は如何にして得べきかと、人々は此研究に對する熱心を燃やすのである。この意味に於て羅馬書は大なる傳道書であると云ふべきである。

之を要するに世界最大の書と云へば、之を羅馬書のほかに求むることは出來ない。此世に大作と云はるゝもの、名著と云はるゝものは少なくないが、羅馬書に比しては其光を失ふのである。ゲーテのファウストの如きを近代人の聖書と云ふ人あるも、到底羅馬書と比することは出來ない。其他ダンテの神曲と云ふもシェークスピヤのハムレットと云ふも尙ほ之等と比肩するに足るべき大作といふも、到底羅馬書と光を爭ふことは出來ない。誰か臨終の時に當つて世の謂ゆる大作に依て慰められ得ようか。しかし乍ら死に處しても生に處しても、如何なる場合にも常に人生の最大伴侶たるは羅馬書である。故に之にまさる貴き書物は此世にないのである。

羅馬書講演約說

筆者曰ふ、約説實は原稿である、畔上君の編纂に次いで之を掲ぐるは重複の嫌ひありと雖も、聖書の言は幾回重複するも益あつて害がない、讀者が前後兩編を合せ讀んで、さらに深くパウロの言を味はれん事を望む。

第四十三講約説

パウロの愛國心

羅馬書九章一—五節

○パウロは希臘コリントのガヨスの家に客となりし間にテリテオを書記として此書翰を口授しつゝあつた（十六章廿二、廿三節）、彼は多分一日に此書翰を書き終つたであらう、朝始めて夜までには終つたであらう、而して多分正午少し過ぎ頃に八章を書き終つたであらう、火山が熔岩を噴出するが如くに、彼の張裂けんとする靈魂は其大思想を吐露して之を書記テリテオの筆に留めた、人は如何にして救はるゝ乎、是が第一に取扱はるべき問題であつた、而して說き來り說き去りて第八章の終りに至つて彼は一種の安堵を感じたであらう、恰かも旅人が嶮しき峠を登り詰て其巔に達して一息するが如くであつたらう、彼は後を振回り、來りし道を下に瞰て、大聲に勝利の凱歌を揚げたのであらう、玆

羅馬書九章一—五節

に口授は一先づ中止せられ、口授者と書記と、傍聽の特權に與りし主人ガヨスとは、共に別室に退きて、中食の卓に就いたであらう。

○休憩の後に口授は再び始つた、而して凱歌を揚げし口授者の口より出し言は讃美ではなくして呻吟であつた、背を顧みて歌ひしパウロは前を望みて呻いた、自分の救は確實である、救に到る途は明白である、然れども我が同胞は如何に、イスラエルは如何に、パウロの呻きは夕風に遠く響く大洋の唸の如くであつた。

我はキリストに在りて眞實を語る、我は僞はらず、我が良心は聖靈に在りて共に證す、我に大なる憂ある事を、我が心に絶えざる痛ある事を、我は願ふ、我が兄弟、我が骨肉の爲ならんにはキリストより絶れてアナテマたるも可なり、我はイスラエル人に就て言ふ、子とせられし事、榮光、盟約、律法を授けられし事、祭儀、約束、皆な彼等に屬す、列祖は彼等の列祖なり、キリストも亦肉體に由れば彼等より出でたり、彼は萬物の上にありて世々崇めらるべき者なりアーメン（第九章一―五節）。

○ユダヤ人はパウロに就て言ふた、「彼は叛逆者である、イスラエルと其榮光たるモーセの律法を賣りし者である」と、「然らず」とパウロは答へて曰ふ「我は我國を思ひ、我民を想ふ、彼等が救はれんが爲めには我れ自身は呪はるゝも可なり、我が耐へ難き憂慮と苦痛とは彼等が福音を斥けて其恩惠に與らざる事なり」と、パウロは玆に己が模範をモーセに取つて言ふたのである、モーセも亦イスラエルの罪の赦されん事を祈求ひて言ふた、

嗚呼此の民の罪は大なり、彼等は己が爲に金の神を作れり、然れど嗚呼、若し聖意に合はゞ彼等の罪を赦し給へ、然らずば願はくは汝の書記し給へる書の中より我名を抹去り給へ（出埃及記卅二章卅一、二節）。

と、是れ以上の愛國心を考ふる事は出來ない、民が救はれんが爲には自分は永久に滅びてもよいと云ふのである、誰か云ふ、クリスチャンに愛國心なしと、最上の愛國心はキリストに由て起る者である、ルーテル、サボナローラ、クロムウェル、ミルトン、「我に若し百の生命あらば我は悉く之を我が國の爲に棄てん」と云ひし米國革命時代の愛國者があつた、八人の男子を生める母が其すべてを國に獻げて惜まなかつた南北戰爭時代の米國婦人があつた、基督教は個人道德に長ずるも國家道德に於て缺くる所多しと言ひ來りし我國多數の所謂「識者」は、歷史も實際も知らざる者である。

○數ずべき事は救はるべき者が救はれない事である、キリストを生みしイスラエルがキリストの救に與らないと云ふ事である、悲歎此上なしである、其理由の解るまではパウロの煩悶はやまなかつた、同じ悲歎が日本人に就て起るまい乎、日本人は優秀の民でない乎、强い宗教心を持てる民でない乎、或はユダヤ人の一派ではあるまい乎との說が立てらるゝ程である、而して此民に過去六十年に渡り隨

分と善き福音が傳へられた、第十九世紀の基督教宣教歴史に於て日本に尠からざる傳道的勇者が送られた、ヘボン、ブラウン、ベルベッキ、監督ウイリヤムス、監督ハリス、W・S・クラーク、彼等は何れも偉人であつた、而して彼等は其生命を日本人の爲に棄て惜まなかつた、然れども日本人は國民として今尙ほキリストを斥けて彼に從はないのである、佛教徒は何千萬を以て算へらるゝに基督信徒は三十萬人に足らないのである、日本人は西洋宣教師より西洋文明を獲て、キリストの福音を獲んと欲しなかつた、又福音を受くる者はあつたが長く固く信仰を持續する者は至て少數である、大抵は信仰を棄て元の不信者となるが常である、之を思ひて我等にも亦パウロの如くに「大なる憂、絶えざる痛」なきを得ない、最後の審判の座に於てキリストは日本人を訟へて曰ひ給はぬであらう乎「ニネベの人はヨナの說教に由て悔改めた、然るに是等の日本人はヨナよりも大なる者の教を傳へられて之を省みずして肉慾文明に耽つた、彼等が罪に定められるゝは當然なり」と（マタイ傳十二章四一節參照）。

○乍併パウロは彼の同胞に就て失望しなかつた、彼はユダヤ人の最後の救を信じた、「イスラエルの人悉く救はるゝを得ん」とは彼の結論であつた（十一章廿六節）、我等も亦日本人に就て同一の信仰をいだくであらう。

○玆にキリストは神であると云ふ事が明白に教へてある、「肉體に由ればキリストも亦彼等より出たり、彼は萬物の上に在りて世々讃美を得べき神なりアーメン」と（五節）、パウロの此言に紛はしき所は少しもない、文法上並に言語學上より見て其明白なる意味を變へる事は出來ない、たゞキリストの神たる事を信ずるの甚だ困難なるより、此一節に關し古來幾多の解釋又は讀方が現はれたのである、改正譯新約聖書欄外に於て、「萬物の上に在りて」云々を前句より切離し、之を別に神を讃美する言葉と見るが如きは其一である、乍併個人の信仰問題を離れて、聖書の文字其物に就て見て之はキリストを神なりとして示す明白なる言である事は疑ふの餘地がないのである。

○而してキリストは神である造物主であると云ふ事は、此箇處に限らず、聖書の他の箇處に於ても明かに示さるゝ所である、ヨハネ傳一章一節が其一である、「太初に道あり、道は即ち神なり」と云ひて、「道肉體と成りて我等の內に宿れり」と記してある、ヨハネ傳記者はパウロの此言に裏書して居るのである、ピリピ書二章六節にはキリストは「神の實體にて在りしかども自ら神と等しく在る事を棄て難きことゝ意はず」と記してある、神と等しき者は神である事は明かである、コロサイ書一章十六節には、「萬物彼（キリスト）に由て造られたり」とあり、同十七節には「萬物彼に由て存つことを得るなり」と記てある、キリストは宇宙の造主であつて又其支持者であると云ふのである、又テトス書一章三節に於てはキリストを呼ぶに「我等の救主なる神」なる名稱を以てして居る、同二章十三節に於ては、信者は「大なる神即ち我等の救主イエスキリストの榮の顯はれん事を待望む」者として記されてある、其他斯く確然とは示して居ないが、併し乍らキリストを大能の神として解するにあら

されば到底解す能はざる聖書の言は枚舉するに遑がない。

○併しながら單に文字の問題ではない、信仰的實驗の問題である、キリストは神でなければならない、神でなければ罪を赦す事が出來ない、信者はキリストに罪を赦されて、彼が洵に「大なる神即ち我等の救主イエスキリスト」である事を知るのである、「人の子地にて罪を赦すの權ある事を知らせんとて」彼は屢々不思議なる業を行ひ給ふた、「子もし汝等に自由（罪よりの釋放）を賜へなば汝等洵に自由を得べし」と彼は言ひ給ふた、是れ神ならでは言ふ能はざる所である、而して斯く言ひて其言の行はるゝを知つて我等は洵に彼が「萬物の上に在りて世々讃美を得べき神」なるを知るのである、キリストが神で在り給ふが故に我等も世も彼に由て救はるゝのである。

第四十四講約說

イスラエルの不信

羅馬書第十章の大意

○ユダヤ人は何故に救はれざる乎。（一）聖意に合はんが爲である（九章六―廿九節）。（二）彼等が信ぜざるが故である（九章三十節―十章）。（三）彼等の不信に由て異邦人が救はれ、つひに全人類が救はれんが爲である（十一章）。

○第九章は主として神の選（豫定）に就て論ずる、イサクの召れしも、ヤコブの選まれしも之に由る、神の選の聖意の動かざらん爲である（十一節）、神は斯く爲して不義を行ひ給ふに非ず、彼は憐憫んと欲する者を憐憫み、剛愎にせんと欲する者を剛愎にして彼が神たるの權能を現はし給ふに過ぎない、陶工は同じ土塊を以て己が意に任せ、或る器は貴く、或る器は賤しく作るが如くに、神も亦聖意

の儘に滅亡の器と憐憫の器とを備へ給ひたればとて何人も不義を以て彼を責むる事は出來ない、彼は預言者を以て言ひ給ふた「イスラエルの子の數は海の沙の如くなれども救はるゝ者はたゞ僅少ならん」と（イザヤ書十章廿二節）、而して事實は其通りであつた、イスラエルの人の多數は救はれざるべしとの事は神の聖意であつて聖書に應ふ事であつた、神の聖意である、故に其内に深き理由がなくてはならない、之を思ふて我が耐へ難き苦痛の幾部分かを癒す事が出來るとパウロは言ふたのである。

○ユダヤ人の不信の原因は神の聖意に在つた、然れども彼等にも亦大なる責任在て存す、彼等は信仰に由らず行に由て義を追求めた、彼等は己が義を求めて神の義を求めなかつた、「視よ我れ躓石また礙磐をシオンに置かん、凡て之を信ずる者は辱しめられず」とある（イザヤ書八章十四節、同廿八章十六節）、是は勿論キリストを指して謂ふたのである、而してユダヤ人は信ずべき者を信ぜざりしが故に之に躓いたのである、之に反して義を追求めざりし異邦人は計らずも義を得たり、即ち信仰に由る義を得たり、然るにイスラエルは律法の義に達せんとして之にさへ達し得なかつた、彼等は全然義の何たるを解しなかつた、神の遣しゝ者を信ずる是れ即ち神の悅び給ふ工である（ヨハネ傳六章廿九節）、義人却て義を失ひ、罪人却て義に與る、神が何よりも悅び給ふ者は碎けたる悔いし心である、イスラエルは此事を忘れて、却て異邦人の先ずる所となつた（卅—卅三節）。

○イスラエルに熱心がある、然れども智慧に由る熱心がない、彼等は神の義と人の義とを混同して居る、神の義は信仰である、人の義は行爲である、信仰は小兒の信頼である、行爲は大人の努力である、前者は容易である、後者は困難である、而してイスラエルは易きを棄て難きに就いて其目的を達し得ないのである、愚である、氣の毒である、行爲は曰ふ、我れ天に昇つて道を求めん陰府に降て義を探らんと、恰もキリストは未だ降り給はず、未だ復活り給はざるが如くに思ひて……然れども天に昇るに及ばず地に降るに及ばず、「道は汝に近く、汝の口にあり、汝の心にあり」である。道は簡單である、容易である、「汝口にて主イエスを告白はし又心にて神の彼を甦らしゝを信ぜば救はるべし」、簡單明瞭である、何人も爲すことの出來る業である、ユダヤ人は此途を取らずして他の途を取りしが故に、即ち儀式と修養と思索と工夫とに由りて、信仰に由らざりしが故に救の恩惠を逸したのである（六—十一節）。

○信仰の道は簡單である、同時に又普遍的である、之にユダヤ人又はギリシヤ人と云ふが如き區別はない、之に遺傳もなければ系統もない、「凡て主の名を呼求むる者は救はるべし」である、淨土門の佛教に謂ふ所の稱名である、勿論機械的の百萬遍ではない、口に言表はし心に信ずる意味に於ての稱名である、アバ父よといふ小兒の信頼である、而して神は其子イエスキリストに在りて御自身をすべての人に示し、彼等をしてイエスを信じて救の恩惠に與らしめんと爲し給ふた、簡單である、明瞭である、高遠である、深遠である、而して餘りに簡單なるが故に、ユダヤ人には礙く者、ギリシヤ人

には愚かなる者の如くに見ゆるのである（十二―十三節）。

○救は福音に因る、人は福音を聽き之を信じて救はる、聽く事と信ずる事である、福音士の幸福は玆に在る、「和平なる言を宣べ、又善き事を宣ぶる者の其足は美はしき哉」とあるが如し、傳道は教理の講釋でない、社會事業でない、福音の傳道である、「彼れ語り給ひたれば我も亦語る」と言ふのが傳道である、「彼れ告げ給ひければ我は其如く信ず」と云ふのが信仰である。簡單此上なしである、然れども信賴の途はすべての場合に於て簡單極まる者である（十四、十五節）。

○福音は傳へられた、然れどもユダヤ人は聽き從はなかつた、彼等は又聖書に由て豫め福音の何たるかを敎へられた、故に彼等は推委るべきやうなし、不信の責任全然彼等に在り、彼等は救を逸したればとて神を恨み奉る事は出來ない（十六―廿一節）。

○ユダヤ人然り、今日の米國人又日本人また然り、彼等は何を爲しても信仰だけは爲さない、宗教研究、社會事業、平和運動、文化生活……彼等は雜行に忙殺せられて正行に就くの遑がない、米國人はキリストの十字架を仰瞻るの祕訣を忘れ、日本人に之を爲すの謙遜と單純とがない、斯くて兩者共にユダヤ人の如くに、義の律法（理想の實現）を追求めて之に追附かないのである。

第四十五講約說

神の攝理

羅馬書第十一章大意

○イスラエル人の多數は救はれなかつた、併し乍ら是れ神が其選民を棄たまひし譯ではない、パウロ自身が其一人である、「我も亦イスラエルの人アブラハムの裔にしてベニヤミンの支派なり」と彼は玆に言ふて居る、「我は第八日に割禮を受けたる者にてイスラエルの族ベニヤミンの支派、ヘブル人より生れたるヘブル人なり」とピリピ書三章五節に言ふて居る、即ちパウロ自身が生粹のイスラエル人であるに關はらず彼は神の召に與りキリストの僕となる事が出來た、一は十を示す、パウロ自身の救はれたるは總のイスラエル人が救はれ得べき可能性を表はすものである、而してパウロ以來今日に至るまでユダヤ人にして忠實なるイエスの弟子となりし者は絶えなかつた、音樂家メンデルゾーン、

詩人ハイネ、教會歴史家ネアンデル、有名なる基督傳の著者エーデルシャイム等は孰れも純粹のユダヤ人であつて、熱心なる基督者であつた、洵に神は御自身の爲にバアルに跪かざる者七千人を存し給ふた、ユダヤ人全部がキリストを斥けたのではない、彼等の内に少數なりと雖も「今も猶ほ恩惠の選に由る遺れる者」がある（一―十節）。

○イスラエル人は少數を除いてはキリストに躓いた、然し是れ彼等が躓いて斃れんが爲でなかつた、之に由て福音が異邦人に臨まんが爲であつた、ユダヤ人に由て棄られし石は異邦人に由て家の隅の首石となつた、「是れ主の爲し給へる事にして我等の目に奇とする所なり」である（マタイ傳廿一章四二節）、ユダヤ人は自ら福音を斥けて、實は世界教化の道を開いたのである、激勵と競爭は學校を支配し、國家を支配する、學問を支配し、信仰を支配する、神も亦之に由て人類を救ひ給ふ（十一―十六節）。

○地中海沿岸の農夫は老齢に達して衰弱せる橄欖樹を若返らしめんが爲に、其上に野生の橄欖樹を接木するを常とする、其如く神は古例舊慣に其靈氣を喪失せるイスラエル人の上に生氣旺盛なる靈界の野人異邦人を接木して福音の復興を行ひ給ふたのである、イスラエルの信仰の上にギリシヤの知識とローマの常識を接木して、前者は復興して後者は潔められた、是は兩者に取りて善き事であつた、玆に所謂歐洲文明なる者が起つた、其宗教は猶太的、其學問は希臘的、其政治は羅馬的であつた、是は世界を征服すべき文明であつて、ユダヤ人自身も亦其恩惠に浴するに至つた、而してユダヤは何處までも其根であつて、ギリシヤとローマは其枝であつて、ユダヤの產せし基督教が根となつて歐洲文明を保つのであつて、歐洲文明が基督教を保つのではない、異邦はユダヤに向つて誇る事は出來ない、文明の元樹はやはりユダヤである（十七―廿四節）。

○福音はユダヤ人を離れてギリシヤ人に臨んだ、然し是れ神が永久に其民を棄て給ふたからでない、是れ「幾分のイスラエルの頑梗は異邦人の數盈つるに至らん時まで」である、救はるべき異邦人が悉く救はれて後に福音は再びイスラエルに歸り來るのである、「而してイスラエルの人悉く救はるゝを得」るのである、神は其選みし民を棄て給はない、「救者はシオンより出てヤコブの不信を取除く」のである、神の賜物と召とに易ることなきが故に斯く成るべきが當然である、神が暫時イスラエルを棄て給ふたやうに見ゆるは最後に完全に彼等を救はん爲である（廿五―三一節）。

○「それ神はすべての人を憐まんが爲に彼等すべてを不順の内に閉籠め給へり」、先づ一たび不信不順の内に閉籠め、彼等をして推委るべき途なからしめて、然る後に恩惠を施して救の自由に入れ給ふ、人が自分に賴る間は救は何人にも臨まない、遁るべき途なきに至り暗黑の底より救を呼求むるに至て、神は憐憫を以て彼に臨み、大なる救を施し給ふのである、イスラエル人が祖先の功績に賴り自己に救はるべき權利ありと思ふ間は救は決して彼等に臨まない、縱令アブラハムの正統の子孫たりと雖も、其罪を糺され、不順の内に閉籠められるゝにあらざれば、憐まれて救に入ることが出來ないので

ある（三二節）。

○あゝ神の智と識との富は深い哉、其審判は測り難く其道は索め難し」である。神の爲し給ふ所に矛盾があるやうに見ゆる、然し乍ら矛盾は思想上の矛盾であつて事實上の矛盾でない、神は其愛の行爲に由て其すべての矛盾を調和し給ふ、神に至上意志あり、人に自由意志あり、而して二者は共に働きて神を愛する者の益と成る、玆に神の攝理がある、「攝理」は「整へ治むる」の意である、英語の providence はラテン語の Pro と Videre より成りし詞であつて、「前に見る」の意である、神は前より人類の未來を見透し給ひて、其先見の明に從ひて萬事を攝理し、即ち統べ治め給ふのである、之を思ふて人は唯彼の前に平伏しヨブと共に言ふのである、「我れ知る、爾は一切の事を爲すを得たまふ、又如何なる聖意にても爲す能はざるなし、無知を以て道を蔽ふ者は誰ぞや、斯くて我は自ら了らざる事を言ひ、自ら知らざる測り難き事を述べたり……是をもて我れ自ら恨み、塵と灰の中にて悔ゆ」と（ヨブ記四十二章二―六節）、萬人の救はれん事は神の聖旨であつて、世界歴史は之に達するの道たるに過ぎないのである（三三―三六節）。

第四十六講約説

聖き活ける祭物

羅馬書第十二章一節

○第十二章を以て羅馬書の第三區に入る、第一章より第十一章までは二區に別れて基督教の教義を論じ、第十二章より第十五章までは其道德を述ぶ、教義が先にして道德が後である、教義に根柢を置かざる道德は弱くして消滅し易くある、教義に十一章を與へ、道德に四章を配りしパウロの基督教に注意すべし、教義七分、道德三分、故に其道德は堅くして動かないのである。

○「然れば兄弟よ、我れ神の諸々の慈悲をもて汝等に勸む、その身を神の意に適ふ聖き活ける祭物として神に獻げよ、是れ當然の祭なり」と、一言一句強い深い言辭である、「然れば」「是故に」希臘語の oun、英語の therefore である、第一章十七節以下、第十一章までを受けて言ふのである、「事實

斯の如くであれば」、汝等は斯の如くにして義とせられ、斯くの如くにして潔められ、斯の如くにして救を完成せらるゝのであれば、汝等は其恩に酬いんが爲に云々である、短い接續詞であるが意味の重い詞である、道德を教義に結附る詞である、教義の坂を登り詰めて後を顧て發する詞である、「是故に」、只の道德ではない、理由のある道德である、同じ事をエペソ書に於て見る、其前の三章が教義の陳述であつて、後の三章が道德の唱道である、而して其道德が同じ詞を以て始つて居る、「然れば主に在りて囚人と成れる我れ汝等に勵む云々」と（四章一節）、同じ事を亦コロサイ書三章五節に於て見る、「然れば」「是故に」、深い教義の上に立つ道德である、意味の深い「然れば」である。

○「兄弟よ」、情を籠めたる話し掛けの詞である、師が弟子に臨むの態度ではない、兄弟が兄弟に對する時の口調である、パウロが「兄弟よ」と言ひ掛くる時に彼は必ず或る重大事を傳へんとする（七章一節、八章十二節、十章一節、十五章三十節、十六章十七節等）

○「我れ汝等に勸む」、「命ず」とは云はない、「勸む」と云ふ、希臘語の Parakalō、英語の exhort である、パウロは玆に基督教道德を命令として强んとして居ない、勸告として傳へんとして居る、兄弟の自由意志に訴へんとして居る、「勸む」は無きものを以て臨むのではない、既に在る者を喚起さんとするのである、パウロは教義を說いて道德は信者の內に既に在るものと假定して居るのである、或は說くの必要なからんも、說くは害なくして益ありとの態度である、道德を見ること至て輕くある、道德を教義の必然的結果と見るからである、基督教は律法でなくして福音である、パウロは玆にモーセの律法を繰返しつゝあるのではない、キリストの恩惠の福音を述べつゝある、故に道德を說くにあたつても「兄弟よ我れ汝等に勸む」と言ふのである。

○「神の諸々の慈悲（憐憫）をもて（に由て）」、「慈悲」、ギリシヤ語のオイクチルモスである、美はしい詞である、詩の百三篇十三節に「父が其子を憫むが如くエホバは己を畏るゝ者を憐み給ふ」とある其憐憫を意味する詞である、救拯は神の憐憫に因る、阿彌陀の慈悲、エホバの憐憫、弱者を憐むの心に至ては同一である、但し我等の神は燬盡す火であつて、其憐憫は義を以て現はる、故により深い、より確實なる憐憫である、此憐憫に對する謝恩としての道德である、宗教道德が純道德と異なる點は玆にある。

○「其身を……祭物として神に獻げよ」、基督教道德の發端は玆にある、先づ己が身を祭物（生贄）として神に獻ぐる事である、祭に種々ある、燔祭がある、素祭がある、罪祭がある、愆祭がある、酬恩祭がある、而して玆に云ふ祭物とは酬恩祭の祭物である、「人もし酬恩祭を獻ぐるに當りて牛をとりて之を獻ぐるならば牝牡に關はらずその全き者をエホバの前に供ふべし」とある、又羊にても山羊にても可なり、只其全き者たるを要す、事はレビ記第三章に詳かである、酬恩祭は燔祭の後に來る、而して信者の場合に於ては燔祭は世の罪を己に任ふて全き罪の犧牲となり給ひし神の供へ給ひし

羔イエスキリストを以て獻げられたのである、「汝犧牲と禮物を欲まず、唯我が然に體を備へ給ふ」とヘブル書十章五節に錄されたる其體、即ちキリストの體である、神は我等の獻ぐべき犧牲、即ち燔祭、罪祭、愆祭の犧牲を我等の爲に備へ給ひて、之れを我が獻ぐべき犧牲として納たまふのである、斯ぐして我等の燔祭は既に獻げられたれば、我等は今は酬恩祭の犧牲として我身を獻ぐべしとの事である、謝恩の爲の獻身である、信仰を以てキリストの贖罪の恩惠に與り、之に酬いんが爲に聖き生涯を送らんと欲するのである、信仰の結果たる道德である、神に對し義しき關係に入つて、其の必然の結果として起る聖き義しき生涯である、是が基督教道德である。

○「神の意に適ふ聖き活ける生贄」と云ふ、神の悅び給ふ祭物、彼の受納る所となる者、而して神は聖くあり給へば彼が悅んで受納れ給ふ祭物も亦聖くなければならない、而して生贄は活ける者たるを要す、此點に於て新約の生贄は舊約のそれと異なる、舊約にあつては牛や羊や山羊は宰られて火祭としてエホバの前に獻げられたが、新約に於ては信者は其身を活る儘にてイエスキリストの御父なる眞の神に獻ぐるのである、活きて善行の善き果を結ぶ祭物として神に獻ぐるのである、眞個の人身御供である、生きながら聖き神の聖き器として使はれん爲めの生贄である、是れ以上の尊き獻身のありやう筈がない。

○「是れ當然の祭なり」、「合理的の祭なり」とも譯する事が出來る、基督信者にも祭禮がある、それは日々の生涯である、而して是は信者當然の祭であつて、又最も合理的の祭である、眞の神を祭るに所謂祭禮によらず所謂祭物を以てせずして聖き義しき愛の生涯を以てす、基督教を迷信と呼ぶ者は誰か、又神を禮拜すると稱して日常の生涯は措て省ず、唯儀式儀禮に力をこめて神を悅ばし奉らんと欲する者は誰か、パウロの此一言は道德を宗教化すると同時に又宗教を實際化する者であつて、宗教的道德と合理的宗教とを同時に說く者である。

第四十七講約說

基督教道德の性質

○基督教道德の根柢は前講の通りである、即ち神の我等に施し給ひし諸の慈悲に對し、報恩の祭として我が身を活ける生贄として獻げまつる事である、然らば其性質如何、是れ第二節の明記する所である、「又此世に效ふ勿れ、汝等神の全く且つ善にして悅ぶべき旨を知らんが爲に心を化て新たにせよ」と。

○基督教道德に兩面がある、消極的と積極的である、消極的は「此世に效」はざる事である、積極的は「心を化て新たにす」る事である、此兩面なくして孰れの道德も健全なる事は出來ない、暗黑なき光明のなきやうに、汚穢を認めて之を避けんとせざる清潔の道はないのである。

○「此世に效ふ」、此一句に對する最も好き註解はヨハネ第一書二章十五―十七節に於ける使徒ヨハネの言である、曰く「此世或は此世に在る者を愛する勿れ、人もし此世を愛せば父を愛するの愛其裏に在るなし、凡そ世に在るもの、即ち肉體の慾、眼目の慾、勢力より起る驕傲、是等は皆父より出るに非ず、世より出るもの也、此世と其慾とは過ぎゆくものにて、神の旨を行ふ者は永遠に存るなり」と、原語は suschematizesthe と云ひて世と其變り行く狀（schema）を共にする勿れとの意である、世と流行を共にする勿れ、婦人の衣裳裝飾に日々に變り行く流行あるが如くに、世の思想にも亦流行がある、戰爭の流行する時、平和の流行する時、帝國主義の流行する時、デモクラシーの流行する時、勞働運動の流行する時、而して基督者は女も男も世と流行を共にする勿れと云ふのである、それは此世と其慾とは過ぎ行く（流れ行く）ものにして、永遠の生命を目的とする者の關はるべき者にあらざれば也、信者の墮落、教會の腐敗は常に「世に效ふ」即ち世と流行を共にするより來るのである。

○「心を化て新たにせよ」、これが基督教道德の積極的半面である、「心」は此場合に於ては靈ではない、心である、判斷力である、物の見方である、人生觀と云ひ、宇宙觀と云ふが如きものである、「汝の人生觀を一變して之を改めよ」と云ふならば能く原語の意味を通ずるであらう、即ち世人と全然其人生の見方を異にせよとの謂である、原語の metamorphousthe は英語の transform である、形即ち型（form）を變へよとの意である、狀は變る者、型は變らざる者、世の變り行く狀に效ふ勿れ、キリストの變らざる型に由りて汝の人生の見方を一新せよと、勿論靈に於て更生るに非れば心を化て新たにする事は出事ない、然し乍ら心が變らざれば、即ち人生觀が變らざれば行爲は改まらない、思想の變化は決して小事ではない、靈は心（思想）を經て行に現はれるのである、先づ靈に於て新たに生れ、其結果として思想が一變せられ、然る後に靈の果即善行が擧るのである、聖靈に由り人生の見方が一變して此世に效はんとするも能はないのである。

○認識の機關たる心（希臘語の nous、英語の mind）を化へて新たにせよ、是れ善にして悅ぶべき（彼の悅び給ふ）全き神の聖旨を識別せん爲である、神の聖旨を知つて之を行ふ、是が基督教的道德である、而して其聖旨たるや善たり美たり且つ完全なる者である、「上よりの智慧は第一に潔く、次に平和、寬容、柔順、且つ矜恤と善果に充ち、人を偏視ず、亦僞りなき者なり」とヤコブ書三章十七節に云ふ、「神の旨は即ち是なり、汝等の潔からん事なり」とテサロニケ前書四章三節に言ひ、「常に喜ぶべし、斷えず祈るべし、凡の事感謝すべし、是れ汝等に要め給ふ神の旨なり」と言ふ（同五章十六―

十八節)、其他神の旨に就て聖書の敎ふる所甚だ多し、而して此智慧を探り、此聖旨を知りて行ふべしと云ふ、玆に聖書の研究の必要があるのである、パウロは羅馬書十二章に於て信者の知的修養の必要を高調して居る、神を知るの智識は天然を知るの智識と等しく唯漠然として心に臨むのではない、是は潔められし智識に由て聖書の內に探るべき者である、然るに事實如何と云ふに、大抵の場合に於て、信者は深く神の聖旨を探らず、惡意なきを以て神の聖旨と認め、之を行つて神に仕へつゝあると信ず、然れども「エホバ宣はく、我が思は汝等の思と異なり、我が道は汝等の道と異なれり、天の地よりも高きが如く、我が道は汝等の道よりも高く我が思は汝等の思よりも高し」とイザヤ書五十五章八、九節に言ふが如し、而して其事を能く證明する者が羅馬書十二、十三章である、信者にして基督敎的道德は業に既に知悉せりと思ふ者が此等の章を研究して今さらながらに自己の無智に驚くのである、基督敎會は聖書の研究を怠りて、聖旨ならざる者を聖旨なりと想像して、自己に無限の危害を招きつつある。

○「獻げよ……效ふ勿れ……心を化よ」、「獻げよ」は動詞アオリスト動詞であつて、斷然意を決して一時に身を神に獻げよとの意である、「效ふ勿れ……化へよ」は中調現在動詞であつて、信仰的努力を繼續せよとの意である、獻身は一時的に決行すべきもの、行爲と改心とは常時連續的に實行すべきものである、世に效はざるを以て習慣とせよ、日々に心を新たにして又日々に新たにせよと、決心の後に永久的努力が續くのである。

○努力と云ひて自力の調ではない、世の流行の致す所となる勿れ、聖靈の恩化に身を委ねて其聖化する所となれよと、中調動詞の意味は如斯くに解すべきである(英譯參考)、信者は如何にして心を化て新たにする事が出來る乎、自己の奮鬪努力に由りてゞはない、自己以外の感化力に由てゞある、コリント後書三章十八節に曰へるが如し、「我等すべて帕子なくして鏡に映すが如く主の榮を見、榮に榮いや增りて其同じ像に化はる也、是れ主即ち御靈に由りてなり」と、主の榮を仰ぐのは我である、玆に我が努力が要る、然れども我を化する者は聖靈である、我は彼を仰ぐに由て彼の化する所となるのである、「心を化へよ」と譯せられし原語は如斯くに解すべき者であると思ふ、パウロの傳ふる道德は道德であるが明白なる福音的道德である、即ち主を仰瞻るに起る道德である。

附　中調的道德

羅馬書十二章二節の研究の補足として

歐羅巴語の文法に動詞の調(voice)と云ふものがある、調とは動詞の働きの性質を示す者であつ

て、之に普通三種ある、即ち動調（active voice）受動調（passive voice）及び中調（middle voice）是れである、『我れ行く』と云ふは動調である、我れ自らこのんで自力を以て行くの意である、『我れ行かせらる』と云ふは受動調である、我れ欲するも亦欲せざるも、或る他の者に行かしめらると云ふのである、『我れ自ら行かしめる』と云ふのが中調である、我に行くの力なきも自からこのんで或る他の者に己を任したれば、彼に由て行かしめらると云ふのである、簡短に之を言へば、動調は自力であり、受動調は他力であり、中調は自力と他力との共同的動作である。

汝等此世に效ふ勿れ（希臘語 suschematizesthe 英語 be ye not fashioned according to this world）と云ひ、心を化て新にせよ（希臘語 metamorphousthe、英語 be ye transformed by the renewing of your mind、と云ふ、此場合に於て『效ふ』も『化へる』も中調であつて、動調又は受動調でない、日本語で『效ふ勿れ』と言へば、動調に解せらるゝは勿論である、即ち汝等奮起努力して此世に效ふ勿れと解せらる、然れども是れ決して原語の意味でない、然ればとて是れ亦汝等自ら效ふに及ばず、待てば必ず他力に由りて世に效はざるに至るべしと云ふ事でない、動調でない又受動調でない、中調である、自力と他力との共働である、英語を以て言表はすならば Do not allow yourself to be conformed to this world である、汝自身を世に效はせらるゝやう許す勿れである、自力は何處に在るかと云ふならば自己を神に委ぬる所にある、或は自己を世に許さない點に於て在る、而して他力は何處に在るかと云ふならば神の御力を加へられて世に勝ち得る點に於て在る、任すは我が仕事であつて、我を通して行ひ給ふは神である、自力のみの道德と他力のみの道德とは半道德である、基督教道德は中調的動詞を以て言表はさるゝものであつて、信賴の自力に恩惠の他力を加へたる者である。

汝等此世に效ふ勿れ、汝等神に倚り恩惠の力に由り此世に傚はざらしめよ、汝等心を化へて新たにせよ、汝等身を彼に委ね聖靈を受けて彼に由りて新たに造られよ、事は文法の細微に渡るやうであるが、其内に深い大切なる眞理が含まれてあると思ふ。

第四十八講約說

基督教道德其一　謙遜

○「我に賜はりたる所の恩惠に由りて汝等各自に告ぐ、汝等思ふべき所を超て自己を高く思ふ勿れ、

神の各人に賜はりたる信仰の量に從ひて公平に思ふべし」と（羅馬書十二章三節）、基督教的謙遜を教へたる言である、基督教的道德第一は謙遜である、「基督教は謙遜の宗教なり」とカーライルは言ふた、「汝等キリストイエスの心を以て心とすべし、彼は神の貌にて在りしかども、自ら其の神と匹く在る所の事を棄がたき事と思はず、反て己を虛うし僕の貌を取りて人の如くなれり、既に人の如き形狀にて現はれ、己を卑くし、死に至るまで順ひ、十字架の死をさへ受くるに至れり」とパウロは言ふた、（ピリピ書二章五—八節）、主イエスは弟子等に告げて言ひ給ふた、「我は汝等の師また主なるに猶ほ汝等の足を濯ひたり、汝等も亦相互に足を濯ふべし」と（ヨハネ傳十三章十四節）、基督教以外の宗教又は道德に於て謙遜は美德として教へられないではないが、然し第一の美德としては教へられない、羅馬人の間に在りては和譯聖書に「謙りたる心」と譯せられし原語の tapeinophrosune は日本語の卑屈と云ふが如き低き卑しき詞であつた、然し乍ら十字架を以て代表されたる基督教に在りては此心こそ神の心であつて、之なくして人は他に如何なる美德を具ふるとも基督者たる事は出來ない。

○謙遜にも亦消極積極の兩方面がある、「高く思ふ勿れ」と云ふが其一面であり、「公平に思ふべし」と云ふが他の一面である、自己を眞價以上に思ふ勿れ、自己の何たるかを知れ、生れながらにして滅亡の子、恩惠に由りて赦されたる罪人、斯かる者は高ぶらんと欲するも能はず、人は先づ自己を知らざるべからずと言ふが、眞實に自己を知れば何人も謙らざるを得ない、自己の內に何か善きものを發見せりと思ふ者は未だ眞實に自己を知らない者である。

○然し乍ら謙るのみが謙遜ではない、「高く思ふ勿れ、公平に思ふべし」である、自己の分限を知るべし、謙ると云ひて自己を無視してはならない、神に造られ又贖はれたる我等は零ではない、神は我等各自に信仰を賜ひて信仰に應ふ特殊の賜物を賜ふた、信仰の量に從ひ己が天分を認むる事は高ぶりではない、本當の謙遜である、謙遜の積極的半面は自覺である、自任である、自己に就いて思ふべき所を超えて思はず、思ふべき範圍に於て、公平に、適宜に思ふ、それが本當の謙遜である。

○基督者はキリストに在りて一體である、之を稱してエクレジヤ（教會）と云ふ、而して之に多くの肢がある、眼がある、耳がある、口がある、心臟がある、肺臟がある、手がある、足がある、而して眼の謙遜とは眼を以て體の全部と認めず、又其主要部なりと思はず、眼たるの天分を知りて、物を視るの機關として全體の爲に盡す事である、哲學者ライプニッツの有機體の定義に曰く「有機體は其各部が同時に手段にして又目的たる者なり」と、眼は全體に仕へ、全體は眼に仕ふ、それがオルガニズムである、又エクレジヤである。

○而してキリストに於て一體たるエクレジヤの機關（肢）として預言者がある、役者がある、教師がある、勸師がある、慈善家がある、統率者がある、慰藉者がある、彼等は一體であつて亦相互に肢である、即ち相互に助け又助けらる、事はコリント前書第十二章に詳かである、此箇處の詳解として精